# 狸山の謎の少女

六角オセロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
狸山の謎の少女

【Ｎコード】
Ｎ１３０７Ｘ

【作者名】
六角オセロ

【あらすじ】
一男は受験生だった。謎の少女からの電話、それは危険な誘惑の電話だった。謎のカラスの大群。大地震と大津波。子供でも安心して読める内容のものになっています。残虐シーンや殺人などは、絶対にありません！ライトな小説です。レモンティーのような小説です。

## 謎の小さな少女

一男は焦っていた。母の声が耳に残っていた。
「私立は駄目だよ！うちには、そんな余裕はないんだからね。公立だよ、絶対に公立！」
来年は、いよいよ大学受験だった。
「公立か～～、行けるかな～～。」
一男はあまり自信がなかった。運動は得意だったが、勉強は得意ではなかった。
「頑張ってやるしきゃないか！」
机に向かったときだった。携帯電話（セルフォーン）が鳴った。
「うん、誰だろう？」それは知らない電話番号だった。
「どなたですか？」
「わたし、ユミといいます。」
「ユミちゃん？知らないな～～。」
「はじめまして。」
「はじめまして。」
「あなたに逢いたいんです。」
「はっ？」
「公園で待ってます。」
「はっ？」
「近くの弥生西公園で待ってます。」
「はっ？」電話は切れた。一方的だった。
「なんだよ。失礼な奴だな～～。」子供のような声だった。
「子供のイタズラだったのかな～？」
勉強を始めたが、気になってできなかった。
「弥生西公園か…」壁時計を見たら、四時だった。
「よし、知らん顔して、行ってみよう。」
玄関を出ようとしたら、母に呼び止められた。

「一男、どこに行くの？」
「ちょっと、コンビニまで。」
「ちゃんと勉強やってよ。わたしなんか受験前は毎日三時間やってたんだからね。」
「分かってるよ。」
「お父さんは、毎日四時間やってたのよ。そのくらいしないと駄目なの。」
「分かってるよ。すぐに戻るよ。」一男は出て行った。
弥生西公園は小さな公園だった。行ってみると、小さな子供が三人、砂場で遊んでいるだけで、他には誰もいなかった。
「な～～んだ、やっぱりイタズラか！」
大きなイチョウの木があった。その上から声が聞こえてきた。
「お兄ちゃん！」
上を見ると、七歳くらいの女の子が、高さ三メートルくらいの大きな枝に座っていた。
「危ないじゃないか、そんなところで？」
「大丈夫、平気！」
「どうやって登ったんだよ？」
「それは秘密！」と言うと、その枝にぶらさがって、ぴょんと飛び降りてきた。
「わ～～～、君って凄いね！」
昨日までのホットな夏の風から、急にクールになった秋の風が吹いていた。見知らぬ雑草が風に揺らいでいた。

## ただの小学生

「どうして、僕の名を知ってるの？」
少女は、近くのベンチに座った。足が浮いていた。
「あなた、狸山の稲荷神社に行ったでしょう？」
「ああ、確かに三日前の日曜日に、友達と遊びに行ったよ。」
「これ落としたでしょう？」
それは、英会話スクールの会員証だった。
「あっ、これ落としたんだ！」
「これに、名前と電話番号が書いてあったの。」
「なあんだ、そういうことか。」
「はい、あなたのものだから返すわ。」
「これ、稲荷神社のどこに落ちていたの？」
「イチョウの木の下。」
「あの大きなイチョウの木の」
「そう。あなた、あの大きなイチョウの木を何度も撫でたでしょう。」
「そういえば、撫でたかな～～。どうしてそんなことまで知ってるの？」
「近くで見ていたんです。」
「近くで？」
「とにかく、逢えて良かったわ～～。」
「これだけのために、わざわざやって来たの？」
「そう。」
「電話をすれば、取りに行ったのに。」
「あなたの顔が見たくなったの。どんな人かな～～と思って。」
「どんな人って、こんな人だよ。つまんない普通の人。」
「つまんない普通の人なんかじゃないわ。普通の人だったら、イチョウの木を何度も撫でたりはしないわ。」

「そうかな～～？」
「自分のことを、そんな風に言ったらいけないわ。」
「君って一体何者？どこに住んでいるの？」
「近くに住んでいるの。ただの小学生。」
「どこの小学生？」
「近くの小学生。」
「弥生小学校？」
「そうです。」
「あまり見たことないね～～。」
「そうですか。」
「これだけのために、ここまでやって来たの？」
「これだけじゃあありません。ついでにコンビニに買い物に来たんです。」
「コンビニだったら、僕もこれから行くところだよ。」
「わ～～良かったわ～～。一緒に行きましょう！」
「何を買いに行くの？」
「大好きな竹輪よ！」
「それだけ？」
「はい、そうです！」
少女はにこにこして張り切っていた。少女は違う方向に行こうとしたので、一男は呼び止めた。
「違う違う、こっち！」風が少し強くなって来た。
「一人で帰れるの？」
「帰れま～～す！」カラスが狸山に向かって飛んでいた。

## また少女からの電話

少女の買い物は、ほんとうに竹輪だけだった。一男は。コーラとポテトチップスを買った。
店員が少女を呼び止めた。
「お客さん、あと五円あと五円、消費税。」
「困ったな～～。百円に負けてくれませんか？」
「駄目ですよ～～。」
一男が少女に聞いた。
「お金、ないの？」
「ちょうど百円持って来たんです。」
「じゃあ、僕が払ってあげるよ。」
「ありがとうございま～～す！」
「ほんとうに竹輪だけでいいの？ジュースとか買ってあげようか？」
「わ～～、ほんと？」「いいよ。選んで。」
「じゃあ、おみかんのジュースがいいわ。」少女は楽しそうに選んだ。
「じゃあ、この箱のでいいわ。」
「これでいいの？もっと大きいのでもいいんだよ。」
「これでいいわ。」
二人はコンビニを出た。一男は少女のことが心配になった。
「お家まで送って行ってやるよ、どこ？」
「…じゃあ、公園まででいいです。」
「お家は、公園に近いの？」
「はい。」公園まで見送った。
「じゃあね！」
「どうもありがとうございました！」
少女はジュースを飲んでいた。「わ～～、おいしいわ～～！」
一男は振り返った。「あっそうだ。名前は何て言うの？」

「ユミで～～す！」
「あっ、そうか、さっき電話でそう言ってたね。」
「あ～～～、美味しかったわ！」
「そんなに？じゃあまた買ってあげるよ。」
「ありがとうございま～～～す！」
「じゃあね、ばいば～～～い！」
「ばいば～～い！」
振り向くと、少女は手を振り、まだバイバイしていた。一男も手を振った。
家に着くと、母が出てきた。「遅かったじゃない。何してたの？」
「ちょっと友達と話してたんだよ。」
「とにかく、さっさと勉強しなさい。受験はもうすぐよ！」
「分かってるよ。」
一男は、自分の部屋に戻ると、勉強を始めた。
「まったく、勉強勉強って、うるさいな～～。」一男はカレンダーを見た。
「大学大学って、大学に行っても仕事なんかないのにな～～。親は大学を出ると、いい仕事にありつけると思ってる。時代が違うんだよな～～。認識不足もいいところだよ。」
一男は、いつものようにぼやいていた。
「大震災で困っている人々がいるのに、俺だけ受験でいいのか？もっと社会のためにやることがあるんじゃないのかな～～。」
携帯電話（セルフォーン）が鳴った。さっきの少女からだった。「はい、もしもし。」
「さっきはどうもありがとうございました！」
「もう帰ったの？」「はい。また、お金を盗んで竹輪を買いに行きますので、そのときはよろしくね！」
「お金を盗んで！？」

## 高級竹輪三本

「お兄ちゃん、オヤツ。入ってもいい？」「いいよ。」
小学四年生の妹の幸子（さちこ）だった。
「おっ、巨峰か～～、いいな～。」
「お兄ちゃん、巨峰好きだからね。」
「この近くに、ユミっていう小学一年生くらいの女の子、知ってる？」
「知らないわ～～。」
「あっ、そう。」「どうしたの？」
「何でもない。」「変なの？」
一男は巨峰を食べ始めた。幸子は出て行った。
「あの子、竹輪なんか買ってどうするんだろう？オヤツに食べるのかな～～？」
何から何まで不思議な少女だった。
「ほんとうに、公園の近くに住んでいるのかな～～？」
一男は、あの少女がなんだか遠くにいるような気がしてきた。
「なんだか見ない少女だったよな～。」
不気味な想像が走った。
「もしかして、幽霊！」巨峰をごくっと飲み込んだ。
「そんなはずはないな。昼間っから、幽霊なんて出ないよな。」
翌日、一男は学校の帰りに弥生西公園に立ち寄った。ほぼ昨日と同じ時刻だった。
左手には、三百円の高級竹輪と昨日と同じオレンジジュースをレジ袋で持っていた。
公園には誰もいなかったので、一男は仕方なくベンチに座った。
「今日は待っても来ないか…」
少女が走って来るのが見えた。「来ましたよ～～～！」少女は右足を前に出し、急ブレーキで一男の前で止まった。

「さあ、お兄さん。竹輪を買いに行きましょう！」
「買いに行かなくっても、ここにあるよ。」「えっ、ほんと！？」
「ほらっ！」一男は差し出した。
「わ～～、大きな竹輪！三本も入ってる！コンビニの小さな竹輪五本と大分違うわ！」
少女は、とっても喜んでいた。
「これで、盗んだりしちゃあ駄目だよ。」
「もう盗んだりなんかしないわ！」
「どっから盗むの？」「…それは内緒。ばれたら叱られるわ。」
「叱る人がいるんだ？」「とっても怖い人がいるわ。」
「だったら、もう絶対にしないほうがいいよ。」
「なるべく、そうするわ。」
「なるべくじゃなくって、絶対に！」
「そうするわ。」「良かった。」
「どうもありがとう！この恩返しは必ずするわ。」「恩返しは、オーバーだよ。」
「必ずするわ！」「いいよ、いいよ！」「必ずするわ。」
「僕、勉強があるから、これで帰るね。さようなら！」「ありがとう、さようなら！」
一男が去った後、少女は美味しそうにオレンジジュースを飲みながら誰かを待っていた。カラスが飛んでいた。

## カラスの大群

翌日も一男は公園に行った。いつもの時間だった。一男は三十分待った。が、少女は現れなかった。
「しょうがない、帰ろう！」
一男は、高級竹輪とオレンジジュースを持っていた。
一男は家にたどり着くと、母にこっぴどく叱られた。
「遅かったじゃない。その一時間遅れが命取りになるのよ！」
一男は「ごめんなさい。」と言って、二階の自分の部屋に入った。
「まったく、勉強勉強って、頭に来ちゃうよ！」
携帯電話（セルフォーン）が鳴った。
「もしもし…」女の子からだった。
「ユミで～～す。こんにちわ。」
「こんにちわ。今日は来なかったね、どうしたの？」
「高級竹輪、あまり美味しくなかったわ。もういりません。」
「あっ、そう。」
電話は切れた。
「なんだ？ずいぶんと失礼な電話だな～。」
一男は、高級竹輪を取り出して、一本食べ始めた。「けっこう美味しいじゃん。」
一男は、なんだかむしゃくしゃしてきたので家を出た。
「どこに行くの？」
「ちょっと、コンビニまで。」
コンビニに着くと、少女を発見した。ちょうど出るところだった。
「あっ、あの少女だ！」一男は、こっそりと後を追った。少女は弥生西公園に入って行った。
そして、ベンチに腰掛けると、オレンジジュースを飲み始めた。
「美味しいわ～～。」
一男は公園の垣根に隠れ、黙って息を殺して見ていた。

少女は、竹輪をレジ袋から出して、楽しそうに眺めていた。
「なんだ、またあの竹輪を買ってるじゃないか。」
少女は誰かを待ってる感じだった。
「いったい、誰を待っているんだろう？」
パトカーが一男の近くで止まった。警官が出てきた。
「君、こんなところに隠れて何をやってるんだね？」
「いや、別に。」カラスの大群がやって来た。
「カラス観察です。来るのを待ってたんです。」
「カラスの観察？君の趣味？」「そうです。」
「このあたり、最近変な人が出るんだよ。」
「痴漢とかですか？」
「そう。君は違うみたいだね。」
「違いますよ～～！」
「そうだな、まだ暗くないしな。」
「失礼しちゃうな～～。」
「そういうことやってると、間違われるから気を付けてね！」
「はい、気を付けます！」
警官はパトカーに乗って去って行った。
一男は、ベンチを再度見た。少女はいなくなっていた。「あれ～～、どこに行ったんだろう？」
カラスの大群が、狸山に向かって飛んでいた。三人の五歳か六歳の子供たちが、童謡の七つの子を歌いながら歩いていた。男の子一人、女の子二人の、いつも砂場で遊んでる子供たちだった。

カラス　なぜ鳴くの　カラスは山に　可愛い　七つの子があるからよ
　可愛い　可愛いとカラスは鳴くの　可愛い　可愛いと鳴くんだよ
山の古巣へ　行って見てごらん　丸い目をしたいい子だよ

## クールな秋の風

少女は、十センチほどの大きさになり、カラスに乗っていた。竹輪の入ったレジ袋はカラスがくわえていた。
少女を乗せたカラスは、狸山の大きなイチョウの木の上で止った。
「どうもありがとう！はい一本あげるわ。」
少女は竹輪を一本、そのカラスにあげた。他のカラスが嫉妬して騒いでいた。少女も一本食べ始めた。
「やっぱり、コンビニの安い竹輪は美味しいわ。やっぱり、この味だわ。大きさも、ちょうどいいし。とにかく最高だわ。」
少女は、大きなイチョウの木の妖精だった。
下から大きな声で怒鳴ってる人がいた。この狸山稲荷神社の神主だった。
「こら～～！また賽銭を盗んだな！返せ～～！」
「盗んでなんかいません！」
「その食べてる竹輪が証拠じゃ。コンビニの百円の竹輪だろう！」
「これ、もらったんです。」
「嘘つけ！嘘つきは泥棒の始まり！もう泥棒だけどな。」
「百円くらいいいじゃないか、ケチんぼ神主！」
「なんだと～～！今度やったら空気銃で撃ち落とすからな！」
「お～～、怖！」
「妖精は妖精らしく、ドングリでも食べてろ！」
「だってあれ、渋くてまずいんだもん！」
「贅沢言うな！」
「このイチョウの木は、神社の中で一番有名なんですよ。」
「それがどうした？」
「だったら、もっと大切にしましょうよ。」
「分かった、分かった！」
神主は去って行った。カラスたちが、少女を声援するように騒いで

いた。イチョウの木はカラスたちの寝座(ねぐら)でもあった。
「二本は朝の分、あと二本は昼の分っと。」
少女は、アオゲラというキツツキが開けた穴に、残りの四本の竹輪を仕舞い込んだ。
「これで良しっと！」自分も、その穴に潜り込んだ。
「やっぱり我が家が一番だわ！」
日は、今にも暮れようとしていた。クールな秋の風が吹いていた。
「さて、一眠りしたら、夜の仕事にでかけましょう、っと！」

## 狸の雨宿り

それは、突然の大雨だった。少女は雨音に驚いて目を覚ました。
「わ～～～、大雨だわ。」
少女は近くにあったレジ袋で玄関を器用に塞いだ。
「凄い雨だわ。」
百円ショップで買った小さな時計を見ると、六時だった。
「あの子大丈夫かしら？」
少女は妖精仲間のミクのことを思い出した。
「電話してみようっと！」
少女は、妖精の伝達手段である電波を発した。ミクはすぐに出た。
「ミク、大丈夫？」
「今のところ大丈夫よ。」
「この雨じゃあ、とても仕事なんてできないわ。中止にしましょう。」
「そうね、中止にしましょう。」
「じゃあ、また明日！」「また明日ね！」
イチョウの木の近くの常夜灯だけが、周りを明るく照らしていた。
「神主はケチだからな～～。」
少女は、穴から顔を出して空を見上げた。
「まだ止みそうにはないわね。」
雨は、他の音を遮るように激しく降っていた。少女は山ぶどうの実を一つつまんで食べた、「すっぱい！」
雨は強く地面に当たり、雨粒が跳ね返っていた。雨水は、地面に多くの小さな流れを作っていた。
突然、カミナリが光り、激しく鳴り響いた。ゴロゴロゴロ～～！
「わ～～～、怖い！」
少女は身をすくめた。
「このイチョウの木、大丈夫かしら？」

イチョウの木の近くには小山があって、そこに避雷針が建てられていた。
「あの避雷針で大丈夫かしら？」
少女は不安になった。空が光り、またカミナリが鳴った。
「きゃ～～あ、怖いわ～～！」
同居のアオゲラが帰って来た。「邪魔だな～、このレジ袋！」嘴でくわえて、ぽいと外に放り投げた。
「あ～～、何するの！」「邪魔なの！」
「しょうがないな～～。遅かったじゃない？」
「暗くなって、道に迷ったんだよ。」
穴の中は、けっこう広かった。
「びしょ濡れじゃない！外ではたいてきてよ。」
アオゲラは、枝の上で水をはたいて入ってきた。
見かけない小鳥が、穴に入ろうとした。少女は叱った。
「駄目駄目！ここに入っちゃ駄目！」
アオゲラがつついて追い返した。
「こらっ、入るな！」「やっぱり、あなたがいないと駄目ね～。」
アオゲラは竹輪を見ていた。「あっ、また竹輪だ！こんなものどこが旨いのかね～～？」
少女は寂しそうに神社を見ていた。
「暗くなると、人は来なくなるね。」
「大雨だからだよ。」ザーザーと雨音だけが聞こえていた。
「これじゃあ、雨が入ってくるわ！」「じゃあ、ちょっと待って！」
アオゲラは外に出ると、葉の多くついた枝を運んできた。それを玄関に立てた。
「はい、これで大丈夫！」「あなたって器用ね～。」
狸が神社で大雨を見ながら雨宿りをしていた。

## ホームレスの共産主義者

一男は切れた。「まったく、勉強勉強って、うるさいな〜〜！」
「何言ってるの、あなた。勉強しないと、一生駄目になるのよ、それでもいいの？」
「大学出たって同じだよ。馬鹿は馬鹿のままなの！」
「馬鹿でも大学さえ出てればなんとかなるの。世の中ってそういうものなの。」
「大学なんて、もういいよ。止めた！」
「止めたって、あなたこれからどうするの？」
「就職するよ。」
「今どきは高卒で就職なんてないわよ。あっても零細企業。」
「零細企業のどこか悪いの？」
「だって、いつ倒産するか分からないじゃない。」
「それでもいいよ。」
「もし倒産したらどうするの？ホームレスになっちゃうわよ！」
「ホームレスのどこが悪いの？あの人たちは社会の犠牲者だよ。」
「犠牲者じゃなくって、社会の脱落者！」
「それは差別だよ。病気で働けない人だっているんだから。一生懸命に頑張ってる人だっているんだから。」
「負け犬になるのよ！それでもいいの！？」
「負け犬には生きる権利はないの？」
母も切れた。「世の中は、そんなに甘くはないのよ！」
「じゃあ僕はホームレスになって、ホームレスを助けることをするよ！みんなが平等の共産主義者になる！」
一男は出て行った。
一男は、弥生西公園にいた。友人の智明に電話をした。智明は自転車でやって来た。
「母親と口喧嘩しちゃってよ。」

「それで出てきたってわけ？何の喧嘩？」
「進路のこと、大学のこと。」「大学行くんだろう？」
「お前は？」「行く予定だけど。」
「勉強しろ勉強しろってうるさくて、切れちゃった。」
「それだけのことで？」
「ホームレスになって、共産主義者になる！って出て来ちゃった。」
「ホームレスで共産主義者？そりゃあ誰だって怒るよ。」
「そうかな～～？」
「怒るさ、最悪のパターンだよ。」
「共産主義者の、どこが最悪なの？」
「共産主義と言えば、北朝鮮だろう。」
「キューバだってあるよ。あそこは立派な国家だよ。」
「まあそうだけど、イメージがね悪いんだよ。なんだか、怠け者を助長してるみたいで。」
「そんなことはないよ。それは偏見だよ。」
「それに、ホームレスはいけないよ。」
「どうして？どこがいけないの？悪いことしてないじゃん。」
「どうしてって…かっこ悪いだろう？」
「そんなことないよ。それも偏見だよ。」
「なあ一男、ちょっと頭を冷やして考えろよ。」
一男は、天を仰ぎ見た。「人間って、どうやって生きればいいんだ？」
「一男、狸山に行こう！神社にお参り行こう！」
「狸山？今何時？」「まだ二時だよ。」
土曜日だった。二人は自転車で狸山に向かった。

# 空耳

狸山は二百十五メートルの山だった。稲荷神社は山の中腹にあった。ママチャリ三段ギアの一男は、途中で断念した。

「あ～～、もう駄目だ！」

マウンテンバイク十六段ギアの智明は、まだ自転車で登っていた。神社に辿り着いたのは、三時過ぎだった。一男は、持ってきた五百ミリリットルのペットボトルのコーラを飲んだ。

「やっぱり高いな～～、ここは！」

智明も、自転車に付いているアルミボトルの何かを飲んでいた。

「何それ？」「ただの麦茶。」

「あ～～、疲れた！」一男は階段の下を見ていた。

「自転車を下に止めて、階段で登ったほうがよかったんじゃないの？」

「まあね。」

二人は自転車を降りると、神社に向かった。一男は智明に質問した。

「前々から思ってたんだけど、稲荷神社の稲荷って、どういう意味なの？」

「稲荷神の神社のことだよ。」「稲荷神って？」

「穀物や食物の神様。」

「その神様って古いの？」

「古いって？」

「歴史。」「そんなことまでは知らない。」

「日本の神様？」「そう、日本の神様。」

二人は、お参りを簡単に済ませ戻って来た。神社の近くにある大きなイチョウの木の下で立ち止まった。

「この前も、ここで立ち止まったな～～。」

「神社をバックにして、携帯のカメラで撮ったよな～。」

一男は、前回と同じように、イチョウの木を撫で始めた。どこから

か声が聞こえた。「くすぐったい！」
「おまえ、今何か言った？」「いいや。」
「おっかしいな～～。」もう一度撫でてみた、「くすぐったい！」
「今、聞こえた？」「いいや、何も。」
「おっかしいな～～。空耳かな？」
どうやら、撫でた本人しか聞こえない声のようだった。
「今の声、この前の少女の声に似てたな～～。」
「おまえ、何言ってるの？変だよ。」
一男は、自分でも変だと思った。気が変になったのかと思った。智明が促した。
「さあ、ここにいても何にもないから帰ろう！」
「せっかくここまで来たんだから、狸小屋の狸を見て帰ろう。」
「そうだな。」
「餌をやると、ごほうびがもらえるらしいよ。」
「ごほうび？」「それは何だか分からない。」
餌は自動販売機で売っていた。芋とかニンジンとかが出てきた。
大きなイチョウの木の上のアオゲラがあけた穴から、小さくなった妖精の少女が二人を見ていた。

## レッツゴー！

「一男、あんまり変なこと考えるなよ。」
二人は、弥生西公園の前で別れた。一男は公園の中に入って行った。
一男は携帯電話の時計を見た。
「四時か～。このまま黙って帰って謝るのも癪(しゃく)だしな～～。どうしよう？」
コーラが残っていたので飲み干した。
突然、カラスの大群がやって来て、少女が走って現れた。少女は、一男の前で右足を前に出して急ブレーキで止った。
「久し振り～～！」「やあ、久し振りだね。」
「元気でしたか～～？」「元気だよ。」
「それはそれは良かったわ！」
「君、いつも走って来るね？」「はい。」
「どっから走って来るの？」「それは、秘密。」
「まあいいや。また竹輪買いに来たの？」
「そうで～～す！」「好きだね～～。」
「いけませんか？」少女は、いたずらっぽい目になっていた。
「まあ、いいけどね。」
「竹輪は、とっても美味しいわ～～。」「君って変わってるね。」
「そうですか～～？」
「じゃあ僕も、これからコンビニに行くから、一緒に行こう！」
「また、ポテトチップスとコーラを買うんですか～？」
「そうだよ。」「あなただって変わってるわ～～。」
「そうかな～～？」
「今日は、ジュースはいりません。」
「あっ、そう。」「自分で買います。」「あっ、そう。」
買い物をすると、二人はコンビニの前で別れた。
「じゃあ、まったね～～！」「ばいば～～い！」一男は少女の後を

追った。
「今度こそ、正体を見破ってやるぞ！」
少女は公園の中に入って行った。
一男は、公園の垣根に隠れて見ていた。パトカーに注意しながら。
少女が美味しそうにジュースを飲んでいると、カラスの大群がやって来た。
「あっ、またカラスだ！？」カラスは公園の中に舞い降りた。
少女の近くに舞い降りたカラスは、少女の持っていたレジ袋をくわえた。少女は飲み干したジュースのパックを近くのゴミ入れに投げ込むと、十センチくらいの大きさになって、そのカラスに飛び乗った。
一男は自分の目を疑った。「なんだなんだ！？」目を何度もこすった。
少女が「レッツゴー！」と叫ぶと、カラスたちは飛び去って行った。
「勉強ノイローゼで頭がおかしくなったみたいだ！」
一男は、狸山に向かって飛んで行くカラスたちを呆然と見ていた。
「こりゃ駄目だ。明日、病院に行こう！」

## 目の錯覚？

「ただいま～～。」「おかえりなさい。」
一男は元気がなかった。「どうしたの、一男？」
「母さん、僕もう駄目だ。」「どうしたの？」
「僕、頭が変になっちゃったみたいなんだ…」
「そうでしょう。いきなりホームレスになるなんて言うんだもん。」
「そうじゃなくって、頭が変なんなんだよ。」
「どうしたの？」
「変な物が見えるんだよ。小人とか…」
「えっ、なんですって？」
「明日、病院に行くよ。ついていってくんない？」
「いいけど、明日は病院は日曜日で休みよ。」
「あっそうか。じゃあ月曜日でいいよ。」
「いいわよ。」
「少し休んだほうがいいんじゃない？顔色悪いわよ。」
「そうするよ…」
一男は、二階の自分の部屋に入ると、布団を敷いて寝転んだ。母が心配して上がって来た。
「大丈夫？何か食べる？」
「何も欲しくない…」
「人間、疲れてくるとね、見えないものが見えてくるってことがあるのよ。」
「そうなのかな～。」
「目の錯覚ってやつよ。きっとあなた精神的に疲れているんだわ。」
「目の錯覚？そうなのかな～～？」
「きっとそうよ。母さんも悪かったわ。受験受験って追い立てて。」
「気にしてないよ。」
「さっきはごめんなさい。」

「僕こそ悪かったよ。余計なことまで言って。ほんとうはあんなこと思ってもいなかったんだよ。」
「そう、安心したわ。」
「お茶が飲みたくなったよ。」
「今持って来るね。今日は、ゆっくり休んでなさい。」
「そうするよ。」
「休んだら、きっと治るわ。元通りになるわ。」
母は下りて行った。
「目の錯覚か〜〜、そうなのかな〜？」
母が、お茶を持って来た。すぐに下りて行った。
「あの子、確かイチョウの木の下で拾ったって言ってたな〜。」
お茶を一口飲んだ。「イチョウの木の声、あの子の声とそっくりだったな〜。」
一男にはなんだか、本当のことのように思えてきた。

## 神社の仲間

妖精ミクは、神主が百円ショップで買った三百円の巣箱の中にいた。
部屋の中の掃除をいていた。
細いススキの枯れた茎や葉を敷いて、ベッドを作っていた。
「こんにちわ～、ミク！」「やあ、ユミ！」
ミクの巣箱は、神社のそばの桜の木の人間の目の高さくらいのところに取り付けられてあった。桜の木は、イチョウの木の次に大きな木だった。妖精は大きな木にしかいなかった。
「な～～んだ、この巣箱、プラスチックじゃない！」
「なんでもいいわ、雨風を凌げれば。」
「どうせ百円ショップで買ってきたんでしょう！」
「なんでもいいわ、住めれば。」
「神主、ケチだな～～。」
「ユミ、ちょっと入ってよ。とってもいいわよ。」
「どれどれ…」「ねっ、いいでしょう？」
「入ったら、けっこう広いのね。」「でしょう。」
「昨日の大雨は大丈夫だった？」
「大丈夫大丈夫、とっても大丈夫だったよ！」
「そう？」「雨がプラスチックをドラムみたいに叩いて、とっても面白かったわ。」
「そう。」「今度、雨の日に遊びに来てよ。」「そうするわ。」
「同居の小鳥、早く来ないかな～～。」
「一人じゃ寂しい？」「うん。ウグイスがいいな～～。」
「ウグイスか～～。」
「いつの間にか、秋の風になったわね～～。」「そうだね～～。」
「秋になると、なんだか切なく淋しくなってくるね。」
「そうでもないわ。わたし楽しくなってくるの。」「どうして？」
「だって、果物がた～～くさん実るでしょう！」「そうだね。」

妖精たちは、果物が大好きだった。
「昼間行ったら、ぶどうやイチジクが実っていたわ。」
「どこで？」「田辺さんとこの農園で。」
「じゃあ、夜のお仕事は何時からしましょう？」
「そうね～～、七時頃がいいんじゃないかしら？」「じゃあ、七時きっかりにここで。」
神主がやって来た。「やばい神主だ！じゃあ七時に来るね！」「待ってるよ！」
十センチのユミは消えた。妖精たちは、近距離なら消えて移動することができた。
「ユミだな、あいつの気配がしたぞ！」「違います。」
「まあいいや。今日は彼岸の入だから、おはぎを持ってきてやったよ。食べなさい。一つはミクの分、あと一つはユミの分だ。」
「ユミにもいいんですか？」
「いくら怒っても、神社の仲間だからな！」
「どうもありがとうございま～～す！」
神主は「泥棒はするなよ！」と言い残して帰って行った。
「ユミに電話しよっと！」
初秋の爽やかな風が吹いていた。小鳥たちが、ああでもないこうでもないそうであると、さえずり合っていた。

# 中庸の徳

日曜日だった。朝の十時過ぎだった。一男は二階の自分の部屋から、カラスの大群を見ていた。

「狸山のカラスだな。どこに行くんだろう？」

携帯電話（セルフォーン）が鳴った。女友達の由紀からだった。彼女は小学一年生からぼ友人で秀才だった。一男とは違う有名な進学校に通っていた。

「智明くんから電話があったんだけど、大丈夫？」

彼女は、智明とも小学一年生からの友人だった。三人組だった。

「智明が電話したんだな。大丈夫だよ。」

「ホームレスになって共産主義者になるんですって？」

「冗談だよ、冗談。」

「だったらいいんだけど、あなた時々極端なことやるから、昔から。心配になったのよ。」

「冗談だよ、冗談。」

「それならいいんだけど、とにかく裏表っていう考えは良くないわ。中庸の徳って言うでしょう。」

「ちゅうようのとく？」

「哲学者アリストテレスの言葉よ。つまり、不足も行き過ぎも駄目だってこと。」

「ああ、そういうことか。」「分かった？」

「分かった！ありがとう！やっぱり秀才は言うことが違うな～～。」

「何か悩み事があったら、いつでも電話して。」

「電話するよ、わざわざ、ありがとう！」

「じゃあね！」電話は切れた。

「ちゅうようの得ね…、インターネットで調べようっと！」

一男はインターネットで調べた。「中庸の徳か、なるほど、こういう字を書くのか…」

母が上がって来た。「一男、大丈夫？」

「大丈夫。ただのノイローゼだったみたい。」
「それなら良かったわ～～。」
「目の錯覚、たぶん精神的に疲れてたんだね！」
「元気になって良かったわ～～。お父さんからも叱られたわ。あんまり追い詰めるなって！」
「そんなこと言った？」
「一男は、昔から極端なことをするから、あんまり刺激するな、って。」
「極端なこと？するかな～～。」
「あなたは、昔から何でも極端だったわね。母さん、つい忘れてたわ。」
「もう大丈夫だよ、今日から、中庸の徳で行くから！」
「ちゅうようのとく？」
「なあんだ母さん知らないの？」
「知らない。誰の言葉？」
「哲学者アリストテレスの言葉！」
「どういう意味なの？」
「つまり、不足も行き過ぎも駄目だってこと。」
「なるほど、いい言葉だわ。」
「毎日三時間勉強したんでしょ？母さんの受験勉強も大したことないな～～。」
一男は、皮肉っぽく笑って見せた。母は、当惑した表情で笑っていた。隣の屋根から、一羽のカラスが二人を見ていた。

## ほいほいほいの、ほいほいほ～い♪

夜の七時だった。ユミは竹輪を一本食べてからミクのところにやって来た。

「あ～～～、美味しかったわ、竹輪！」「あなたって、竹輪好きね～～。」

「そうね～～、竹輪のない人生は闇ってところね。」「そっんなに！」

「さあ、出掛けましょう！泥棒に。」「はいはいはい！」

「準備オッケーかい？」「オッケーよ～～！」

「楽しい泥棒に出掛けましょう～～♪」「盗んで食べれば最高の味だ～～～♪」

二人は楽しく歌い出した。

ほいほいほいの　ほいほいほい♪

妖精は～盗み合って助け合う～～♪　仲良く盗み合って助け合う♪

こりゃあ～とってもいいことだ♪　ほいほいほいの　ほいほいほい♪

地球をみんなで守りましょう♪　みんなで仲良く取り合えば　平和な世界を築けます♪

ほいほいほいの　ほいほいほい♪

一生懸命に働けば地球の空気が汚れます♪　他の生物殺します♪

だから盗み合って助け合う♪

こりゃあ～とってもいいことだ♪　ほいほいほいの　ほいほいほい♪

欲張って働くと地球の空気が汚れます♪　地球の自然を壊します♪　だから盗み合って助け合う♪

こりゃあ～とってもいいことだ♪　ほいほいほいの　ほいほいほい♪

二人は、小学一年生の大きさになり、リュックの中にハサミを入れて、夜の仕事に楽しく出発した。
「ほいほいほいの、ほいほいほ～い♪」「ほいほいほいの、ほいほいほ～い♪」
「ここよ！」
農園は闇に包まり静まり返っていた。虫の声だけが聞こえていた。
二人は、十センチの大きさになった。ユミは魔法をかけた。
「リュックもハサミも小っちゃくな～～れ！」
ミクは目をぱちくりしていた。「暗くて、よく見えないわ。」
「十分ほど見てると見えてくるわ。」
目が暗闇に慣れてきた。「月明かりって、意外と明るいのね。」
「ミクちゃん、あなた毎回同じこと言ってるわ。」
「あら、そうかしら？」
ぶどうの棚が見えた。ミクは、そっちに行こうとした。
「駄目駄目、イチジクが先よ。」「どうして？」
「取りやすいからよ。もし途中でバレたら、何も取らずに帰ることになるでしょう。」
「そういうことか。」
イチジクの木の下に来た。「ユミ、高くて取れないわ。」
「大きくなりましょう。」二人は、小学一年生ほどの大きさになった。
「ミク、これで大丈夫。」
まだ少し背が足りなかった。下に生ってる実だけ取った。それぞれ十個だった。持ってきたリュックに入れた。
「今度はミクの好きなぶどうよ。」ミクは微笑んだ。ミクは、ぶどうの棚の下で手を伸ばした。
「駄目だ、とても届かないわ。」ユミは周りを見た。
「あそこに梯子が付いてるわ。あそこかから登って取るから、下で受け取ってちょうだい。」「うん。」

「ハサミちょうだい。」「はい、ハサミ。」
ユミは十房落とすと降りてきた。「五房づつよ。」「はい。」
「さあ、帰りましょう。」
夜の仕事は、ほいほいほいの、ほいほいほ〜い♪で終わった。

## アオゲラの巣穴

月曜日の朝だった。「あれ、お兄ちゃんは？」
「一男は今日は休み。学校の創立記念日なんだって。」
「そうなの。いいな～～。」
一男は十時に起きてきた。
「病院には行かなくっていいの？」
「行かなくっても大丈夫。ただのノイローゼだったみたい。」
遅い朝食を済ませると、出掛ける準備をしていた。
「あら、どこかに行くの？」
「ちょっと、狸山まで。」
「何しに行くの？」
「精神的ストレス解消と大学合格を頼みにね。」
「ってなこと言って、野鳥観察かなんかじゃないの？」
「あたり～～！」
「それもいいわね。気を付けて行ってらっしゃい！」
「すぐ帰ってくるよ。」
一男はママチャリで狸山に向かった。自宅から山のふもとまでは、約三キロの距離だった。
「マウンテンを買っておけば良かったな～。」
前籠にはバッグが入っていた。その中にはデジカメを入れてあった。
「マウンテンは、前籠がないからな…」
毎日変わる刻々と変わる景色や人の顔をを見ながら楽しく走っていると、いつの間にか狸山のふもとに着いた。
「ここからが大変だ！」
一男は坂の途中で自転車を降りた。一男は、神社の駐輪場に自転車を止めると、まっ先にイチョウの木に向かった。
イチョウの木の下には、ぶどうの実の皮が沢山落ちていた。
「なんだこりゃあ？」

一男の大好きな巨峰だった。「こんなところに捨てるなんて、撥が当たるぞ！」
一男は、イチョウの木を、下からしげしげと眺めた。べつだん変わったことのない普通のイチョウの木だった。
五メートルくらいの高さの幹に、キツツキの開けたらしい穴がある以外には。
「あれは、アオゲラの開けた穴だな。ひょっとすると、アオゲラの巣穴かな？」
一男は野鳥に詳しかった。デジカメをバッグから取り出した。
「あの穴を撮るか…」
ファインダーを覗いていると、急にアオゲラが飛び出してきた。
「わ～～～、びっくりした！」一男はカメラのシャッターを押した。
「やっぱり巣穴だったのか！お～～～、いいのが撮れたぞ！」
一男はイチョウの木を撫でた。
「どうもありがとう。」反応は無かった。
「変だな～～？」もう一度撫でた。やっぱり反応は無かった。
「これで当たり前か！」
一男は他の木に向かって歩きだした。
「やっぱりノイローゼで、耳も変になってたんだ。」
一男は、森全体を見ていた。
「ここは、野鳥が多いな～～。」
神社の屋根の上で、妖精のユミが一男を見ていた。「あの人、何しに来たのかしら？」

## 分かったぞ〜〜！

木の枝に止まり、雀よりもちょっと小さい、くちばしと首が短く丸っこ可愛いエナガが一男を逆観察していた。
ホーホケキョウ！
「うん？ウグイスか？」それは、ウグイスの鳴き真似をしている鳥だった。「なんだ、カケスか！」
妖精のユミは、相変わらず神社の屋根の上で一男を見ていた。「なんだ、鳥の観察か。」
一男は神社のほうにやって来た。
「あっ、こっちに来るわ。」ユミは身を伏せた。
神社の渡り廊下の近くに、大きな桜の木があった。地面の一男からは見上げる距離だった。
「なんだ、あの巣箱は？」一男は、よく見た。
「なんだか、プラスチックみたいだな〜〜。」
一男は笑い出した。「はっはっは、あれじゃあ小鳥は一生待ったって入って来ないよ！」
一男は、神社の裏のほうに向かって歩き出した。「小鳥は用心深いから、木の巣箱でないと入らないよ。」
振り返った。「まったく分かってないな〜、ここの神主は。」
一男が見えなくなると、ユミがミクの巣箱にやって来た。
「ミクちゃん、中にいたの？」
「いたわ、中で隠れていたわ。」
「巣箱を見て、何か言ってたみたいだけど？」
「プラスチックの巣箱じゃあ、一生待ったって小鳥は入らないって、言ってたわ。」
「ふ〜〜ん、そうなのかな〜〜？」
「あの人が言ってたこと、分かるような気がするわ。」
一男は、山の中腹を一回りすると、神社に戻って来た。

「何も不思議なものは無かったな〜〜。」
それから、ペットボトルのコーラを一口飲み、またイチョウの木の下にやって来た。
「あの少女、カラスに乗って狸山まで来て、それから、このイチョウの木…」
一男はイチョウの木を見上げた。
「少女の声とそっくりのイチョウの木の声…」
一男は、イチョウの木を撫でた。まったく反応は無かった。
「もしかしたら、少女はここからやって来て、ここに住んでいるのでは？」
一男は、ここでよくユーフォーが目撃されるのを知っていた。「もしかして、宇宙人！？」
一男は指を鳴らした。
「あの大きさの人間、雑誌で見たことある！分かったぞ、絶対に宇宙人だ！」
一男は急いで自転車に乗って、大声で「分かったぞ〜〜！」と叫びながら帰って行った。ユミは神社の屋根の上で、不思議そうに彼を見ていた。
「どうしたのかしら、あの人？」

## 第三の道！

「母さん！俺、中庸の徳ってやつで、大学でも就職でもない第三の道！専門学校に行くよ！」
「専門学校？何の？」
「インターネットの！」
「そんなのあるの？コンピュータの専門学校じゃないの？」
「ううん、インターネットの専門学校！」
「そんなの聞いたことないわよ～。」
「探せば絶対にあるよ。」
「コンピュータの学校だったら、母さんも知ってるけど…」
「コンピュータとかは、僕は苦手なんだよ。でも、インターネットなら得意なんだよ。」
「まあ、そういうところがあれば、別に母さんは反対しないけど。」
「これからは、ますますインターネットの時代だから！」
「まあ、そうだけど。」
「学校では、検索の鬼と言われてるんだから！」「検索の鬼？あら、そうなの？」
「じゃあ決まり！今からインターネットで探すよ！」
「まあ、何でもいいから、やって！ホームレスよりかましだわ。」
「それ言わないでよ～～！」
一男は二階に上がり、自分の部屋に入ると、パソコンの前に座り得意の検索を開始した。一男の検索スピードは一級品だった。
「あったあった！日本コミュニケーション大学。これだ！」
一男は急いで駆け下りて行った。
「母さ～～ん、あったよ～～！」母さんは喜んだ。
「お父さんが帰ったら、早速相談してみましょう！」「うん！」
「あ～～良かったわ～～、一男がホームレスにならなくって！」
「それ言わないでよ～～！」

「あなた、検索が得意なんでしょう。だったら検索専門の学校なんてないの？」
「そんなの、ないよ。」「それは残念！」二人は笑った。
一男は二階に上がって行った。
「日本コミュニケーション大学、日本コミュニケーション大学！」
一男は、友人の智明に電話した。「俺、専門学校に行くことにしたよ…」話は続いた。
「いろいろと心配かけて、ごめん！」
由紀にも同じような電話をした。「日本コミュニケーション大学？わたし調べてみるわ。」「用心深いな～～。」
「よ～～く調べてから、また返事するわ。」「じゃあ、お願いします！」
一男は冷静になって思った。
「最近は、詐欺みたいな学校も多いからな～～。やっぱり彼女は頭がいいな～～。」
一男は改めて彼女のことを思った。
「俺みたいなボンクラには、彼女のような頭のいいお嫁さんが必要だな～～。」
一男は、いつものように勝手なことを考えていた。考えが極端に走るのも、一雄の悪い癖だったが、勝手に妄想するのも、一男の悪い癖だった。

**ありがとう！**

由紀から電話がかかって来た。
「日本コミュニケーション大学なんだけど、資本金十億円もしっかりしてるし、歴史もけっこうあるし、と言っても五年だけど。インターネットでも評判もいいようだし、学生援護制度にも入っているし、大丈夫みたい。」
「ああそうなの。重要な情報、わざわざどうもありがとう！感謝してるよ！今度、君の好きなものを奢るね！」
「また何かあったら連絡して、どっちかというとメールのほうがいいんだけど。」
「分かった！」「じゃあね！」
「あっ、ちょっと聞きたいことがあるんだけど。」「なあに？」
「ユーフォー見たことある？」「あるわよ。以前、狸山で。」
「狸山？」「どういう感じのだったの？」
「まあ、テレビで見るような光る物体って感じだったかな。」
「何色だった？」「青っぽい色だったわ。」
「宇宙人は見たことある？」「そんなのないわ。」
「いつごろの話し？」「去年の夏。」
「今度、詳しく教えてくれない、その話し。」「いいけど、どうして？」
「実は、宇宙人を見たんだよ。」「どんな？」
「体長十センチくらいの。」「また～～～～あ！？」
「まあ、信用してくれなかったらいいけど。」
「目の錯覚かなんかじゃないの？」
「そうかも知れない。」
「きっとそうよ。もっとリラックスして休んだほうがいいわ。」
「ありがとう、そうするよ。」
「じゃあね！」電話は切れた。

彼女の話しを聞いて、やっぱり精神的ストレスからの目の錯覚かと思ったが、一男には妙な確信があった。
「あれは、絶対に目の錯覚なんかじゃない！」
約五分後、今度は智明から電話がかかってきた。
「宇宙人を見たんだって？」「ああ、見たよ。」
「どこで？」「弥生西公園で。」「いつもの、あそこの？」
「そう。」「どんなんだったの？」
「身長が十センチくらいだったよ。」
「ほんとに？」「ほんとだよ。」
「目の錯覚じゃないの？」
「この目で、確かに見たんだよ。」
「ホームレスの次は宇宙人か。」「ほんとなんだって！」
「で、どうなったの？」
「狸山のほうに、カラスに乗って行っちゃったよ。」
「カラスに乗って？」「そう、カラスに乗って。」
「じゃあ、それは宇宙人じゃないよ。宇宙人はカラスなんかには乗らないよ。」
「じゃあ、宇宙人じゃなかったら、何だ？」「分からない。」
「でも、宇宙人がカラスを改造したのかも知れないぞ。」
「カラスを改造？」
「宇宙人だったら、そのくらいはできるだろう？」
「また、一男の十八番の勝手な妄想が始まったな。」
「妄想なんかじゃないって、この目で確かに見たんだよ。」
「確かに、狸山はユーフォーの出現するところだけど…」
「絶対に宇宙人だったよ、あれは。」
「よし分かった！今度の日曜日にカラス山を調査に行こう！」
「ほんとうに行ってくれる？」
「昔からの友人だからな。見捨てるわけには行かないよ。」
「ありがとう！」
「じゃあ、今度の日曜日の朝九時に自転車でそっちに行くよ。」

「待ってるよ。」電話は切れた。

## 狸山キャンプ場

次の日曜日がやって来た。智明は九時きっかりにやって来た。一男は玄関先で待っていた。
「やあ、智明、悪い！」
「いいよ、いいよ。気にするなって！」
「勉強があったんだろう？」
「年中勉強なんかしてないよ。」
「それならいいんだけど…」
「気晴らしに、ちょうどいいよ。」
「そう。」
「日曜日くらい、自由に遊ばないと、精神的におかしくなっちゃうよ。」
「じゃあ、ほんとうにいいんだ？」
「いいに決まってるだろう。ここまで来たんだから。」
「じゃあ、出発しよう！」「出発しよう！」
空を見上げると、カラスの大群が飛んでいた。
「あっ、狸山のカラスだ！」
「いつも、どこに行くのかな～～？」
「いつも、この時間になると飛んでいるんだよな～～。」
「あれに宇宙人が乗ってたのかよ？」
「そうなんだよ、あれに乗って狸山に飛んで行ったんだよ。」
「狸山にね～～、いったい狸山に何があるのかな～～？」
二人の自転車は、弥生西公園の前を通って行った。いつもの三人組の子供たちが、公園で遊んでいた。
「子供のころを思い出すな～～。俺たちも、よくああやって公園で遊んでたよな～～。」「ああ、そうだな～～。」
狸山には、約三十分で着いた。まだ、山のふもとだったが。
「智明、どうする？自転車をここで止めて階段を登る？」

「またここまで来るのは面倒臭いよ。いつものように、車道を自転車で行こう！」
「分かった！」
急な坂だった。二人は、自転車を降りて、押しながら歩き始めた。
「なんでも、由紀ちゃん、狸山でユーフォーを見たらしいよ。」
「聞いたよ。去年の今頃の話しだろう。」
「どのあたりで見たのかな～～？」
「キャンプ場で見たって言ってたよ。」
「狸山のキャンプ場で？」「そう。」
「あんなところでね～～？何時ごろ？」
「夜の十時ごろって言ってたよ。」
神社に着いた。駐輪場に自転車を止めた。
「狸山は昼間はカラスはいないけど、夕方になると帰って来て、カラスだらけになるんだよ。」
「そうらしいね。どっから調べる？」「じゃあ、キャンプ場に行こう！」
キャンプ場は、神社の裏のほうにあった。神社が運営しているキャンプ場だった。
キャンプ場に行く前に一男は、大きなイチョウの木の下にやって来て、イチョウの木を触って撫でた。「この木を触るのが、ジンクスになっちゃったよ。」
「何かいいことあるの？」
「いいや別に。おまじないみたいなもんだね。」
一男はまたイチョウの木の下の巨峰の実の皮を発見した。
「あっ、また巨峰の皮だ？」「どうしたんだよ？」「この前、一人で来たときにもあったんだよ。」
一男は、木の上を見た。「アオゲラが食べたのかな～～？」
「アオゲラって？」「鳥の名前。」
「そんなことはどうでもいいよ。さあ行こう！」「ああ、分かった！」

二人は、キャンプ場に向かって歩きだした。妖精のユミとミクが神社の屋根から二人を見ていた。

## ユーフォーだ！

一男は急に振り返った。
「どうした、一男？」
「いや、ちょっと背中に視線を感じたもんで。」
智明は周りを見た。
「誰もいないよ。」「気のせいだな。」
ユミとミクは、屋根の上で二人を見ていた。
「キャンプ場に向かっているわ。」
「わたしたちも行きましょう！」
キャンプ場は神社から近かった。歩いて五分くらいのところにあった。キャンプ場の入口には、看板が立ててあった。

狸山キャンプ場は、青少年の皆さんが野外活動を通じて自然とふれあい
情操を豊かにし、心豊かな人間性を培うことを願って設置された施設です。

管理人などはいなかったので、黙って中に入れた。
キャンプ場の中には、一泊三千円の九人用バンガローが一棟、一泊二千円の5人用バンガローが一棟あった。
一泊千円の五人用のテントが十棟あって、炊事棟一棟、管理棟一棟、便所二棟、一棟は障害者用トイレ、キャンプファイヤー場が2ヶ所あった。キャンプ場の利用料は、大人が千円、二十歳未満が五百円になっていた。大人でも、学生証があれば、五百円になっていた。
管理棟から神主が出てきた。「君たち、何してるの？」
一男が答えた。「ちょっと、キャンプ場の見学に。」
「あっ、そう。だったらゆっくり見て行ってください。」

「はい、ありがとうございます！」
キャンプ場は、けっこう広かった。小さな庭に造られたような小川も流れていた。一男はキャンプ場は初めてだった。
「ここ意外と広いんだね。」
智明も初めてだった。「そうだね。」
キャンプ場は一年前にできたばかりだった。
「普通のものばかりで、変なものは見当たらないね。」
一男は、山の木を見ていた。「あっ、コンドルだ！」
「コンドルって、あのコンドルは飛んで行く、っていう歌の？」
「そう。こんなところにはいない鳥だよ。どうしてこんなところにいるんだろう？」
「密輸して飼ってたんじゃないか。それが逃げて。」
「そうかも知れないな。」

ユミとミクは、管理棟の屋根の上から、二人を見ていた。
「あの二人、いったい何してるんだろうね？」「何してるんだろうね？」
「何かを見てるわ。」「何を見てるんだろうね？」
ユミとミクの位置からは、コンドルは見えていなかった。
ユミとミクは、首をひねるばかりだった。
「神主がいないときに、ここのバーベキューで焼いた、盗んできたトウモロコシ、おいしかったな～～！」
「あれは、とってもとっても美味しかったわね～～～！」
「また、盗んでやろうね！」「うん！やろうやろう！」
少し高くなった丘の上に、それはあった。
「智明！なんだあれは！？」「ユーフォーだ！」

## 考えるのは時間の無駄

それは、ブリキのユーフォーだった。直径五メートルくらいの大きさのもので、三本の脚で立っていた。
「材質はブリキだ。よくできてるな〜〜。」
「これ、けっこう金かかってるよ。」
高さは、人間の大人の身長くらいあった。
「中に乗れるのかな〜〜。」
「乗ったら、きっと壊れるよ。そういう感じ。」
「そういう感じだな〜〜。」
「ほら、書いてあるよ。絶対に乗らないでください。壊れます、って。」
「やっぱり。」
「どうして、こんなの作ったんだろう？」
「きっと、ユーフォーの目撃場所として有名だから、あやかって作ったんじゃないの？」
「そのようだね。」
「つまり、キャンプ場の宣伝のためだよ。」
「これで、キャンプ場を、ますます有名にしようっていう魂胆だな。」
「ここの神主、商売上手だね〜〜。」
「でも、この模型を見て、本当のユーフォーが来るかもな。」
「こんなものじゃあ、来ないんじゃないの。」
「とても無理か？」「無理無理！」
「由紀ちゃん、ここで見たって言ってたね？」
「言ってた言ってた。」
「あの由紀ちゃんが言うんだから、嘘とか錯覚なんかじゃないよな。」
「そうだね。」

「でも、本当だとしたら、何しにここに来るんだろう？こんなところに？」
「何かあるんじゃないのかな～、ここに。」
「狸山に？」「そう。」
「それを探しに来たんだろう、俺たち。」
「それを探しに？そうだそれを探しに来たんだ！」
「じゃあ探しに行こう！」「行こう！」
二人は、それを探しに歩き出した。
「それって、何だ？」
「ユーフォーが必要とするもの。」
「じゃあ、物とは限らないな。」
「そうだな～～、物じゃないかも知れないな～～。」
「難しくなってきたぞ！」
「難しくなってきたな～。」
「もし、物じゃないとしたら、何だ？」
「何だろうね？」
二人は腕を組んで考え始めた。
ユミとミクは、管理棟の屋根の上から、二人を見ていた。
「あの人たち、何かを考え始めたわ。」
「何を考えているんだろうね？」
「人間って、いろいろと忙しいね～～。」
「やっぱり、わたしたち妖精とは大分違うわね～～。」
「なんでも盗めば楽なのにね。考える必要はなくなるのにね。」
「その通り！考えるのは馬鹿よ。時間の無駄だわ。」
「人間って、馬鹿なんだね。」
「盗んで暮らせば楽なのに、本当に馬鹿よ。」
一男と智明は、腕を組み、まだ考えていた。
「まだ考えているわ！」「ばっかみた～～い！」
ユミとミクは、顔を見合わせ、両手で口を押さえて大笑いをこらえていた。

## 聞き込み開始

「腕を組み、いったい何を考え語り合っているのかしら？」
「聞きに行きましょうか？」
「どっかいい場所はないかな～～？」
「ユミ、とってもいい場所を発見したわ！」
「どこ？」
「あのユーフォーの模型の中！」
「それはいいわね！」
ユミとミクは、消えて瞬間移動した。声が外に漏れるといけないので、テレパシーで話すことにした。
「わ～～あ、ここいいわね～～！」「最高だわ～～！」
外では、相変わらず、一男と智明が腕を組み、ブリキのユーフォーを睨みながら、考え語り合っていた。
「物じゃない、としたら…」
「物じゃない、としたら…」「心…」
「心？」「だけどな～～、心なんて、人間はほとんど同じだよな～～。」
「そうだよな～～。」
「ユーフォーが、狸山の誰かの心を求めて来るわけがないよな？」
「そうだよな～～。」
「ひょっとしたら、ここには人間以外の特殊な心があるんじゃないか？」
「人間以外の特殊な心？」
「人間ではない、何かの心が。」
「人間ではない、何かの心？」
「幽霊も人間だしな～～。」
「う～～ん、分からないな～～。」
「ユーフォーが探している心…」「いったい何だ？」

ユミとミクは、息を殺して二人の会話を聞いていた。ユミは、心の中で二人に話しかけていた。
『そ・れ・は、妖精の心だよ！』
「さっぱり分からないな～～。」
『ボケ！』「
「考えれば考えるほど、分からなくなってきたよ。」
『ボケ！』
「そんな心は、多分こんなところには無いな！」
『アホ！』
「心なんかじゃないよ。やっぱり物だよ」
「そうだな、やぱり物だな！」
「ここにいても仕方ない、探しに行こう！」
「探しに行こう！」二人は歩き出した。
「あの二人、行っちゃったよ。」
「馬鹿みたいな会話だったね～～。」
「何の会話だったの？」
「何の会話だったのかしらね？」
「人間同士の会話は、さっぱり分からないな～～。」
「ユーフォーが探している心、とか言ってたよね？」
「言ってた、言ってた！」
「いったい、何のことかしらね？」
「何のことだろうね？」
「それにしても、ユミ。」「なあに？」
「ここ、いいね。」
「このブリキのユーフォーの中？」
「そう。」「そうね～～、なかなか、いいわね～～。」
「ここ、わたしたちの別荘にしましょうね。」
「名案だわ！別荘にしましょう！」
「あの人たちを追って行かなくっていいの？」
「もういいわ、もうアホらしくって、アホらしくって。」

一男と智明は、キャンプ場内を何か不思議なものがないか探索していた。
「ここにはありそうにないな〜〜。」
「キョンプ場を出よう。」「そうしよう。」
二人はキャンプ場を出た。
「視点を変えて、ユーフォーじゃなくって、宇宙人が好みそうなものを探そう。」
「それは、いい考えだな。」
「そうだ、この辺りの人に直接聞こう。不思議なことがないかどうか。」
「それはいいね！」
二人は近くの田辺さんという農家の家に入っって行った。
「すみません、わたしたちユーフォーを研究している者ですが、この辺りで不思議なことってありませんでしたか？」
「不思議なことって言えば、あるよ。」
「どんなことが？」
「ときどき、果樹園の果物が盗まれるんだよ。」
「人間に盗まれるんじゃないですか？」
「人間じゃないみたいなんだよな〜〜。」
「どうして分かるんですか？」
「赤外線感知器に反応しないんだよ。」
「つまり、人間の体温を感知しないってことですね？」
「そういうことになるね。だから、監視カメラにも映っていないんだよ。」
「それは不思議ですね〜。」
「実に不思議なんだよ。」
「すみません、もっと詳しく教えてください！」
「いいよ。こっちも困ってたところだから。」

## 謎の果物泥棒

農家の田辺さん家の聞き込みは終わった。それから彼らは、他の農家を十件訪問した。ほとんど同じような内容の返事が返ってきた。
「不思議だな～～、みんな同じようなことを言ってるな～～。」
「つまり、人間じゃないものに盗まれてるってことか。」
「そういうことになるな。」
「やっぱり宇宙人かな～～？」
「宇宙人が果物を盗んでどうするんだ？」
「果物なんか食べるのかな～～？」
「ひょっとしたら、大好物かも知れないな～～。」
「そんな話し、聞いたことないよ。」
「でも、果物が目的だったら、別に狸山じゃなくってもいいわけだろう？」
「そういうことになるね。」
「それとも、狸山の果物には特別な何かがあるのかな？」
「そんなことはないと思うよ。同じだよ。」
「そうだよな～～。狸山の果物は特別に美味しいなんて聞いたことないしな。」
「それとも、狸山の果物には、別の何かがあるのかな～～？」
二人は、再び腕を組み考え始めた。
「とにかく、こういう貴重な情報を得ただけでも、今日は収穫だよ。」
「そういうことだな。」
二人は神社に帰ってきた。二人は、神社内のベンチに座った。
「宇宙人以外は考えられないな～～。」
「やっぱり宇宙人なのかな～～。」
二人は、腕を組み考え始めた。
「狸山の果物と宇宙人…」

「どういう関係があるんだろうな？」
ユミとミクは、もう神社に帰ってきていて、神社の屋根の反対側から、隠れて二人を見ていた。
「ま～～た、腕を組んで考えてるわ。」
「馬鹿みたい。」
「あ～～、おかしい。」「おっかしいわね～～。」
ユミとミクは、両手で口を押さえ、大笑いを必死で堪えていた。

「そうだ、由紀ちゃんに聞いてみよう！」
「そうだね、彼女は頭がいいから、俺たちとは違う考えがあるかも知れないね。」
「電話してみよう。」
「邪魔しないようにな。」「分かってる！」
智明は由紀に電話した。
「今、大丈夫？」「大丈夫よ、何？」
「ちょっと聞いてくれる？」「いいわよ、何？」
「今、一男と狸山にいるんだけど…」
「ああ、そうなの？」
「宇宙人のことについて調べているんだけど…」
「宇宙人？」
「不思議なことがあってね。ここらあたりの農家で果物が盗まれているんだけど、誰に盗まれているんだか分からないんだよ。盗難対策に赤外線の監視カメラで見張ってるらしいんだけど、その赤外線には反応していないんだよ。つまり、人間の体温がないってことなんだけど、どう思う由紀ちゃんは？」
「猿とかじゃないんだ？」
「猿だったら、体温があるから人間と同じように反応するよ。」
「う～～～ん。難しいな～～。」
「由紀ちゃんでも？」
「わたし理数系の人間じゃないから、そいうのは苦手なのよ。」

「ああ、そっか。悪かった！」
「そういうこと以外だったら、遠慮なく連絡して。」
「ありがとう！」
電話は切れた。「何だって？」「分からないって！」
二人は、また腕を組み考え始めた。
「謎の果物泥棒か～～、いったいどいう奴だ？」
「果物泥棒め、今頃どこで何してるのかな～～？」
ユミとミクは、相変わらず神社の屋根の反対側から、隠れて二人を見ていた。
「また、腕を組んで考え始めたわ。」
「いくら考えても無駄だって！時間の無駄！」
「いったい何を考えているのかしら？あ～～おかしい！」
「あの二人、完全なアホだね。」「そうみたいだね。」
果物泥棒のユミとミクは、両手で口を押さえ、大笑いを必死で堪えていた。

## 涙の隆次父さん

その日の夕食時だった。六時だった。珍しく家族全員で食事をしていた。
隆次父さんは美味そうにビールを飲んでいた。
「あ～～、美味しい！」
一男は、お茶を飲んでいた。「父さん、もう秋だよ。」
「秋のビールが、また美味しいんだよ！」
料理が運ばれてきた。
「さあ、食べよう！」
みんなは「いただきます！」と言うと食べ始めた。
「一男、進路を決めたそうじゃないか。専門学校なんだって？」
「うん、日本コミュニケーション大学って言う専門学校なんだよ。」
「何の学校なんだよ？」
「インターネットの学校なんだよ。」
「インターネットで勉強する大学なんかで大丈夫なのか？」
「違うよ、インターネットを勉強する学校。普通の通学する学校。」
「大学って、専門学校なんだろう？」
「そうだよ、名前は大学になってるけどね。」
「ほんとうに大丈夫なのか、その学校は？」
「由紀ちゃんが調べてくれたんだけど、資本金も十億だし評判もいいし、大丈夫だって言ってた。」
「そうか。あの秀才の由紀ちゃんが調べてくれたんだから、大丈夫だな。」
「これで、受験勉強しなくていいと思うと、身体の調子も良くなってきたよ。」
「そうか、そんなに苦しんでいたのか。その学校、入学試験とかはないのか？」
「ない、全員合格の無試験の学校なんだよ。」

「そういう学校もあるのか、それで本当に学校なのか？」
「学校だよ、ちゃんとした文部科学省の認可を受けてる学校だよ。」
「ほんとうに、文部科学省の認可を受けてる学校なのか？」
「インターネットで、ちゃんと調べたよ。」
「まあ、それならいいけどね。父さんは、お前がホームレスの共産主義者になるとか聞いたんで、びっくりしたよ。」
「それを言わないでよ～～。」
「まあ、若いときには、共産主義とかにはまるもんだ。そうだな～、風邪みたいなもんだな。」
「風邪？」
「俺なんかは堅物の真面目学生だったけど、大学時代は共産主義に溺れていくやつが大勢いたよ。あれは危険思想だな。」
「そうなの。」
「あれは、思春期の若者がかかる共産主義という病気だな。」
妻の映見が、食べながら口を挟んだ。
「隆次さんは、秀才だったのよ。」
「知ってるよ。」
「俺とお前は違うからな。一緒に考えるはよくない。これからは、大学出だってどうなるか分からない世の中だから、それでいいのかも知れないな…」
一男もみんなも、誇り高き隆次父さんの話しを黙って聞いていた。
隆次父さんは、戦い時の侍のように目をかっと見開いた。
「お前はお前なりに結論を出したことだ。父さんは、お前を信じてる。勉強ばかりが人生じゃない。色んな生き方がある。男だったら頑張れよ一男！負けるなよ、一男！」
「うん、頑張るよ！」
隆次父さんは、少し涙ぐんでいた。食事が終ると、誇り高き隆次父さんは酒を飲み始めた。「一男も大人になったな～～～！」
妻の映見がやって来た。
「あなた、わたしにも飲ませて！」

二人は、酒を交わし合いながら、お互い涙ぐんでいた。
「一男は、ああ見えても、しっかりしているから大丈夫ですよ。あなた！」
「…そうだな。」

## 瞬間移動

ユミとミクは、キャンプ場近くの農園で夜の仕事を終え、キャンプ場内を通り、神社に向かって歩いていた。夜の十時過ぎのことだった。

急に雨が降ってきた。ブリキのユーフォーの前だった。

「ちょうど良かったわ。ミクちゃん、ここで雨宿りしましょう！」

「ちょうど良かったね！」

ユミとミクは、リュックをユーフォーの中に押し込むと、十センチの大きさになってユーフォーの中に潜り込んだ。

雨が、ブリキのユーフォーを叩いていた。

「わ～～～、激しくなって来たわ～～！」

「どうしましょう？」

「しばらく、ここにいるしかないわ。」

雨がドンチャカドンチャカと激しくブリキを叩いていた。

「凄い音だわ～～！」

「なにせブリキだからね。」

「うわ～～！」「凄い音！」

二人は両手で耳を塞いだ。激しい雨は、十分ほどで止んだ。

「ミク、大分おさまってきたみたい。」

「良かったわ～～。」

リュックの中には果物が入っていた。

ミクは、そのリュックを見ていた。

「はやく大きくなって、この中の果物を食べたいわ。」

妖精は十センチの大きさのときには、花の蜜しか吸えなかった。大きくならないと、食べ物は食べられなかった。

リュックの中には、桃とみかんが入っていた。

「今日は収穫が少なかったわね。」

「こういうときもあります。」

「コスモスの花も持ってきたわ。これでも吸いましょう！」
ミクは、リュックが少し開いていたところから、コスモスの花を取り出した。
「はい、ユミの分！」「ありがとう！」
二人は、ブリキに当たる雨の音を聞きながら、花の蜜を器用に吸い始めた。
「おいしいわ～～！」「おいしいね～～！」
「これどこにあったの？」「キャンプ場の中よ。」
「だったら、泥棒じゃないわね。」「そうよ。」
「キャンプ場も、十時を過ぎると、不気味ね。」「不気味ね。」
キャンプ場には、客は一人もいなかった。管理棟だけが、電気の灯りがついていた。
「神主、いるのかしら？」「もういないでしょう。」
「電気はついてるわよ。」「いつもついてるのよ。」
雨は止みそうになかった。二人は我が家が恋しくなった。
「ユミ、このまま瞬間移動で帰りましょうよ。」「荷物はどうするの？」
「ここに置いておけばいいわ。後で取りに来るか、直接ここで食べるかにすればいいわ。」
「直接、ここで食べる！それはいい考えだわ。やっぱり、ミクはわたしより頭がいいわ。」
二人は、それぞれの我が家に消えて瞬間移動いた。

## 現実主義の幸子

次の日の月曜の夕刻だった。六時過ぎだった。隆次父さんは、珍しく早く帰って来た。
「ただいま〜〜！」「あら、早いわね〜〜！」
そこで、全員集合の夕食となった。
「あなた、どうしたの、こんなに早く帰って来て？」
「いや、たまには早く帰って、家族みんなのことを見ないと駄目だな〜〜と思ったんだよ。」
「どういうことかしら？」
「今度のことで、家族に目が行ってない。って痛感したんだよ。もっと家族サービスをしないとなって。」
妹の幸子は、不思議そうに父の横に座って、炭酸入りのブレープジュースを飲みながら、父を見ていた。
「なっ、幸子！」
「家族サービスって、何するの？」
「それを今、いろいろと考えているんだよ。幸子はどういうのがいい？」
「急に言われても分からないわ。」
「そうだろうな〜〜。父さんも分からないんだから。」
妻の映見が、お茶を持ってきた。
「早く帰ってくるだけでも、家族サービスじゃないんですか？」
「そうかも知れないな〜と思って帰って来たんだよ。」
「ちょっと、夕食の準備とかで面倒ですけどね。」
「なんだよ〜〜、ずいぶんじゃないか。せっかく早く帰って来たのに。」
一男が二階から下りてきた。
「父さん、もう帰って来たんだって？」
「よ〜〜、一男。どうだ身体の調子は？」

「ぜんぜん大丈夫。」
「そりゃあ良かった！」
一男は、父の反対側に座った。母が、お茶を出してくれた。
「はい、お茶。」「ありがとう。」
父は話題を変えた。「一男、狸山で変なことがあったんだって？」
「うん、あったよ。日曜日に智明と行ったんだけど、多くの農家の果物が何者かに盗まれるうだけど、犯人が分からないんだ、さっぱり。」
「猿とか猪とかじゃないのか？」
「あそこは、猿も猪もいないよ。いるのは狸だけ。」
「じゃあ、その狸じゃないのか？」
「狸だったら、赤外線に反応するよ。」
「反応しないのか？」「まったくしないらしいんだよ。」
「それは不思議だな～。」
「でしょう？」
「おまえ、宇宙人を見たんだって？」
「うん、見たよ。弥生西公園で。父さん、信じてくれるの？」
「ああ、信じるよ。おまえは、嘘をつけない性分だからな。」
「ありがとう。」
「で、どんな奴だった？」
「十センチくらいの奴で、カラスに乗って狸山に飛んで行ったんだよ。」
「カラスに乗って、狸山にか？」
「確かに見たんだよ。」
「ってことは、カラスも宇宙人の仲間ってことになるな？」
「僕は、狸山のカラスは、宇宙人に改造されたって思っているんだ。」
「なるほど、それはありえる話しだな。」
「でしょう。」
いたって現実主義の妹の幸子が発言した。「宇宙人なんか、いるわ

けないじゃん！」
父が、幸子に諭すように言った。
「物事を最初から決めつけていけないよ。人の話しをよく聞いてから、そして調べてからでないとね。」
「は～～～い！」
「由紀ちゃんも見たんだって？」
「それは、宇宙人じゃなくって、ユーフォー。」
「狸山のどこで？」
「キャンプ場で。」
「あそこ。キャンプ場があるのか？」
「去年できたんだよ。」
「よし、じゃあ今週の土曜日に、家族みんなで狸山にキャンプ場に行こう！そして一晩泊まろう！」
幸子が喜んだ。「わ～～～、キョンプ場に行って泊まるの～～！だったら、ユーフォーや宇宙人もいるかも知れないわ～～！」
いたって現実主義の幸子だった。みんなは幸子を見て笑っていた。

## 父さんの説教

隆次父さんは、二階に上がって行った。そして、一雄を前に説教は始まった。

「いいか一男、努力も大切だけど、世の中で一番大切なのは、一歩先を行く戦術なんだ。」

「一歩先を行く戦術？」

「そうだ戦術だ。先を読む戦術だ。」

「囲碁や将棋みたいに？」

「そうだ。ただ真面目に働けばいいってものじゃない。人や社会の先を読むことだ。読むだけでは駄目だ。読んで、行動を起こすことが大切だ。」

「他人より先を行くってこと？」

「そうだ。人間は仲間なんだが、同時に競争相手なんだ。油断したら蹴落される！」

「だから、戦術？」

「そういうことだ。そのためには知識も必要だが、それよりも知恵が必要だ。おまえ、俺よりも、将棋は強かったな。」

「まあね。」

「それで行け。俺には、あまりそういう能力はないが、おまえにはそういう先を読む知恵がある。」

「分かった！」

「人間というのは、困ったときには助け合うが、ちょっと贅沢になると、いがみ合いを始める変な生き物だ。」

一男は、黙って父の話しを聞いていた。

「人間は、いいところもあれば、悪いところもある変な生き物なんだ。だから、いいこともすれば、悪いこともする。そのことを決して忘れるな。」

更に話しは続いた。

「みんなが善人ばっかりだったら、全員平等の共産主義も有りうるだろう。だが現実はそうじゃない。現実の人間は、そうじゃない。取り締まる人間がいなければ、平気で泥棒もするし、獣のように他人を襲ったりもする。それが人間だ。」
更に話しは続いた。
「以前、三島由紀夫は、人間は他人の不幸を平気で見ていられるほどに強い。と言った。人間は本質的には、そういう動物だ。人間も動物である以上、動物の本能とはそういうものだ。それは、いいとか悪いとかいう問題ではない。ヒューマニズム以前の問題なんだ。」
更に話しは続いた。
「動物は、たとえばシマウマなどは、大勢で群れをなして生きているが、ライオンに一頭が襲われ食べられると、それ以上は逃げなくなるという。なぜだと思う？」
「なぜ？」
「一頭が食べられると、もう自分は食べられることがなくなって安心するからだよ。」
「あ～～あ、そういうこと！」
「動物とは、そういうものだ。そこには悲しみとかはない。生きる伸びる本能だけなんだ。」
さすがに、インテリの父の説教は鋭かった。一男は、黙って尊敬する隆次父さんの話しを聞いていた。

## 狸山キャンプ場

キャンプ場に行く土曜日がやって来た。みんなは、張り切って早くから起きていた。
「一男、予約は何時からだっけ？」
「十時だよ、朝の十時！」
「じゃあまだ早いな。」まだ七時だった。
「早く行ったっていいじゃない。狸山を見物してれば。」
「それもそうだな。じゃあ出掛けるか！」
隆次父さんは、自家用車ではなく、脚の運動を兼ねて、電車と徒歩で行くことにした。
「歩いていれば、十時にはなるな！」
妻の映見は、いつも電動自転車ばかり乗っていた。
「久し振りに歩きは疲れそうだわ。」
「おまえ、何言ってるんだよ。俺より若いのに。」
一番張り切っているのは、妹の幸子だった。足取りが、誰よりも軽かった。
「みんな～～遅いわ～～～！」
みんなは弥生駅から電車に乗った。狸山駅までは各駅停車で五つ目だった。すぐに着いた。
駅から降りたら、一男は先頭になって歩いていた。「ここから狸山まで歩きだよ。」
「どのくらいかかるんだ？」
「二十分くらいだよ。」「そんなに歩くのか？」「二十分なんて、すぐだよ。運動も兼ねて来たんでしょう？」
「まあな。」「狸山まで二十分って言っても、ふもとまでだよ。」
「あっ、そうか！」狸山は、すぐそこに見えていた。
「ほんとうに、てぶらで大丈夫なのか？」「大丈夫！」
「食材なんかも大丈夫なのか？」

「大丈夫、全部キャンプ場が用意しているんだよ。」
「一男、ふもとから階段もあるんだろう？」
「あるよ。」「何段くらいあるんだ？」
「数えたことないけど、五百段くらいかな？」
父は慌てた表情で道路を見ていた。手を挙げタクシーを止めた。
「みんな～、タクシーに乗るぞ！」
みんなは黙ってタクシーに乗った。
「狸山のキャンプ場まで！」「はい！」
あっという間に、狸山のキャンプ場に着いた。まだ、八時半だった。
四人は、キャンプ場の中に入って行った。誰もいなかった。
「誰もいないじゃないか！」一男はキャンプ場の駐車場を見ていた。
「まだ来ていないんじゃないの？」「そうだな～～。」
管理棟から、管理人らしい人間が出てきた。一男だけが知っていた。
「あっ、神主だ！」
父は頭を下げていた。「神主って？」
「神社の神主さん。ここの管理人。」
「おはようございま～～す。」「あなたたちは？」
「今日、五人用のバンガローを予約している若井です。
「あ～～～、若井さんね！」
「まだ早いとは思ったんですけど、気持ちが早ってやって来ました。
」
「予約は何時でしたっけ？」「十時です。」
「いいんですよ、いいんですよ。どうぞ、入って使ってください。」
神主は管理棟に走って戻って行った。すぐに小走りで戻って来た。
「これ、バンガローの鍵です。どうぞ、今から使ってください。」
「追加の料金は、ちゃんと払います！」
「いいんですよ、そんなものは。サービスです。」
「どうもありがとうございます！」
四人は、バンガローの中に入って行った。神主もついてきて中に入り、説明が始まった。

その頃、ユミとミクは、夜の仕事の疲れで、すやすやと朝寝坊をしていた。

## 意外な言葉

神主は一分足らずでバンガロー内の説明を終えた。それは、エアコンの使用説明だけだった。
それから神主は、みんなを外に出し、炊事場と便所を指差し教えた。
「テントはテント小屋にあります。自由に使って下さい。五人用まであります。一晩千円です。」
「何人用でも千円なんですか？」「五人用が千円で、一人減るごとに百円引きになってます。」
「じゃあ、一人だと、六百円ですね。」「はい。」神主は帰って行った。
四人は、バンガローの中に入って行った。妹の幸子がぼやいた。
「な～～～～んだ、ただのおんぼろ小屋じゃない！」幸子はバンガローは初めてだった。
畳はあったが、後はエアコンと冷蔵庫と、布団のセットが置いてあるだけだった。
父が教えた。「普通はバンガローは、畳もエアコンも冷蔵庫も布団もないんだよ。」
「そうなの～～？」贅沢に育ってる幸子には理解できなかった。
一男は、バンガローに泊まった経験があった。
「こんなもんなんだよ、幸子。そうがっかりするな！」
「あ～～あ、がっかり！」
隆次父さんは、窓から外を見ていた。
「ここにいてもしょうがないから、外に行ってみよう！」
みんなは外に出た。秋の爽やかな風が吹いていた。

その頃、ユミとミクは、大きなイチョウの木の下で、草むらに隠してあった七輪とフライパンを出して、ハンペンをバターで焼いていた。「ミクちゃん、これ美味しいのよ～～！」「そうなの？」

「もすぐ焼けるわ。」
箸で裏返しにすると、醤油をかけた。ジュ～～と音がして、醤油の焼けるいい匂いがしてきた。ミクは鼻に手を当てた。
「わ～～～あ、美味しそうな、いい匂いだわ～～～！」
「でしょう！」
「早く食べたいわ～～！」
ユミはフライパンを持ち上げ、近くの石の上に置くと、ちょっと時間を置いて冷ましてから、箸で器用に二つに切って、片方をミクに差し出した。「はい！」
妖精は皆、猫舌だった。ミクは手で取ると、食べ始めた。
「わ～～～あ、美味しいわ～～～！」
「でしょ～～う！」
ミクは、ハンペンを食べるのは初めてだった。
「寒くなると、こういう温ったかいものがいいね！」
「そうだね。」
ユミが食べ始めると、神主がやって来た。
「こらっ、何を食べてるんだ？」
ユミは叫んだ。「神主さんには、あげない！」
「そんなもの欲しくはないよ。ハンペンだな？」
二人の妖精は、黙々と食べていた。
「竹輪の次はハンペンか。変なものが好きだな～～。」
二人の妖精は、黙々と食べていた。
「また、賽銭を盗んだな！」
「盗んでなんかいません！」
「まあいい。邪魔はしないから、ゆっくり食べなさい。」
神主は帰って行った。ユミは、神主の意外な言葉に拍子抜けした。
「あれっ！？」

## ブリキのユーフォー

隆次父さんは。ブリキのユーフォーの近くで立ち止まった。
「なんだ、これは！？」
幸子は目を丸くして見ていた。
「わ～～～、これユーフォーだわ～～～！」
一男が説明した。
「これ、ブリキのユーフォー。」
「これ、ブリキでできているのか！？」
「そうみたい。触ったら分かるよ。」
隆次父さんは、近づいて触って、げんこつで叩いた。
「ほんとだ、ブリキだ！」
幸子は、やたらと喜んでいた。
「わ～～～、よくできてるわ～～～！」
ユーフォーの周りを、ぐるぐる触りながら周り始めた。
母の映見も、珍しそうに触っていた。
「ほんとうにブリキだわ、懐かしいわ～～！」
幸子が母に尋ねて来た。「どうして懐かしいの？」
「昔のオモチャはブリキでできてたのよ。」
「え～～、そうなの！？」
「どうして、こんなところにこんなのがあるんだ？」
一男が答えた。「キャンプ場の宣伝じゃないの？」
幸子は、ところどころに直径三十センチほどの穴から、中を覗いていた。
「わ～～～あ、ぶどうや梨が入っているわ～～～！」
「えっ！？」
「ほら見て、お兄ちゃん！」
一男は、別の穴から覗いた。「ほんとだ！？」
父も母も六つある別の穴から覗いた。

「何なんだ？」「何なんでしょう？」
「神主が入れたんじゃないのか？」
「どうしてこんなもの入れるの？」
「そうだな～～～？」
幸子が言った。「宇宙人が食べるんじゃないの？」
「おまえ、変なこと言うなよ。宇宙人が食べるわけないだろう。」
「どうして～～、宇宙人は果物が好きかも知れないじゃない。」
父は周りを眺めてた。
「よし分かった。誰かが隠すために入れたんだ！」
周りは綺麗な芝生になっていた。
「今夜は、この辺りにテントを張って、ユーフォーを待つか！」
一男はびっくりした。「ほんと、父さん！？」
「ああ、せっかくここまで来たんだからな。」
妻の映見が反対した。「あなた、夜になって来ると冷えるわよ。」
「冷えたって、まだ秋だから大したことはないよ。」
「じゃあ、あなた一人で頑張って！」
「なんだ、付き合いが悪いな～～。」「じょうだんじゃないわよ。こんなところで、風邪でも引いたらどうするの！？」
「じゃあ、僕付き合うよ！僕の責任だから。」
少し離れた草むらから、ユミとミクが彼らを見ていた。
「いつものあの人だわ。」「あの人の家族かしら？」「そうかも知れないね。」
「きっとキャンプに来たんだわ。」「そういう感じね。」

## お昼のバーベキュー

お昼になった。
「あなた、正午だわ。どうしましょう？」
隆次父さんは、冷蔵庫を開けた。肉とか野菜が入っていた。コーラやビールや、ペットボトルの緑茶も入っていた。
一男は喜んだ。「あっ、コーラだ！」父も喜んだ。「ビールだ！」
「じゃあ、バーベキューでもするか！」
幸子は大喜びした。「わ～～～あ、バーベキューだ～～～！」
若井家族は、食材を持ってバーベキュー場に向かった。近くには炊事場があった。木の椅子とテーブルがあった。
「映見、このピーマンとしいたけ、洗ってきてくれ。」「は～～い。」
父は、トウモロコシの皮を向き始めた。幸子は、不器用な父を不安そうに見ていた。
「わたしがやるわ！」
「そうか、悪いな～～。」
「お父さんは、肉でも焼いてて。」「分かった！」
神主が、お櫃を持ってやって来た。
「妻がつくって、おにぎりです。焼いて食べると美味しいですよ。食べてください。」
神主は、テーブルの上に置くと、蓋を開けた。おにぎりが、たくさん入っていた。幸子は喜んだ。
「わ～～～たくさん入ってる！」
「これも、料金のうちに入っています。安心してください。」
かくして、バーベキューは始まった。
「ほら、幸子！上カルビだ、おいしいぞ！」
幸子はタレに付けて食べた。「わ～～あ、おいしいわ～～！」
おにぎりも焼かれていた。「おにぎり、ちょうだい！」

みんなは、わいわいがやがや言いながら食べていた。
幸子は、ペットボトルの緑茶を見ていた。「温ったかい、お茶はないの？」
母の映見が教えた。
「炊事場の自動販売機にあるわ。粉末の緑茶やコーヒーを五十円で買って、お湯を入れればいいのよ。」
「お湯はあるの？」「ボタンを押せば出てくるわ。」
「お母さん、飲んだの？」
「さっき、試しにレモンティーを飲んだわ。」
一男が父に言った。「お客さん、僕たちだけみたいだね？」
「お昼過ぎから来るんじゃないのか？」
「そうかも知れないね。」
「たぶん、食事を済ませてから来るんだよ。」
「どうして分かるの？」
「今回のことで、そうしたほうがいいって分かったよ。」
面倒臭がり屋の隆次父さんは、しきりに自分一人で頷いていた。

その頃、ユミとミクは、大きなイチョウの木の下で、トウモロコシに醤油をつけて、七輪で焼いて食べていた。
「わ～～、美味しいわ～～！」「とっても。美味しいね～～！」

## 神主の涙

みんなが、わいわい言いながら食べていると、神主がやって来た。右手にスープジャーを持っていた。

「これ、女房が作った味噌汁です。食べてください。」

「えっ！？」「これは、サービスです。」

「どうもありがとうございます！」

神主は、すぐに帰ろうとした。隆次父さんは、ユーフォーの果物のことを思い出した。

「あっ、ちょっと待ってください。」「何でしょうか？」

「あそこにあるユーフォーの模型の中に、果物が入っているんですけど、何なんでしょうか？」

「果物？」「はい。」

神主は、ブリキのユーフォーに向かって歩きだした。中を覗きこむと直ぐに戻って来た。

「何もありませんよ。」

「えっ！？」隆次父さんは、走って見に行った。同じように、すぐに戻って来た。

「ほんとだ！？」「果物が入ってたんですか？」

「はい、ぶどうとか梨とか…」

「どのくらい？」

「けっこうありました。ぶどうが十房、梨が十個くらいです。」

「それは不思議だな～～～？」

神主は、さっしがついていた。「また、あいつらだな…」

「あいつらと言うと？」「いや、何でもありません。」

「ひょっとして、宇宙人では？」隆次父さんは、一男を信じていた。だから、宇宙人であって欲しいと願った。

「宇宙人？実は里子が二人いましてね～～。まだまだ子供で、ときどき変なことばっかりするんですよ。」

「あ〜〜あ、そうなんですか！」
「おそらく後で食べようと、隠しておいたんでしょう。」
「じゃあ、どうしてなくなったんでしょうかねえ？」
「きっと、移動したんでしょう。」
神主は神社の方向を見ていた。
「わたし、急に用を思い出しました。神社に帰りますので、もし用があったら、管理棟のインターホンを押してください。」「分かりました。」

ユミとミクは、大きなイチョウの木の下で、仲良く美味しそうに、お茶を飲んでいた。
「おいしいわね〜〜！」「おいしいわ〜〜！」
神主がやって来た。「こら、おまえたち、また果物を盗んだな！」
二人は黙っていた。
「黙っているのは、盗んだ証拠だ！そんなことやってたら、俺に迷惑がかかってくるじゃないか！」
二人は黙っていた。
「そんなに、果物が欲しいのか？」
ユミが言った。「わたしたち、盗んでなんかいません！」
「じゃあなんだ、このトウモロコシの食いかすは？」
二人は黙っていた。神主は、二人を急に哀れに思ってきた。急に涙が溢れてきた。
「わたしが悪かった！」神主は、手の甲で涙をぬぐっていた。
二人は、びっくりして、神主の顔を見ていた。
「分かった！これからは、果物も買ってやる！だから盗みなんかするな！」
「え〜〜、ほんと！？」「ほんとなの、神主さん！？」
「ああ、ほんとだ！神に誓って嘘は言わない！」
「神主さん、ありがとう！」「ありがとうございます！」
「お小遣いも、毎日二百円やる。だから賽銭なんか盗むな！」

「わ～～～、ほんと！？」「わ～～あ、嬉しいわ～～！」
神主は、涙を流しながら帰って行った。二人は、呆然と神主を見ていた。秋の爽やかな優しい風だった。

## 昼寝

「由紀ちゃんは、ここでユーフォーを見たんだな？」
「そうだよ、ここでだよ。」
「何時頃だ？」
「夜の十時。」
「じゃあそれまで起きておくか？」
「そうだね。」
「ところで、由紀チャンは、どこの大学を受けるんだ？」
「東京大学か京都大学って言ってたよ。駄目だったら、アメリカ留学って。」
「そうか、さすが由紀ちゃんだな。由紀チャンは、英語も堪能だしな。」
「父さん、どう思う？」
「これからは、国際化の時代だから、日本のガラパゴス大学よりも、アメリカや外国の大学のほうが、将来いいかも知れんな。日本の大学出ても、外国じゃあ通用しないからな。英語もろくに話せないし。」
「そうだね。」
「僕も英語が、もっとできたらな～～。」
「そんなに英語は駄目なのか？」
「まあ、ほとんど話せないね。」
「もっと、英語を勉強しろ！」「うん！」
「もし、アメリカに行きたいって言うんだったら、お金は出すぞ。」
「今は、あんまり行きたくない。」
「そうか。これからは、中国語なんかもいいかも知れんぞ。」
「そうだね。」
「中国は漢字を使っているからな、覚えやすいかも知れないな。」
「そうだね。」

「とにかく、他人と同じこととしてたら駄目だぞ！」
「はい！でも、あまり変わったこと言ったり、したりすると、変な目で見られるんだよな～～。」
「そんな目は無視しればいいじゃないか。馬鹿は相手にするな。」
「それが、けっこう難しんだよね～～。」
「じゃあ、一緒のふりだけしてればいいじゃないか。裏でこっそりやってれば。」
「それはいいかも。」
「とにかく馬鹿とは付き合うな。損するぞ！」
「うん、分かってる！」
人生に厳格な隆次父さんであった。母と幸子は黙って二人の話しを聞いていた。
後片付けが終わると、みんなはバンガローに戻って行った。
隆次父さんは、積まれてある布団を見ていた。
「なんだか眠くなってきた。野営に備えて、ちょっと寝るぞ。三時になったら起こしてくれ。」
父さんは、布団を敷いて寝転んだ。
「わたしも寝ようっと！」幸子も布団を敷いて寝転んだ。母も一男も、真似するように、布団を敷いて寝転んだ。
木の枝や草花を揺らす風の音と、小鳥のさえずりだけが聞こえていた。

その頃、ユミやミクたちも、自分の巣の中で、すやすやと昼寝をしていた。

## 超能力者ドン・セバスチャン

妖精たちは、大きな木が好きだった。なぜなら、蛇が巻きつくことができず登れなかったからだ。そして、木と木の間隔が大きい大きな木を好んだ。なぜなら、木の枝と木の枝が離れていて、蛇が枝から枝を渡ることができなくなるからだった。

ユミやミクは、神社の屋根から、人間を眺めるのが楽しみだった。その次に楽しみなのは、キョンプ場の近くの野原で、花の密を吸うことだった。

「ミクちゃん、キャンプ場に行きましょう！」「うん、行こう！」

二人は、キャンプ場の周りで花をつむと、ブリキのユーフォーの中に入った。

「ここ、やっぱりいいわね～～。」「おちつくわね～～。」

花の蜜を仲良く吸っていると、駐車場に三台の自動車がやって来て止った。

「お客さんだわ。」

「普通の自動車じゃないね？」

「そうだね～～、何かしら？」

その人たちは、キャンプ場の中に入って来た。テレビ局の取材クルーだった。

神主が、管理小屋から出てきた。

「いや～～あ、ジャパン・テレビの皆さん。ご苦労さまです！」

テレビ局の取材責任者らしい人物が、名刺を差し出した。

「朝の六時まで、よろしくおねがいします！」

「どうぞ、どうぞ。」

総勢六人のスタッフは、八人用のバンガローに入って行った。

「何なんだろう、あの人たち？」

「普通の、お客さんではなかったわね。」

六人のシタッフがバンガローから出てきた。ブリキのユーフォーに

向かっていた。
「ミク、こっちに来るわ！」
「近くの草むらに隠れましょう！」
「ミク、あそこがいいわ！」指差した。
二人は消えて瞬間移動した。
早速、ブリキのユーフォーの前でテレビ撮影が始まった。
「この方が、スペインの超能力者の、ドン・セバスチャンです。今回、ここ狸山で、ユーフォーを呼び寄せに、わざわざスペインから、お越しくださいました。どうですか。呼び寄せそうですか？」
通訳が入った。返事はすぐに来た。
「大丈夫だと言ってます。必ず成功するだろうと言ってます。」
「呼び寄せるのは、何時頃がよろしいでしょうか？」
通訳が入った。「夜中の一時頃がいいそうです。」
撮影は生放送ではなく録画だった。撮影は、神主を交えて他の場所に移った。
「ねっ、聞いたミク？ユーフォーを呼び寄せるんだって！」
「おもしろいわね～～！」
テレビスタッフは一通り撮影を終えると、バンガローの中に入って行った。どうやら、夜の撮影のために、寝たみたいだった。

## 大地震

夕方のバーベキューが終わり、若井家族はテレビスタッフと一緒にキャンプファイヤーをしていた。神主もいた。
零時四十五分になろうとしていた。若井家族は、皆起きていた。
アナウンサーらしき人が出てきて、撮影は始まった。
「では、これより、ドン・セバスチャン氏のテレパシーによる、ユーフォー呼び込みを始めます。」
彼は、目を閉じ天に右手をかざし、何かを祈ってる様子だった。声には発していなかった。
みんなに緊張が走った。皆、無言で彼を見ていた。

ユミとミクは、ブリキのユーフォーの中にいた。
「見て、始まったわ、ミク！」「どうなるんだろうね？」
一時を過ぎ、一時半になった。上空に変化はなかった。
彼は、両手を上げた。通訳に言った。
「みなさんも、テレパシーを送ってください。来てください、来てください！と。
みんなは、上空に向かって、「来てください、来てください！」と、テレパシーを送った。

「ミク、あの人たち、テレパシーを送っているわ。あんなテレパシーじゃ弱すぎるわ。」
「じゃあ、ユミ、わたしたちもテレパシーを送りましょう！」「それがいいわね。」
妖精のテレパシーは、人間の百倍強かった。
ドン・セバスチャン氏によるテレパシー送信は続いていた。
「あの人、超能力者なの？あの人のテレパシー弱すぎるわ！」「そのようね。」

ユミとミクは強く強くテレパシーを送った。
『早く来い来い、宇宙人さん、よっといで！』

突然、上空に青白く光る点が現れ、小さな光る玉になった。音はなかった。
みんなは一斉に見上げた。「ユーフォーだ！」
ユミとミクも、ブリキのユーフォーから出て、空を見上げた。
ユーフォーは高速で舞い降りて来た。そして、警告した。
『大地震が来ます！大地震が来ます！逃げてください！』
みんなは、びっくりした。お互い顔を見合わせた。ユミとミクも顔を見合わせた。
まもなく、地面が大きく揺れ、震度六強の地震が発生した。
「わ～～～地震だ～！」「きゃあ～～～あ！」

## 大津波

ユーフォーから浮遊光線が、みんなに発せられた。みんなは、宙に浮いた。
そのとき、ユミとミクは宙を舞っていた。妖精は、三十秒くらいは宙を舞うことができた。
「ミク、大丈夫！？」「だいじょうぶよ～～！」
ユミとミクは時間切れで舞い降りた。
「ミク、まだ揺れてるわ～～！」「怖いよ～～～！」二人は、その場にうずくまった。
「怖いよ～～！」「きゃあ～～、助けて～～～！」
揺れは、三分ほどでおさまった。
「ミク、止んだみたい。」「あ～～、怖かった！死ぬかと思ったわ！」
ユーフォーの浮遊光線で浮いていたみんなは、安全な場所に下ろされた。
ユーフォーは『まもなく大津波がやって来ます。ここにいたほうが安全です。』と言って、去って行った。
みんなは、ユーフォーに手を振って感謝した。
「ありがと～～う！」「ありがとう、宇宙人！」「ありがとう、ユーフォー！」
キャンプ場は、あちこちで地割れしていて危険だった。
「大津波が来るって言ってたな！」
「じゃあ、下は危ないぞ！」
「ここにいましょう。」
みんなは、ソーラー・ランタンや懐中電灯を持って、神社のほうに走った。
階段の前で立ち止まった。遠くに海が見えていた。大津波を警告するサイレンが鳴り響いていた。約一時間が過ぎた。海が盛り上がっ

てきた。
「津波だ～～～！」「津波が来たぞ～～！」
それは、恐ろしい勢いで、街を飲み込みながら押し寄せて来た。
「狸山まで来るぞ！」「ここまでは来ないわ！」
カラスが、木の上で騒いでいた。
階段は、地震による地割れのために途中で崩壊していた。そこで、多くの人々が右往左往していた。
「これじゃあ、上がってこれないわ！」「あそこまでは、水は来ないよ。大丈夫だよ！」
津波は、山のふもと辺りまで来たが、三十分ほどで引いて行った。
あちこちから、助けを呼ぶ声が聞こえていた。
「大変だわ～～、どうしましょう！？」
「これじゃあ、どうしようもできないよ。」
テレビスタッフは、この惨状を撮影していた。超能力者ドン・セバスチャンは、右往左往していた。
神社は瓦が落ちて半壊の状態だった。幸い、神主の妻は、一緒にユーフォーを見に来ていたので無事だった。
隆次父さんは、家族みんなに告げた。
「ここにいても仕方ない。バンガローに戻ろう！」
みんなはキャンプ場に戻って行った。
幸い、二棟のバンガローは、単純な作りのためか、無傷だった。
テレビスタッフも帰って来た。
三人が駐車場に向かった。隆次父さんは質問した。
「あの人たちは？」「道路状況の取材に行きました。」
「大変なことになりましたね。」「そうですね。」
その頃、ユミとミクは、管理小屋の屋根の上にいた。
「大変なことになったわね～～。」「いったい、どうなるのかしら？」
キャンプファイヤーは、まだ燃えていた。風は止み、不気味な雰囲気が漂っていた。

## ねぐら

電気は地震と同時に止まっていた。隆次父さんは、ソーラーランタンを二個灯した。
「弥生町の自宅、大丈夫かな〜〜？」
「おそらく駄目だろう。津波でやられているよ。」
一男は、智明に電話していた。
「もしもし…」
「何だって？」「駄目だ、繋がらない！」
由紀ちゃんにも電話した。
「何だって？」「駄目だ、繋がらない！」
一男は、携帯電話でワンセグを見ていた。
「どうだ、ニュースやってるか？」「駄目だ、入ってこない！」
「おそらくテレビ局もやられたんだろう。こんなときラジオがあったらな〜〜。」
「ラジオも同じじゃないの？」
「緊急時の優先順位は、ＡＭラジオのほうが高いんだよ。その次がテレビやＦＭになってるんだよ。それに、サブ局も都心から離れたところに置いてあるしな。」
「どうしてＡＭなの？」
「ＡＭは中波を使ってるから、電波がよく飛ぶんだよ。」
「中波って飛ぶんだ？」
「波長が長いほど飛ぶんだよ。」
母と妹の幸子は、部屋の隅っこで無言で抱き合っていた。
「とにかく、明るくなるのを寝て待とう！今、われわれにできることは、それだけだ。」
みんなは寝た。
「今日から、ここがわれわれの寝座（ねぐら）だ！」
隣のバンガローに三人のスタッフが帰って来たらしかった。声が聞

こえていた。
「駄目です！地割れと山崩れで通行できなくなってます！」
父さんは、ぼそっと話し出した。
「さっき、ユーフォーを見たんだけど、みんなも見たよな？」
「うん、見たよ。」「見ました。」「見たわ～～。」
「空中を飛んだんだけど、みんなも飛んだよな？」
「飛んだよ、確かに飛んだ！」
「飛びました。」
「飛んだわ！びっくりしたわ～～！」
「あのユーフォー、いったい何だったのかな～～？」
「僕たちに地震を知らせに来たみたいだったね。」
「守護霊みたいなユーフォーでしたね～～。」
「ユーフォーって、ほんとうにいたのね～～。」
「とにかく、ユーフォーを見に、ここまで来たから助かったようなものだ。ユーフォーにテレパシーを送って感謝しよう！」
みんなは、ユーフォーに向かって、感謝のテレパシーを送った。
幸子は何かを頬張っていた。
「幸子、何食べてんだよ？」「フルーツキャンデー。」
「俺にもくれ。」「父さんにも、くれ。」「わたしにも、ちょうだい。」
時々余震が来て、不安だらけだったが、キャンデーを頬張りながら、とにかく明日のために寝ることにした。
神主と彼の妻は、キャンプファイヤーの前で、空を見上げていた。
「ひょっとすると、あれはユーフォーなんかじゃなく、稲荷大明神だったかも知れんな。」
「そうかも知れませんね…」
火の始末をすると、二人は管理小屋に入って行った。神主だけ、すぐに出て来た。
神主は、管理小屋の横に、いつも置いてあるリアカーを引いて、神社の方に向かって行った。妻も出て来た。「あなた～～、わたしも

行くわ〜〜！」

二人は、神社に布団と毛布と枕を取りに行ったのだった。

ユミとミクは、自分の寝座（ねぐら）に帰って行った。

## 瓦礫の風景

朝がやって来た。最悪の日曜日だった。八時だった。神主がやって来た。

「おはようございます。」

みんなは「おはようございます。」と挨拶を返した。

「朝食を表に用意してあります。どうぞ食べに来てください。」

みんなは外に出た。テーブルの上には皿があり、ハムが二枚、たくあんが三切れ乗せてあるだけだった。

神主の奥さんが申し訳なさそうに謝った。「すみませんねえ、こんなものしか出せなくって。目玉焼きでもと思ったんですが、地震でみんな割れてしまって。」

ご飯と味噌汁が配られた。

隆次父さんは頭を下げて礼を言った。

「とんでもない。これだけで十分です。どうもありがとうございます！」

みんなも頭を下げて「ありがとうございます！」と礼を言った。

みんなは「いただきま～～す！」と言って食べ始めた。

湯呑みと、温ったかいお茶もあった。幸子は、お茶を飲んでから食べるのが癖だった。

「このお茶、おいしいわ～～。」

空気の爽やかな外で飲んで食べていると、何でも美味しく感じられた。

隆次はぼやいた。「こんなことになりさえしなければ、最高の朝なんだけどな～～。」

テレビ局の人も、隣のテーブルで同じ内容の食事をしていた。

神主と奥さんも、隆次父さんたちのテーブルで食べ始めた。隆次父さんが神主に質問した。

「水はあるんですか？」

「水は、キャンプ場の貯水タンクに貯まっていますから、一週間は大丈夫です。いざとなれば、小川も流れていますから。」
「それは頼もしいですね。」
食事が終わると、みんなは食器洗いをして、神社の方に向かった。
テレビスタッフも一緒だった。
階段のあるところからは、下界が見えていた。
風景は瓦礫の展示場と化していた。木造の家は殆んど流され、所々に鉄筋の建物があるだけになっていた。
母の映見は目を両手で覆った。「わ〜〜〜ひどいわ〜〜！」幸子も泣き出した。「家がなくなってるわ〜〜！」
その惨状は、ひどいものだった。何もかもが流され無くなっていた。カラスだけが、カァーカァー言いながら飛んでいた。
「これじゃあ、弥生町は完全に駄目だな。」
「あなた、これからどうしましょう！？」
「とうぶん、ここにいるしかないよ。」
幸子は、またも泣き出した。「ずっと、ここにいるの〜〜！」
「東京はどうなったのかな〜〜？」
テレビ局の人が答えた。「東京も震度六強で壊滅的だそうです。」
「そうですか！こりゃあ大変だ〜〜！」
一男は、茫然自失で無言で下界を見ていた。
ユミとミクは、大きなイチョウの木から下界を見ていた。
「町が無くなっているわ〜〜！」「大変なことになってるわ〜〜〜！」

## 妖精の恩返し

あの日は　いったいどこに行ったのだろう
仲良く砂浜で　遊んだ日々　いったいどこに行ったんだろう
あの日は帰らない　二度と帰らない　遠い日々　いつしか遊んだ遠い日々
ここには何もない　ただあるのは　思い出の　あの日あの時
心の中にある　あの日あの時　いつしか遊んだ遠い日々　どこに行ったのだろう

「ここにいて、瓦礫の風景ばかり見てても仕方ない。バンガローに戻ろう！」
テレビスタッフ三人だけが残り、瓦礫の風景を撮影していた。
みんなは、キャンプ場に戻って行った。
キャンプ場に戻ると、神主を中心に会議が始まった。
「皆さん、これから今後のことについて話し合いましょう。」
テレビ局の森本という取材責任者が、神主に尋ねた。
「食料は、現在どのくらいあるんですか？」
「米が、この人数で朝昼晩一膳として約一週間分あります。あとは食パンが一袋。かまぼこや豆腐や納豆などの細かなオカズ類が少々。あとは、お菓子類です。」
「じきに救助隊が来ると思いますので、お米が一週間分もあれば大丈夫だと思いますが。お味噌だけでも、オカズにはなりますから。」
「問題は、肉や魚や卵などのタンパク質です。」
「缶詰などは？」「ありません。」
「この近くには、肉とか魚を売ってるところはないんですか？」
「残念ながら、狸山にはそういうところはありません。」
「養鶏場なんかも？」

「ありません。あるのは、野菜や果物を栽培している農家だけです。」
「じゃあ、野菜や果物だったら、なんとかなるんですね？」
「はい、なんとか調達できると思います。」
森本は、テレビ局のスタッフに尋ねた。
「道は駄目かね？」「はい、完全に駄目です。ひどいものです。」
「そうか～～、駄目か…」
「味噌もタンパク質ですから。」
「そうですね。」
「そのうちに、必ず来ますよ、救助隊が。」
「そうですね、三日もあれば、ヘリが来るでしょう。三日くらいタンパク質を食べなくっても大丈夫ですね。」
会議は終わった。みんなは、バンガローに戻って行った。
神主だけは管理小屋には戻らずに、なぜか神社の方に戻って行った。
ユミとミクが、大きなイチョウの木の上で、下界を見ていると、神主がやって来た。
「君たちに頼みがある。」
ユミが答えた。「何ですか？」
「カラスに乗って、肉を買って来てくれないか？お金は、カラスに謝礼の餌代もやる。」
「分かりました！」
「そうか、ありがとう！」
カラスは五羽しかいなかった。他のカラスは皆出ていた。
ユミとミクは、残りのカラスたちと一緒にカラスに乗って飛び立った。
「ミク、ようやく人間に恩返しするときが来たわ！」「やっと役に立つときが来たのね！」
二人の妖精は、人間の役に立つことが嬉しくて、涙を浮かべていた。
ユミとミクを乗せたカラス救助隊は、舞うように飛び立ち、大空に勇ましく駆けて行った。

人間のために　今　妖精たちは飛び立つ　ただ人間の危機を救うために　人間の幸福のために
魂を失った人間のために　その魂を取り戻すために　未知の大空に飛び立つ
ただひたすらに人間を救うために　ただひたすらに人間を救うために　大空に飛び立つ

## ステンレスナイト

さあ泥棒の恩返しだ　さあ飛べ　未知なる青空に向かって
ほいほいほい～いの　ほいほいほ～～い♪

ユミとミクは、瓦礫のない町に向かって飛んでいた。テレパシーで語り合いながら。
「ミク、あそこにスーパーがあるわ。行きましょう！」
「ユミ、人が多過ぎるわ。もっと先の町に行きましょう！」
「駄目よ、これ以上行くと、他のカラスの縄張りになるわ。襲われて殺されるわ。」
スーパーの前には大勢の人が並んでいた。
「わ～～あ、凄い人だわ！」ちょっと離れたところにコンビニがあった。
「ミク、あそこのコンビニがいいわ。」「そうね。」
二人は、コンビニの裏に舞い下り、大きくなった。二人を乗せていたカラスは、コンビニの屋根の上に止った。
コンビニも大勢の人でいっぱいだった。だが、かろうじて肉はあった。二百グラムのが三パックしかなかったので、全部買った。それからバナナを買った。
「ユミ、このバナナは？」「カラスたちの、お駄賃。」
ユミとミクは、狸山に向かって飛び立った。

神主は、神社の前の階段に座って、ユミとミクを待っていた。
「遅いな～～、どうしたのかな～～、事故でもあったのかな～～？」
五羽のカラスが見えた。「おっ、帰って来たぞ！」
「ただいま～～、神主さん！」「ただいま～～！」
着地すると、大きくなってカラスがくわえてた買い物の肉の入った

レジ袋を手渡した。
「はい。」「ありがとう！」別のカラスが加えてたレジ袋に入った財布を取り、お釣りを神主に手渡した。
「たった、これだけかい？」「これだけしかなかったの。」
「そうか、これだけでも有難い、ありがとう！」
豚肉だった。「しょうがない、カレーライスでも作るか。」
「カレーライス！うえ～～～！」「うえ～～～！」
妖精はカレーも肉も大嫌いだった。

お昼は朝と同じような料理が出て、夕食の七時になった。遅い七時の夕食にしたのは、後で空腹になるだろうからという配慮からだった。神主はニコニコしていた。森本が尋ねた。「神主さん、何かいいことでもあったんですか？」
「みなさん、夕食は肉入りのカレーライスです！」
みんなは大喜びし歓声が上がった。幸子が一番喜んでいた。「え～～、ほんと～～～！」
森本が尋ねた。「肉はどうしたんですか？」
「冷凍室に冷凍の肉が入ってたんですよ。」
「そ～～おなんですか！」
みんなは、とってもとっても美味しくカレーライスを食べた。
肉にうるさい隆次父さんが感想を漏らした。「まるで新鮮な肉みたいだな～～。山の空気のせいかな？」
神主が答えた。「きっと、そうですよ。山の空気のせいです。」
みんなに笑顔が戻っていた。
ユミとミクは、ブリキのユーフォーの中から、みんなを見ていた。
「よかったね～～、ミク！」「よかったわ～～～。」
秋の夜空は、決して朽ちないステンレスのように綺麗に澄んでいた。

ステンレスナイト　魂を奪われたアンドロイドたちが
悲しみさえ　手探りで拾い集める夜

## 買出し隊出発！

おやすみなさい。と言う前に、テレビスタッフの責任者の森本が神主に提案した。
「うちの若いスタッフが、下まで買出しに歩いて行ってくると言ってるのですが、下まで歩いて行ける道ってあるんですか？」
「あるにはありますけど、通れるかどうかは？」
「狸山の地図とかはないんですか？」
「ありますよ。神社にありますけど、ひどい状態だからな～～。じゃあ、明日の朝探して持って来ましょう。」
「おねがいします。」
「狸山からは、高台になってるので、そっちの方面に行けば、大丈夫な店もあると思いますけど…」
「そうですね。」
「明日の朝、なるべく早く持ってきますよ。」
「おねがいします。」
次の日の朝がやってきた。朝の七時だった。早速、神主は地図を持ってやって来た。
「ありました、ありました！」
神主はバンガローの中に入って行った。折り畳んで置いてあった布団の上に広げた。
「この道と、この道です。」
「どっちの道が歩きやすいんですか？」「こっちの道です。」
スタッフの若い三人は熱心に見ていた。
「じゅあ、早速行って来ます！この地図、お借りします。」
「朝食を済ませてからにしてください。今家内が作っていますから。お腹が空くと途中で倒れますよ。」
テレビスタッフの責任者が命じた。「食事をしてからにしましょう！」

朝食は、小麦粉に砂糖と塩を加え牛乳と水で溶かしたものをフライパンで焼いたものと、梨と巨峰とコーヒーだった。
変な取合せだったが、みんなは喜んで食べた。特に、スペイン人のドン・セバスチャンは喜んでいた。
朝食が終ると、休みもせずにテレビスタッフの若い三人の買出し隊は出発した。
その頃、ユミとミクは上空からの町の観察も兼ねて、カラスに乗って空の散歩をしていた。
「ほいほいの、ほいほいほ〜〜い♪」「ほいほいの、ほいほいほ〜〜い♪」
この歌は、楽しいときにも悲しいときにも、同じだった。
「見てミク、あの人たち、歩いて下って行くわ！」「ほんとだ！？」
「どこに行くのかしら？」「きっと、お買い物だわ。」
「案内してあげましょうか？」「それはいいね。」
「あの人たち、無くなった道を行こうとしてるわ。」「教えましょう！」
ユミとミクはテレパシーを送った。「そっちじゃない、戻って！左よ！」「そっちの道は、もう無くなっているわ！」

「おい、今何か言った？」「いいや、でも聞こえたよ。」「ああ聞こえた。そっちじゃない、戻って！左よ！って。」
「俺にも聞こえたよ。そっちの道は、もう無くなっているわ！って。」
上空を見上げると、けっこう高いところでカラスが二羽飛んでいた。
「また、宇宙人かな？」「そうかも知れないな。」「きっとそうだよ。三人に同時に聞こえたんだから。」
「あのカラスかも知れないぞ。」「そうかも知れないな。」
三人はカラスに手を振った。「どうもありがと〜〜う！宇宙人さ〜〜ん！」
ユミとミクの指示で、三人は無事に下りることができた。彼らを見

届けると、ユミとミクは神社に戻って行った。

## 魔界を憂う歌

ユミとミクが空の散歩から帰って来ると、神主が待ち構えていた。
「おはよう！」
「おはようございます。」「おはようございます。」
「空の散歩は楽しかったかね？」
「はい、とっても。」
「とっても楽しかったです。」
「いいな～～君たちは、カラスに乗れて。」
「神主さん、今日は買い物はないんですか？」
「今日はいいや。テレビ局の若い人たちが買出しに行ったから。」
「その人たち、さっき空から見ました。下に着くまで見ていました。」
「あっ、そう。無事に下まで行ったかね？」
「はい、行きました。」
「それは良かった。」
「聞こえますか、神主さん？」
「えっ、何が？」
「植物たちの悲しみの声が、そしt歌が？」
「いや、ぜんぜん聞こえないよ。」
「今、植物たちは、瓦礫の町を感じて泣いています。」
「えっ、そうなのかい？」「はい。」
「魔界を憂う歌を歌っているんです。」
「魔界を憂う歌？」
「かすかに聞こえてるはずです、神主さんにも。」
神主は、そう言われると、なんだか聞こえているような気がしてきた。
「見てください。風もないのに木の葉が揺れているでしょう。」
「あっ、ほんとだ！」

神主は、不気味な何かを感じていた。
「植物たちは、強く必死に根を張り、この山を守ろうとしています。」
「そうなのかい？」
「はい！」
「この山は、植物たちを育ててくれてる大事な母親なのです。」
そして、ユミとミクも、魔界を憂う歌を歌いだした。

憂うことなかれ　憂うことなかれ　今こそ大地に強く根を張り
たくましく生きよう
われら大地の子　盗み合い助け合い生きる　強き大地の子

## 積乱雲

「あっ、風が笑っているわ。」
「風が笑ってる？」
「天気がいい日には、風は笑いながら吹くの。」
「そうなの？」
「だから、風に聞けば、その日の天気がわかるの。」
「じゃあ、今日は天気がいいんだね。」
「はい、そうです。」
「じゃあ、雨の日には泣いてるの？」
「怒っています。」

買出しに行った、テレビ局の三人のスタッフは、お昼前に帰って来た。
肉や魚は、腐るので少ししか買って来なかったが、レトルトのカレーや牛丼やパンやジャムや缶詰などを買って来た。
その中には、秋刀魚も十二尾入っていた。
「神主さん、このサンマ、昼食か夕食に使ってください。早く食べないと腐りますから。」
「分かった！早速、お昼に焼きましょう！」
三人が担いで来たので、けっこうの色んな物があった。
昼食は、ご飯と焼き秋刀魚とたくあん二切れと味噌汁になった。その後、お菓子一個と、キャンデー三つが配られた。
幸子は不服を言った。
「な～～んだ、お菓子たった一個？」
龍次父さんが叱った。
「贅沢を言うんじゃない！食べられない人だって、たくさんいるんだから！」「は～い！」
一男は、テーブルの椅子に座ったままで、何かを思いつめたように

考えていた。
母が声をかけた。「一男、どうしたの？」
「弥生町の、三人組の子供たち、どうなったのかな～～って思って。」
「ああ、あの子たちね。どうなったのかしらね～～。無事でいることを祈るわ。」
「そうだね～～、無事でいて欲しいね。」
テレビ局のスタッフがやって来た。
「歯ブラシと練り歯磨きです。使ってください。」
「これは？」
「今日、買って来たんです。」歯ブラシは四本あった。
「そうですか。ちょうど欲しかったところなんです。どうもありがとうございます。」
テレビスタッフの人たちは、隣のテーブルで美味しそうにコーヒーを飲んでいた。
神主も立って飲んでいた。
「今日は大変でしたね～～。」
「農家の人も歩いてました。やっぱり買出しでした。」
「そうですか。歩きしかありませんからね。」
神主がコーヒーを飲みながら、若井家族のテーブルにやって来た。
若井家族も、お茶やコーヒーを飲んでいた。
「お身体の調子の悪い方はいませんか？」
父が答えた。「大丈夫です。今のところ、みんな健康です。」
「薬はありますから、早めに言ってください。」
「はい、ありがとうございます。ところで神主さん。」
「はい、何でしょうか？」
「里子さんが二人いらっしゃるそうですが、どうしてるんですか？」
「あ～～～あ、近所の農家にあづけているんですよ。家が滅茶苦茶で危ないもので。」
「ああ、そうなんですか。」

「あっ、そうだ。神社に取りにいくものがあるんだ！」
神主は、神社に帰って行った。

ユミとミクは、ハンペンをフライパンでバターで焼いて食べていた。
「おいしいわね～～～！」「おいしいわ～～！」お茶を飲みながら。
神主がやって来た。
「おいしそうだね～～。」
ユミは風を見ていた。「風が怒ってるわ！」
「どうしたの？」
「神主さん、これから大嵐が来るわ！」
神主は空を見た。遠くの方に積乱雲が見えていた。

## 目つけやがって！

若井家族が、いろいろと話し合ってると、神主がやって来た。
「これから、大嵐が来るそうです。気を付けてください。」
父が答えた。「はい。ところで神主さん。」
「はい、何でしょうか？」
「買い物の代金を払おうと思っているのですが、直接隣に行ったほうがいいでしょうか？」
「あ～～そうですね～～。わたしも払わないといけないので、分担して払いましょう。」
「はい、それでよければ。」
「今、どのくらいかかったか聞いて来ます。」
「よろしくおねがいします。」
神主は、隣のバンガローに行くと、すぐに戻って来た。
「二万四千円かかったそうです。ですから、十二人分で割ると、一人2千円ですから、若井さんのところは、八千円ということになります。よろしいでしょうか？」
「よろしいです。足代などは？」
「こういうときだから、いいそうです。」
「そうですか、では…」龍次父さんは、財布から八千円を出して渡した。
「確かに、お預かりしました。領収書などは？」
「いいです。」
「じゃあ、すぐに隣に持って行きます。」
「よろしくおねがいします。」
すぐに戻って来た。
「ちゃんと、払っておきました。」
「すみません。あの～～う、天気の情報はどこで？」
「ＡＭラジオです。」

「ＡＭはやってるんですね？」
「地震直後からやってます。」
「あ～～そうなんですか。」
「大嵐が来るそうですので、くれぐれも。」
「はい。」
神主は出て行った。

「ミク、あなたの家では危ないわ。わたしの家のほうが安全だわ。一緒にいましょう！」
「ありがとう、そうするわ。」
空は暗くなり、風が踊り狂い始め、雨が地面に叩きつけ、大嵐がやって来た。

大嵐がやって来た　こりゃあ大変だ　こりゃあてえへんだ
嵐のときには　決して雲を見てはいけない　なぜなら雷神様が怒るからだ
目つけやがって！と怒るからだ　怒って神鳴りをドカン！と落とすからだ

## 嵐小僧

大嵐がやって来て　嵐小僧がやって来る　こりゃ大変だ～
嵐小僧がやって来て　一八番の三日月刀で　ばったばったとなぎ倒す
何もかも　ばったばったとなぎ倒す　まるで　お祭り騒ぎでなぎ倒す

風が強くなって来た。窓ガラスに雨が叩きつけていた。
「お父さん、こんなオンボロ小屋で大丈夫なの？」
「大丈夫だよ。小さい家は意外と強いんだよ。」
「ほんとうに大丈夫かしら？」
「大丈夫、大丈夫。周りには木があるから、風や雨を防いでくれるよ。」
一男が幸子を慰めた。
「大丈夫だって幸子！ほら、雨や風にもびくとしないで建ってるじゃないか！」
「ほんとだ！」
幸子は一男の言葉に、少し気持ちが落ち着いてきた。

「見て、ミク！嵐小僧が刀を振り回して飛んでるわ！」
「ほんとだ！」
嵐小僧は、木の葉をばっさばっさと切り落としながら、風の中を泳いでいた。
「ミク、今外に出ると危険だわ。」
「そうだね～～。」
イチョウの木の葉も、切り落とされていた。
「チチンプイプイ！嵐小僧よ近づくな！」ユミは、イチョウの木に

魔法をかけた。嵐小僧は、イチョウの木には来なくなった。
「ミク、管理小屋が危ないわ！」「すぐに助けに行きましょう！」
二人は、管理小屋の中に瞬間移動した。
神主は、びっくりした。「ユミ、ミク！？」
「神主さん、小屋が危ないわ！吹き飛ばされるわ！」
「ほんとか！？」小屋は風雨でガタガタ言って、揺れていた。
「もう駄目か！」
ユミは魔法の言葉を発した。「チチンプイプイ！嵐小僧よ近づくな！」
風雨は依然として続いていたが、小屋の軋みはおさまった。
「おっ、変な音がおさまったぞ！」小屋は揺れなくなった。
「ミク、バンガローを頼むわ！」「分かったわ！」
ミクは外に出た。小さいミクは、風で飛ばされそうになった。慌てて、雑草にしがみついた。
「わ～～怖い！」嵐小僧が容赦なく、全てのものに襲いかかっていた。
ミクは、風に飛ばされないように草につかまり、用心深くバンガローに近づいた。
「チチンプイプイ！嵐小僧よ近づくな！」
二棟のバンガローは揺れなくなった。
「きゃ～～～～！」突然の嵐小僧の一撃で、ミクはバランスを崩して、宙に飛ばされた。
「助けて～～～！」
「あっ、ミクの声だわ！どうしたのかしら？」
ユミは神主と一緒に外に出た。ミクの姿はなく、声もなかった。
ユミは、テレパシーや電波で呼んだが、いくら呼んでも返事はなかった。

## 探索

「神主さん、わたしミクを探しに行ってくるわ！」
「今はよしなさい！風が止んでからにしなさい！」
「今、行くわ～～！」
「行くな！って言うのが分からんのか！」
ユミは、仕方なく小屋の中に入った。そして、大きな声で泣き出した。
「わ～～～～～ん、ミクちゃ～～～～～～～ん！」
「きっと、どっかに無事でいるよ。そう心配するな。」
「わたしが悪いの！わたしが外に出したから！わたしが行けばよかったわ～～！」
「仕方ないよ。過ぎ去ったことを、いくら言っても。」
「わたしが悪いの～～～！わ～～～～～～ん！」
ユミは、しきりに自分を責めていた。
「明日の朝になったら、一緒に探しに行こう！」
「一緒に探してくれるの、神主さん！？」
「俺たちは、神社の仲間じゃないか。」
「ありがと～～う、神主さん！」
「それに、朝になったら、自分で帰ってくるかも知れないしな。」
「だったらいいんだけど…」
「とにかく今日は寝よう。」
「はい。嵐が治まるまで、ここに居ていいですか？」
「ああ、いいよ。」
神主の奥さんが、寝ながら手招きしていた。
「ユミちゃん、一緒に寝ましょう。」
「はい！」
ユミは、外の風音を気にしながら、一緒に寝た。
朝がやって来た。嵐は治まっていた。まだ六時だった。

ユミは巨峰を食べると、小さくなってカラスに乗り、ミクの探索に飛び立った。他のカラスも一緒に探索に飛びび立った。
神主も、簡単な食事をすると、探索を開始した。妻も一緒だった。
ユミは上空から、電波で必死に呼び続けていた。
「ミクちゃ～～～～～ん！」
いっこうに返事はなかった。
「ミクちゃ～～～～～ん！」
神主夫妻は、二時間近く探したが、発見できなかったので、食事の用意もしなければいけなかったので、小屋に帰って行った。食事は、九時からだった。
ユミは、依然として探していた。他のカラスたちも探していた。
九時になった。みんながバンガローから出て来た。
カラスの異変に気がついたのは、鳥に詳しい一男だった。
「やけにカラスが舞ってるな～～？」
「どうした一男？何か変か？」
「カラスが、やけに山を飛んでるよ？」
「そういえば、そうだな～～？」
「なんかあったのかな～～？」
「そんなことはどうでもいい。さあ食事、食事！」
「うん！」
大嵐の後の爪痕で、なにもかもが滅茶苦茶になっていた。炊事場の建物も便所も壊れ、テーブルは倒れ、椅子はひっくり帰り、あちこちに飛んでいた。
龍次父さんは、目を疑った。
「こりゃあ、ひどいな～～～！」
なぜか、管理小屋と、二つのバンガローは無事で無傷だった。このアンバランスに父さんは首をひねった。
「おっかしいな～～。どうして三つの小屋だけ無事だったんだ？」
狸山のカラスが、皆飛んでいた。
「それにしても、何なんだ、このカラスは？」

## 自己完結型トイレ

みんなが、テーブルや椅子を元の位置に置いていると、神主と奥さんが食事を持って来た。
今日の朝食のメニューは、バタートースト二枚と、みかんと桃、ミルクだった。
コーヒーカップの中に、粉ミルクが入っていた。奥さんが、お湯を注いでいた。
みんなは、「いただきま～～す！」と言って食べ始めた。
神主が言った。「毎朝、果物ばかりで、すみませんねえ～～。」
龍次父さんが礼を言った。
「毎朝、果物なんて贅沢ですよ。ありがたく思ってます。」
みんなは、その言葉に頷いていた。「そうです、そうです。」と森本が言った。
みんなは、カラスを見ていたが、森本は壊れた便所を見ていた。
「あの便所、早く直さないとまずいですね～～。」
「そうですね。じゃあ、食事が終わったら、みんなで直しましょう！」
龍次父さんが神主に質問した。
「あれって、下水に流してるんですか？」
「ちがいます。だったら使えません。ベイントイレという下水の不要な自己完結型トイレです。」
「ベイントイレ？自己完結型トイレ？」
「ベイントイレは陸上自衛隊が開発し完成させた簡易トイレです。」
「陸上自衛隊が？」
「浄化槽や下水道を使わず、汚水をその場で処理し、その水を洗浄水として利用しています。常に、小川のせせらぎのよう水が流れているので、トイレ室に嫌な臭いは全くありません。」
「あ～～～、だっから水が絶えず流れてたんだ～～。」

「だから、保健所などへの設置届、近隣地域への排水同意書が不要なんです。」
「どうやって処理してるんですか？」
「杉チップやオガクズなどと混合攪拌し、微生物により水と二酸化炭素に分解しているそうです。詳しいことは知りませんが、繰り返し千回ほど使えます。杉チップやオガクズなどを取り替えれば、また千回ほど使えます。」
「電気とかは？」
「ソーラーバッテリーから供給される電気だけです。ポンプのモーターを回しています。」
「すばらしいな～～！」
トイレは倒れていた。便器が見えていた。
食事が終ると、神主は歩み寄って行った。みんなもついて来た。
「これは、便器の上に乗せてあるだけだったんですよ。」
森本もいた。「じゃあ、持ち上げて元の位置に戻せば、すぐに使えるんですね？」
「はい。」
「お～～～い！」森本はテレビ局の若いスタッフを呼んだ。
「これを、便器の上に置いてくれ！」
すぐに設置された。トイレの建物は木製なので重かった。
神主が点検を始めた。
「あとは、このコンセントを繋げば、屋根のソーラーと繋がり、ポンプが回って使えるようになります。」
繋ぐと、モーター音がして、水が便器を流れ出した。神主は、吐息を吐いた。
「お～～、良かった！」
依然として、上空をカラスが舞っていた。

## 行方不明のミク

夕食は栗ご飯と、豚汁と、きゅうりや大根の漬物だった。
森本が神主の奥さんに質問した。「この豚肉は？」
「これが最後の肉です。」
「あ～～～あ、そうなんですか！」
みんなは「いただきま～～す！」と言って食べ始めた。
神主はみんなの顔を見ていた。
「各地で道路が寸断され、物流が止まっているそうです。」
「じゃあ早く買い物に行かないと、物がなくなりますね？」
「もう無くなっているでしょう。」
「炊事場の横の温水シャワーは使えるんですか？」
「使えますよ。プロパンですから。」
炊事棟の囲いや屋根は風雨で吹き飛んで壊れていたが、横のシャワーボックスだけは無事だった。
「シャワールームは壊れてませんね？」
「あれは、ボルトでしっかり固定してありますから。」
通訳の女性スタッフが神主に尋ねた。
「じゃあわたし、これから使ってもいいかしら？」「いいですよ、どうぞ。」
幸子が父に言った。
「わたし、お風呂に入りたいわ～～！」
神主が答えた。
「お風呂だったら、神社にありますよ。」
森本が尋ねた。
「お風呂、使えるんですか！？」
「はい使えます。離れにあったもので被害を免れました。プロパンだから大丈夫です。」
「それは素晴らしい！」

「お嬢ちゃん、これから入りに行きます？」
「もうこんなに暗いから、また地震が来ると怖いから明日でいいわ。」
「分かりました。じゃあ、明日ね！」
奥さんが、大きな紙袋を持ってやって来た。
「みなさん、着替えの下着です。主人のやわたしのを選んで持って来ました。洗濯したくても、そのままじゃあできませんからねえ。」
みんなは喜んだ。洗濯機は、シャワー室の隣にあったが、停電で使える状態ではなかった。
みんなは、それぞれ自分の居場所に戻って行った。神主だけが、神社に向かっていた。

結局、ミクは発見することはできなかった。ユミは、ミクの巣箱の中で泣いていた。
「ミクちゃ～～～ん、ごめんね～～～！わたしが外に出しさえしなければ～～～！え～～～ん、え～～～ん！」
神主がやって来た。
「ユミ、見つからなかったみたいだね。」
「わ～～～ん、神主さ～～～ん！」
ユミは神主に飛びついて泣き出した。
「どこかで必ず生きてるよ！」
「そうだといいんだけど～～～！」
「どこかで必ず生きてる！」
神主は大きな手で、ユミを撫でていた。その手は、ユミの涙で濡れていた。

## 念力透視探索

次の日の朝がやって来た。
ユミは相変わらず朝早くから、ミクの探索にカラスと一緒に飛び立った。
九時になった。朝食の時間だった。
みんなは、テーブルの席に座って朝食を待っていた。カラスが相変わらず、今日も上空を飛んでいた。
幸子はカラスを見ていた。「今日もカラスがたくさん飛んでるわ！」
みんなも、不思議そうにカラスを見ていた。
食事が運ばれて来た。今日の朝食メニューは、バタートースト二枚、ハム二枚、粉ミルク、イチジクだった。
神主が森本に質問した。
「超能力者の方は、どのようなことができるのですか？」
「ユーフォーの呼び込みの他に、行方不明者の探索などもできます。他には定番のスプーン曲げとか。」
「行方不明者の探索もできるんですか？」
「はい。」
「動物なんかも探せますか？」
「さ～～～あ？今聞いてみますね。」
通訳の女性スタッフが入った。
「やったことはないが、物さえあればできるだろうと言っています。」
「物さえあれば？」
「着てた衣服とか、身につていたネックレスとかです。」
「衣服だったら、あります！」
神主は神社に走って取りに行った。三分くらいで戻って来た。
「これです！」
通訳の女性スタッフが手にした。

「ずいぶんと小さい洋服ですねえ？」
「リスに着せていたんです。」
「じゃあ、そのリスを探すんですね？」
「はい、できればおねがいします！」
「今、聞いてみますね。」
通訳して伝えた。
「できるかどうか分からないけど、今やってみるそうです。」
超能力者ドン・セバスチャンの念力による透視探索が始まった。氏は、洋服を強く握った状態で目を閉じていた。
約五分が過ぎた。氏は静かに目を開けた。そして、通訳に告げた。
「分かりました。その小動物は、タヌキの巣穴で気絶して寝てるそうです。」
「え～～～！？どこで？」
「それは分からないそうです。」
神主は「ちょっと失礼します！」と言って、神社に向かって走り出した。
「ユミ～～～～！」
神主は大きな声で、神社の前で手を振りユミを呼んでいた。
「ユミ～～～～！分かったぞ～～！」
ユミは下りてきた。
「どうしたの、神主さん！？」
「ミクの居所が分かったんだよ。」
「どこ？」
「狸の巣穴で気絶してるそうだよ。」
「どうして分かったの？」
「超能力者ドン・セバスチャンの念力で！」
「ああ、あのテレパシーの弱い超能力者ね。」
「とにかく彼の言葉を信じて探してみよう！」
「分かったわ！今から狸の巣穴を探すわ！」
ユミは、またカラスに乗り、飛び立って行った。ユミは他のカラス

たちに命じた。
「みんな〜〜、狸の巣穴を探して〜〜〜！ミクが見つかったら教えて〜〜〜！」

## わ～、巨峰だ～～！

朝の食事の後、みんなは今後のことについて、話し合いをしていた。
一男はカラスの異変に気付いた。
「あれっ、カラスがいなくなったぞ？」
みんなは空を見た。
「ほんとだ？」「どうしたんだろう？」
一男は山を見ていた。
「山の木々を飛んでる！？」
カラスたちは、山の木と木の間を飛んでいた。というより、ジャンプして移動していた。
「何やってるんだろう？」
龍次父さんも不思議そうに見ていた。
「ここのカラスは変わってるな～～？」
みんなも不思議そうに見ていた。
神主が帰って来た。森本が神主に言った。
「神主さん、ここのカラス変わってますね～～？」
「前々から変わっているんです。気にしないでください。」
みんなは見るのを止めた。一男だけが、依然として不思議そうに見ていた。

ユミに一羽のカラスからテレパシーで連絡が入った。
「なあに？」
「ミクちゃんらしい妖精が入ってる狸の巣穴を発見しました！」
「え～～～、どこ！？」
「狸岩の近くです。」
「分かった、今行くわ！」
行ってみると、岩の上に、その巣穴は草花に隠れるようにしてあった。

ユミは静かに近づいて行った。ユミを乗せたカラスがユミの背後を用心棒のようにして見守っていた。
「ミクちゃ～～～ん！」
注意深く覗くと、ミクの脚が見えてた。
「あっ、ミクだ～～～！」
狸が出て来た。
「何か用かね？」
「穴の中の妖精、探してたんです。」
「ああ、そうなの？あの妖精の知り合い？」
「はい、そうです。彼女、元気ですか？」
「元気も何も、気絶したままだよ。近くで倒れてたんで、くわえて持って来たんだよ。あんなとこじゃあ危ないと思ってね。」
「ありがとうございます。」
「あ～～、それだったら遠慮なく入ってくれよ。」
ユミは入って行った。呼びかけた。
「ミクちゃん！」
三度ほど呼びかけた。無反応だった。
「ほらね、駄目だろう。」息はあった。
「どうしたんだろう？」
「頭でも強く打ったんじゃないのかな～～？」
ユミは、ポケットからミクの大好きな巨峰を一個取り出した。
「ミクちゃん、あなたの大好きな巨峰よ！」
巨峰をミクの鼻に近づけた。
「わ～、巨峰だ～～！」と言って、ミクは起き上がった。

## やもめの狸おじさん

狸の巣穴の奥には、どんぐりがたくさん転がっていた。
「どんぐり、お好きなんですか？」
「あれは非常食だよ。これから寒くなるからね～～。」
「地震で、この巣穴は大丈夫だったんですか？」
「なんとか大丈夫だったよ。奥の方は崩れたけどね。」
「それは大変でしたね～～。」
「この地震で、巣穴をやられた奴がたくさんいたよ。」
「そうでしょうね～～。」
「幸い、この巣穴は入口が岩だったから助かったよ。」
「それは、よかったですね～～。」
狸は、おじさんっぽかった。
「この巣穴で、あなただけで？」
「そうだよ。この歳になるまで、やもめ暮らしでね～～。慣れちゃったね。誇り高き、やもめ暮らしってやつかな？」
「じゃあ、ミクを連れて帰ります。どうもありがとうございました。お礼は後ほど。」
「お礼なんていいよ。山で暮らす者同士、気にしなくっていいよ。」
「必ず、お礼に伺います。暇だったら、遊びに来てください。」
「どこ？」
「神社の前の、大きなイチョウの木に住んでいます。わたしの名前はユミです。この子は、ミク。」
「ユミちゃんに、ミクちゃんね。分かった！ありがとう、遊びに行くよ。おいらの名前は、ポン太。この辺の雄の狸の名前は、皆ポン太だけどね。はははは！」
「そうです。」
誇り高き、やもめ暮らしの狸のおじさんは、自分の言葉に笑っていた。

「大きなイチョウの木って、神社の前の木だろう？」
「そうです。」
「それなら、前々から知ってるよ。」
「さあ、帰ろう、ミク！」
ミクは自分で起きれそうになかった。ユミは優しく抱き起こした。
巣穴の外に出した。
「さあ、カラスに乗って一緒に帰りましょう。」
狸のポン太が慌てて巣穴から出てきた。
「それじゃあ、カラスに乗せるのは危ないよ。落ちて怪我でもしたら大変なことになるよ。」
カラスは、妖精二人は重くて乗せられなかった。
「じゃあ、どうすれば？」
「僕が背中に乗せていくよ。その大きなイチョウの木まで。」
「えっ！？」
「大丈夫、大丈夫！こう見えても足腰は強いんだから！」
「じゃあ、おねがいします。何から何まで、ほんとうにすみません！」
「いいよいいよ。山で暮らす者同士、気にしなくっていいよ。」
狸のおじさんは、さっきと同じことを言っていた。
「じゃあ、おねがいします。」と言って、ユミは狸のおじさんの背中にミクを抱えて乗せた。妖精は意外と力は強かった。
「ミク、しっかりと狸のおじさんに掴まってるのよ！」
「うん、分かった！」ミクの意識は回復していた。
ユミは、イチョウの木に辿り着くまで、近くから見守っていた。そして、大きなイチョウの木に無事に着いた。
「どうもありがとうございました！」
「ここですか、お宅の家は？」
狸のおじさんは、大きなイチョウの木を見上げていた。
「このイチョウの木なら、前々から知ってたよ。有名だからね～。ここが君の家だったの？」

「はい、そうです。」
「いいところに住んでるね～～。やっぱり妖精は、我々よりも何ランクも上だな～～。」
「そんなことはありませんよ。」
「いや～～あ、我々よりもブルジョワだよ！」
「なんですかブルジョワって？」
「金持ちってこと！」
「そうなんですかね～～？」
「じゃあね、また来るよ！」
「あっ、待って下さい！」
ユミは、草むらに隠しておいた。巨峰を渡した。レジ袋に五房入っていた。
「これ、食べてください。」
「何？」
「巨峰です。」
「え～～～、そんな高級なもの、頂いちゃっていいの？」
「はい、今日のお礼です！」
やもめの狸のおじさんは、ニコニコして帰って行った。
ユミとミクは、涙を流して抱き合って喜んでいた。
「ミク～～～！無事でよかったね～～！」「わ～～～ん、ユミ～～～～！怖かったよ～～！」

## ユミとミク

「まだ、頭がふらふらするわ。」
ミクは倒れ込んだ。
「ミクちゃん、しっかりして！」
ユミは抱き起こした。
「ミクちゃんの巣箱まで、おぶっていくわ。」
「ありがとう。」
ユミは、ミクの巣箱まで、おぶって行った。
「登れる？」
「ちょっと無理みたい。」
「瞬間移動は使える？」
「とても、無理だわ。」
瞬間移動には体力を要した。いつもミクを乗せてるカラスがやって来た。
「おいらが運びましょう！」
「ありがとう！」
カラスは、ミクを銜えると、巣箱まで運んだ。
「ありがとう！」
「いいえ、どういたしまして。ミクさんは、わたしの、ご主人様ですから。」
カラスは、その桜の木に止まって、二人を見ていた。そして、大きい目で見守っていた。
ミクは、自分で作ったベッドの上に横たわっていた。
「ミクちゃん、お布団はないの？」
「そんなものはないわ。いつも木の葉をかぶっているだけなの。」
「それじゃあ寒いわ。今いいもの持って来るね。待っててて！」
ユミは、いなくなった。二分ほどで戻って来た。
「はい、お布団！木綿のハンカチ。」

ユミは、ハンカチを四つ折りにして、ミクにかぶせた。
「わ〜〜〜あ、とっても温っかいわ〜〜！」
「でしょう。」
「ユミ、ありがとう。」ミクは涙を流していた。
「ミク、蜜を取って来てあげるわ。何がいい？」
「何でもいいわ。」
「じゃあ、ミクの大好きなコスモスを取ってくるね。」
「ありがとう。」
ユミは、近くに咲いていたコスモスの花をちぎって持って来た。
「はい！」「どうもありがとう。」
ミクは元気がなかった。熱があるようだった。ユミはミクの額に手を当てた。
「わ〜〜〜あ、凄い熱だわ！」
「ユミ、寒いわ。」
「寒い？」
「とっても寒いわ。」
「熱はあるし寒いし、どうしよう！？」
ユミは、コスモス花びらを重ねて、ミクの額に置いた。
「わ〜〜あ、気持ちいいわ〜〜。」
「ミクちゃん、わたしの家に行く？あっちの方が温っかいわ。」
「そんな元気ないわ。それにここが好きなの。」
「この安っぽいプラスチックの巣箱が？」
「うん。」
「ちょっと待ってね。」
ユミは、ミクと一緒に寝た。そして抱いた。
「温っかくなった？」
「うん。」
「神主、来ないかな〜〜〜。もっといい布団が欲しいな〜〜。」
ユミとミクは、木の葉に当たる風の音を聞きながら、そのまま寝入ってしまった。狸山で二人っきりの妖精は、まるで姉妹のように慕

い合っていた。数羽のカラスが、鋭く眼光を光らせて、ユミとミクを見守っていた。

## コンドル

ユミとミクは、神主の声によって起こされた。
「ユミ、ミク。」
二人には、未使用の白い雑巾がかけられていた。
二人は、かけられているものに気付いた。
ユミが神主に尋ねた。「何ですか、これ？」
「未使用の雑巾だよ。どうだい？」
「とってもいいです。温っかいです。」
二人は、満足そうに寝ていた。
「ちょうど、お布団が欲しいな～～と思ってたところだったんです。」
「そうだと思って、かけてやったんだよ。」
「さすがに神に仕える神主さんだわ。」
「そうだろう。」
「ミク、風邪でも引いたみたいなんです。熱があって寒気があって。」
「そりゃあいけないな。困ったな～～、人間の薬は妖精には効かないしな～～。」
「妖精の薬草なら、わたしが取ってくるので大丈夫です。」
「じゃあ、頼むよ。」
「はい。」
ユミは起き上がった。早速、薬草を取りに行くことにした。
「じゃあ、行ってきます！」
「きをつけてな！」「はい。」
ユミは、一時間ほどで帰って来た。
「薬草、あったわ！」
神主は、巣箱の周りを、いろいろと細工して補強していた。
「これで大丈夫だ、雨風にもびくともしないぞ！」

またも未使用の雑巾を巣箱の出入口に、両面テープで貼って、ぶらさげた。
「これで、玄関も雨風が入らずに、大丈夫っと！」
神主は、ユミが手に持っている薬草を見ていた。
「これを煎じればいいんだね？」
「はい、そうです。」
「じゃあ、今煎じて来るよ。」
「どこに行くんですか？」
「管理小屋、あそこに行けば、七輪で、いつでも湯を沸かしているから。」
「どうして、いつも沸かしているんですか？」
「お茶やコーヒーを飲むためだよ。」
「な～～るほど！それはいいことですね。」
ユミは妙に感心していた。神主は、十分ほどで帰って来た。
「冷ましてから持って来たよ。君たちは、超猫舌だからな。」
「はい、その通りです。ありがとうございます！」
「どうやって飲む？」
「そうですね～～、小皿に注いだら、舐めて飲みます。」
「小皿じゃあ、この入口からじゃあ入らないだろう？」
「そうですね～～。」
「割れたコーラの瓶の蓋でいいだろう？」
「はい、けっこうです。」
神主は、半壊している台所に取りに行った。すぐに戻って来た。
コーラの瓶の蓋に、煎じた薬草茶を注意深く入れた。大きくなっているユミに手渡した。
「はい！」
ユミは、注意深く巣箱の中に押し込んだ。
「はい、ミクちゃん！」「ありがとう。」
「神主さん、山で大きな見たこともない鳥がいたんですけど、見たことあります？」

「ああ、コンドルだな。わしも見たよ。」
「あれ、大きくって凄い鳥ですね〜〜。」
「日本にはいない鳥だよ。南米のアンデス山脈にいる鳥だよ。」
「どうしてこんなところに？」
「さ〜〜、どうしてだろうな？今度、コンドルに聞いてみてくれ。」
「はい、聞いてみます。」
カラスが大騒ぎしていた。上空を見るとコンドルが悠々と舞っていた。

## 妖精の仕事歌

「ミクちゃん、大きくなって夕ご飯を一緒に食べに行きましょう。」
「いいわ、食べたくない。」
「じゃあ、神主さんから、蜂蜜をもらってくるわ。」
「それなら食べられるわ。」
「じゃあ、ちょっと待ってて。」
夕方の六時だった。ユミは、管理小屋に瞬間移動した。大きくなった。
神主と奥さんは、夕食の準備をしていた。
「神主さん、蜂蜜ありますか？」
「ああ、あるよ。待ってて。」
奥さんは、手を休めずに言った。
「ミクちゃんが見つかって良かったわね～～。」
「はい。」
「早く元気になるといいのにね～～。」
「はい、ありがとうございます。何を作っているんですか？」
「キノコのポン酢和え。」
「おいしそうですね～～。」
妖精は、キノコが好きだった。シイタケとエノキと貝割れ菜と大根おろしが入っていた。
「どう、一口食べてみる？」
「いいんですか？」
「いいわよ。」
奥さんは、小皿によそって、箸をわたした。
「はい。」「いただきま～～す！」
「どう、味は？」「わ～～～、とっても美味しいわ～～！」
「良かったわ～～。」おわんによそってやった。
「これ食べなさい。おわんだと運びやすいでしょう。」

「いいんですか？」
「もちろんいいわよ。」
「ありがとうございま～～～す！」
「はい、蜂蜜！」ミニの醤油入れに入れてあった。
ユミは礼を言うと、大きいまま、管理小屋の裏口から、みんなに見つからないように出ていった。
小さくなって瞬間移動では、物は運べなかった。
「はいミクちゃん、蜂蜜よ。」
ユミも小さくなって、巣箱の中に入って行った。
ミクは、蜂蜜を舐めていた。「甘くて、おいしいわ～～！」
「良かった！」
「ありがとう！」
「早く元気になってね、ミクちゃん。また、盗みに行きましょう。」
「うん！」
ユミとミクは、まだ時々、盗みに出掛けていた。それは、妖精たちの習性であり、習慣であった。
ユミは妖精の仕事歌を歌いだした。

ほいほいほいの　ほいほいほい♪
妖精は～盗み合って助け合う～～～♪　仲良く盗み合って助け合う♪
こりゃあ～とってもいいことだ♪　ほいほいほいの　ほいほいほい♪
地球をみんなで守りましょう♪　みんなで仲良く取り合えば　平和な世界を築けます♪
ほいほいほいの　ほいほいほい♪
一生懸命に働けば地球の空気が汚れます♪　他の生物殺します♪
だから盗み合って助け合う♪
こりゃあ～とってもいいことだ♪　ほいほいほいの　ほいほいほい♪
欲張って働くと地球の空気が汚れます♪　地球の自然を壊します

♪　だから盗み合って助け合う♪
　こりゃあ～とってもいいことだ♪　ほいほいほいほいの　ほいほいほいほい♪

## 妖精の秘密

その後、ユミは奥さんから頂いた料理を食べると、また小さくなって、ミクの看病についていた。
まだ熱っぽかったので、ティッシュペーパーを濡らして、ミクの額に乗せてやった。
「どう、気持ちいい？」
「とっても気持ちいいわ～～～。ユミ、もう大丈夫だから帰ってもいいわ。」
「今日は、ずっとここにいるよ。安心して。」
小雨模様だった。
「なんだか、雨になりそうだね？」
「そうなの？」
「ミクに出会って、もう五年になるわね？」
「そうね。」
「ミクは、ここに生まれる前はどこにいたの？」
「富士山のふもとよ。」
「覚えているの？」「半分くらいね。」
「富士山のどこにいたの？」
「近くの大きな湖の、その近くの小さな神社の屋根裏に棲んでいたわ。道草神社という名前だったわ。」
「道草神社…、屋根裏にいたの？」
「そう。屋根裏はとっても寂しかったけど、神主の娘でアユという女の子がいて、いつも二人で遊んでいたわ。楽しかったわ～～。」
「アユ…、その他にどんなこと覚えてる？」
「明治時代の終わり頃で、日露戦争があって、富士山に日本で最初のスキー場ができて。明治天皇が死んだわ。」
「ふ～～～ん。そんなことがあったの。わたし、屋久島にいたから、そんなこと知らなかったわ。」

「やくしま？」
「大きな杉の木がある大きな島よ。南にある島よ。」
「そんなに大きかったの、杉の木？」
「もうすご～～～く大きく古い杉の木だったわ。雨ばかり降ってたわ。台風は怖かったわ～～。ときどきウミガメが卵を産みにやってくるの。」
「ウミガメ？」
「人が乗れるくらいの大きな海の亀よ。」
「そんなに大きの。」
「とっても大きかったわ。」
「ユミは、ここで生まれて何年になるの？」
「十年よ。」
「そんなに。」
「あっという間に十年経ってしまったわ。」
「じゃあ、あと二十年の命ねえ。」
「そうだね。悲しいね。」
「またどこかで逢えるといいね。」
「そうだね…」
二人は悲しくなった。妖精は、三十年生きて死に、約八十年後、どこかで生まれ変わるのだった。記憶は半分ほど残り、半分ほど忘れ去られるのだった。
「どこかで逢えるといいね。」
「どこかで逢いたいわ！」
二人は、限りなく悲しい顔になっていた。
雨が降って来た。それは、まるで二人の悲しい涙のように降っていた。
風雨は、多少強くなって来たが、即席に神主がこしらえた雑巾のドアが、二人を守るように風雨から防いでいた。
木の葉に当たる雨の音だけが聞こえていた。数羽のカラスが、木の上から二人を見守っていた。

## 団結

次の日、朝食の後、ドン・セバスチャンと通訳は、山を徒歩で下ると言って、自分の場所に帰って行った。
テレビ局のスタッフ四人と、若井家族が山に残った。
森本は多少イライラしていた。
「道路は、ま～だ通れないの？」
「まだ駄目です。」
「まったく、何やってるのかな～～？」
龍次父さんが尋ねた。
「会社は大丈夫なんですか？」
「駄目です。戻っても何もありません。」
一男が、駆けて来た。
「父さん、電話が繋がったよ！」
「おっ、そうか！」
龍次父さんは、自分の携帯電話をポケットから取り出した。早速、会社に電話した。繋がらなかった。
「やっぱり、うちの会社もやられたか…」
同僚の携帯電話にかけた。繋がったが、会社も地震でやられた、という返事だった。
「やっぱり、やられていたか。」
父さんは、がっかりした様子だった。
テレビ局のスタッフも携帯電話を取り出して、電話をしていた。みんな、がっかりした様子だった。
東京都は全域、やられてるみたいだった。千葉県、埼玉県、そして神奈川県も。
森本は、頭をかかえて困っていた。
「会社は無いし、家は地震で潰れてしまったし、どうしようかな～～？」

神主が尋ねた。
「家族の皆さんは？」
「九州の親戚の家に行きました。」
「それは、よかったですね。」
テレビスタッフの中には、家族が避難所生活の者もいた。
森本は決意した。
「仕方ない、会社から命令が来るまで、ここで待つしかないな！」
龍次父さんも決意した。
「会社も家も無くなったし、俺たちもここにいるしかないな！」
神主の顔を見た。
「神主さん、今後もよろしくおねがいします！」
森本も同じように挨拶した。神主は、みんなに告げた。
「みなさん、これからも一緒に頑張りましょう！」
一人一人の心は沈んでいたが、団結することで少し楽になっていた。
爽やかな秋空を、コンドルが大きな翼を広げて飛んでいた。一男は見ていた。
「あのコンドル、狸山に住み着いちゃたみたいだね？」
「そうみたいだな～～。」
森本も見ていた。
「あのコンドル、どっから来たんでしょうかね～～？」
神主は希望の言葉をのべた。
「あのコンドルも、狸山の名物になるといいんですがね～～。」
幸子だけが、無邪気に蝶々を追って走っていた。大地震や大津波の後でも、蝶々はいつものように舞っていた。

## アンダルシア

お昼だった。ユミが、ハンペンをフライパンで焼いていると、そのバターと醤油の匂いに誘われて、コンドルが舞い下りて来た。
「美味しそうだね〜〜。」
ユミは驚いたが、冷静だった。
「あ〜〜ら、コンドルのお兄さん、こんにちわ。」
「おいら、お兄さんじゃないよ。もうおじさん！」
「じゃあ、おじさん、はじめまして。」
「はい、はじめまして！」
「これは、ハンペンというものです。」
「ハンペン？」
「どう、食べてみます？」
「いいのかい？あんたが食べるんじゃないのかい？」
「いいんですよ。あなたにあげます。」
「じゃあ、遠慮なく！」
コンドルは、お腹が空いていたのか、一口で食べてしまった。
「あ〜〜〜、美味しかった！」
「早いわね〜〜〜！」
「お腹が空いてたもんで。」
「いつも何を食べてるの？」
「川で泳いでる鯉を食べてるよ。ときどきは、近くの養鶏場や養豚場に行って、餌を横取りしてるんだよ。」
「盗み合って助け合ってるのね？」
「そういうことだね。今のところ、盗みだけだけどね。」
「いいことだわ。盗まれる物がないんだったら仕方ないわ。」
「そういうことだ。黙って迷惑をかけずに盗むのはいいが、無理に盗むのは良くないな。」
「そういうことです。」

「おじさんは、いったいどこから来たの？日本の鳥じゃないみたいだけど？」
「アンデス山脈から来たんだよ。」
「どうやって来たの？」
「船に乗って来たんだよ。」
「どんな船に？」
「そんなことは知らない。目が覚めたら、日本のどこかにいたんだよ。」
「どこか？」
「この近くだけど、今は分からない。忘れちゃった。嫌なことは忘れるようにしているんだよ。」
「嫌な場所だったのね？」
「そういうことだ。だから、逃げて来たんだよ。」
「どうやって逃げたの？」
「病気のふりをしてね。籠から出してもらってね。」
「頭いいわね～～。」
「生きるためだったら、盗みだってするし、嘘だってつくさ。」
「そういうことです。」
「あんた、話が合うね～～！気に入った！」
「ありがとう。お友達になりましょう！」
「ああ、いいとも！」
「よろしくね！わたしの名前は、ユミ。」
「おいらは、アンダルシア！よろしく！おいら、これから、鯉を取りに行くんで、バイバイ！」
「バイバイ！」
アンダルシアは、力強く助走すると、空高く舞い上がって行った。
ユミには、大いなる魂胆があった。

## マイズルソウ

次の日の朝になった。ユミは依然として。ミクの看病についていた。ミクは、まだ熱があった。

「おかしいわね～～、もう下がってもいいころなのに…」

六時だった。神主がやって来た。指でドアの雑巾を開き、中を覗いた。

「ユミ、ミクの熱は下がったかね？」

「それが、なかなか下がらないんです。」

「それはおっかしいな～～？」

「この薬草じゃあ、駄目かも知れません。」

「熱を冷ます薬草はないのかね？」

「屋久島のような高い山ならあります。

「屋久島？って言うと、九州の南の島の？」

「そうです。」

「あんなところまではな～～。」

「同じように高い山ならあると思います。」

「じゃあ、富士山だな～～。何という薬草なんだい？」

「マイズルソウという草です。草を煎じるか、小さな赤い実を食べると熱は下がります。」

「だけどな～～、富士山まではな～～？カラスなんかじゃ、とても無理だしな～～。」

「いい考えがあります。」

「どんな？」

「コンドルに乗って行けば。」

「コンドル？コンドルなら大丈夫かも知れないけど…」

「わたし、そのコンドルのおじさんと、昨日友達になったんです。」

「早いな～～～。」

「頼んだら、きっと富士山まで乗せてくれると思います。」

「でも、ただじゃあ無理だろう。」
「大丈夫です。ハンペンを二枚用意してありますから。」
「そのコンドルは、ハンペンが好きなの？」
「はい、とっても！」
「焼けば、その匂いで直ぐにやって来ます。」
「じゃあ、すぐに焼こう！」
ユミは大きなイチョウの木の下で、七輪でハンペンを焼き始めた。
バターと醤油の焦げる匂いに誘われて、コンドルのアンダルシアがやって来た。
「おはよ～～～う、今日は早いね～～。」
「これ、アンダルシアのおじさんにあげようと思って焼いてたの。今日は二枚あるわ。」
「お～～～、そうだったのかい！？」
「どうぞ、お召し上がりください。」
神主は、神社の建物に隠れて見ていた。
「待てよ、何か魂胆があるな？」
「はい、あります！」
「言ってみろ！」
由美は指差した。
「あそこに大きな山が見えるでしょう？」
「あれは、有名な富士山だよ。そのくらいは知ってるよ。」
「あそこまで、わたしを乗せて連れてって欲しいの？」
「何しに行くんだい？」
「友達が重病で高熱を出してるの。彼女を助けるために、マイズルソウという薬草がいるの。それは高い山にしかないの。おねがいします！」
ユミは必死に頼んでいた。目には涙が溢れていた。
「分かった！その涙を信じて、乗せて行ってやろう！」
「ありがとう！」
「でも、その大きな身体じゃ、とてもとても乗せられないよ。」

ユミは十センチの大きさになった。
「これなら、どう？」「それなら大丈夫だ！じゃあ、いますぐ出発だ～～！」
アンダルシアはハンペンを食べると、ユミを乗せ大空に舞い上がって行った。ユミは、神主に手を振っていた。

## 激突！

コンンドルは、体重約十キログラムで、クチバシから尾の先までがおよそ一メートル二十センチ、両翼の端から端の長さがおよそ三メートルあった。
コンドルは飛ぶスピードは、そんなに早くなく、時速五十キロ程度だった。それでも。地面をはうようにして走る自動車よりは、遥かに早かった。
ユミは、必死でコンドルの羽に掴まっていた。
「うわ〜〜〜、高いわ〜〜！」
下には、地震で壊れた家や、地割れで寸断され、自動車の走っていない道路が見えていた。
「どこもここも地震で壊れているわ。」
「これから、上昇気流に乗りますんで、羽の裏に隠れておくんなせい！」
「はい！」
ユミは、羽の裏に潜り込んだ。
富士山には、お昼前に着いた。意外と早かった。
「はい、富士山です。」
六合目あたりだった。人のいない場所だった。ミクはコンドルから降りると、大きくなって、早速に薬草を探し始めた。
アンダルシアも探していた。
「これじゃあ、ないんですかい？」
「どれ、どれ？」
「これでしょう。」
「これだわ！よく知ってるわね〜〜。」
「アンデスでも、これで熱を冷ますんですよ。」
「そうなんだ。」
ユミは、ポケットからレジ袋を取り出した。それに、実のついてる

ものを根から二本引き抜いて、中に入れた。
「これ、首から下げてくれない？」
「いいですよ。」
ユミは、アンダルシアの首に、レジ袋を巻きつけて、しっかりと結んだ。
「これで大丈夫だわ！」
「これでいいんですかい？」
「いいわ、さあ帰りましょう！」
アンダルシアは、ユミを乗せて飛び立った。
「お腹空いたな～～！」
「ちょっと待ってて。コンビニで何か買ってくるわ。」
「コンビニ？」
「何でも売ってる便利なところよ。行ったことないの？」
「そんなとこ知りませんよ。」
「あ～～、そうなの？何が欲しい？」
「そうだな～～、生肉かな？」
「豚がいい、それとも牛肉？」
「牛肉がいいな。」
「分かったわ、あそこのコンビニの近くで降ろして。」
「どこ？」
「あの赤い看板の。」
「オーケー。」
アンダルシアは、人のいない空き地に舞い降りた。
「ちょっと待ってて！」
ユミは、すぐに戻って来た。
「ここじゃあ人に見つかるから、どこか高いところに行って食べましょう！これ銜えて！」
アンダルシアは、食べ物の入ったレジ袋をくわえると、小さくなったユミを乗せて飛び立った。
近くの人気のない高台に舞い降りた。

「はい、牛肉！」ラップを外して彼の目の前に置いた。二百グラム三パックの牛肉を、ぺろっと三口で食べた。
「あ～～～、おいしかった！」
「早いわね～～！」
アンダルシアは、もっと食べたそうな顔をしていた。
「お小遣いの千円しかなかったの、ごめんなさい。」
「いいよいいよ、気にしなくて。」
ユミは、何も買えなかった。
「さあ、帰りましょう！」
アンダルシアは、ユミを乗せ、狸山に向けて飛び立った。
日本三鳴鳥のひとつ、渡り鳥のオオルリが子供を連れて南の国に向かって、かなりの上空を編隊を組んで飛んでいた。
ユミは、彼らに向かって叫んだ。「みんな、頑張れよ～～！」
「ユミ、今から上に登るから、しっかり掴まってろよ～～！」
「分かったわ～～！」
アンダルシアは、上昇気流に乗って、渡り鳥の飛んでる高さくらいまで上昇した。
「わ～～～あ、高いわ～～！」
その時、小型セスナ機が雲の中から急に現れた。
アンダルシアは驚いた。
「わ～～～～あ！」
セスナ機の左翼にぶつかって、アンダルシアはバランスを失い、真っ逆さまになって落ちて行った。
「わ～～～～～あ！」「きゃ～～～～あ！」

## 道草神社とアユ

アンダルシアは、大きな木の枝にぶつかり、草の上に落ちた。
「いててててて～～～！」
「大丈夫、アンダルシア！？」
「飛行機にぶつかったところが痛いけど、大丈夫みたいだ。」
「そう、それなら良かったわ。歩ける？」
アンダルシアは起き上がった。
「どうやら大丈夫みたいだ。」
翼を広げてみた。「あ、痛い！」
「どっちの翼？」
「右の翼。」
「あまり動かさないほうがいいわ。」
「そうするよ。休めば治るかも？」
「そうね。」
近くに小さな神社があった。大きな湖が見えていた。ユミは大きくなった。
「あそこに行きましょう。神に仕える神主さんなら、きっと助けてくれるわ。」
「そうだな。」
「行きましょう。」
神社には、道草神社と書いてあった。小さい神社のためか、人は誰も来ていなかった。
「道草神社…」
「どうかしたの？」
「ミクが言ってた神社だわ！」
「ミクって？」
「病気の友達の名前。生まれる前は、道草神社にいたって言っていたの。」

「妖精ってのは、生まれる前のことを覚えているんだってね～～。」
「半分だけね。」
「じゃあ、ここがその神社ってことかい？」
「たぶんそうだわ。富士山の近くで、湖の近くって言っていたから。」
神社の前に、木の長椅子があった。ユミはそこに座った。アンダルシアは、地面に座った。
老婆が、とぼとぼと歩いてやってきた。
「こんなところに、子供一人で、いったいどうしたんだい。」
ユミは、とっさの嘘をついた。
「お父さんを待ってるんです。」
「ああ、そうなの？」
「神主さんはいますか？」
「今はいないよ。自動車で出掛けてるよ。」
「ちょっと、休ませてください。」
「ああ、いいよ。」
「どうして、変な鳥がいるんだい？大きい鳥だね～～～。」
「コンドルという鳥です。」
老婆は、ちっとも不思議がらずにコンドルを見ていた。
「コンドルがここにいるなんて、不思議じゃないですか？」
「昔は、不思議なことが沢山あったからね～～。慣れちゃってるよ。」
「そうなんですか？」
「あんた、ひょっとして、妖精じゃないかな？」
ユミは、神社の雰囲気と老婆の雰囲気に、正直に告白した。
「そうです。」
「やっぱり！」
「どうして分かったんですか？」
「昔ね、いたんだよ。あんたのような妖精が。」
「ここにいたんですか？」

「神社の屋根裏に棲んでいたよ。」
「神社の屋根裏に！ひょっとして、あなたの名前は、アユさんではないですか？」
「そうだよ。どうして分かったの！？」
老婆は、不思議そうにユミを見ていた。

## 前世の名はマユ

ユミは、老婆にミクのことを話した。
「じゃあ、そのミクって言う妖精は、マユの生まれ変わりって言うんだね。」
「マユって言う名前だったんですか？」
「そうだよ。」
「マユの生まれ変わり…」
「そうです。絶対にそうです。」
老婆は泣き出した。
「マユちゃ～～～ん！」
しばらく泣くと、老婆は神社の裏に案内した。石を積んだだけの墓があった。
「これが、マユの墓だよ。この下にマユは眠っているんだよ。」
「この下に…」
「マユ、無事に生まれ変われて良かったね～～。」
よっぽど、仲良しだったんだろう。老婆は、またも泣き出した。
ユミは、お墓に手を合わせた。
「マユさん、マユさんは無事に生まれ変わりました。安心してください。」
「どうもありがとう、来てくれて。」
「いいえ、偶然なんです。」
「偶然？」
「はい、飛行機とぶつかって、ここに落ちて来たんです。」
「そうだったのかい。」
「はい。休ませてもらおうと思って。」
「休んでいきなさい、休んでいきなさい！」
「はい。」
「マユ…じゃなくって、そのミクっていう妖精の話しも聞きたいし。

」
「はい。」
ユミとアンダルシアは、家の中に通された。
ユミは家の中に入って行った。アンダルシアは、土間で佇んでいた。
老婆はアンダルシアを見ていた。
「あんたも入りなさい。」
「足が汚れてますんで。ここで結構です。」
老婆は、雑巾を持って来た。そして、アンダルシアの足を拭いてやった。
「はい、これでいいだろう？」
「じゃあ、お言葉に甘えて。」アンダルシアは、人間の家に入るのは生まれて初めてだった。
妙に感激していた。
「わ〜〜あ、人間の匂いだらけだ〜〜。」
きょろきょろして、周りを見ていた。老婆はユミに聞いた。
「何か飲むかい？」
「お茶をください。」
「そこのあんたは？」
「甘い水があれば。」
「甘い水？ジュースならあるよ。」
「それで結構です。」
老婆は、お茶とグレープジュースを持って来た。
「美味しいわ〜〜。」
「わ〜〜、おいしい！」
アンダルシアは、ブレープジュースを飲むのは初めてだった。
老婆は、おはぎを持って来た。
「お彼岸だからね。マユが好きだったんだよ、おはぎが。」
「ミクも好きです。」
「そうかい、そうかい！」
ユミは食べた。「とっても美味しいです。これは手作りですか？」

とっても大きかった。
「そうだよ。わたしが作ったんだよ。昔のままのやり方でね。」
「田舎の味がします。」
「あんたも、ぼやっとしてないで食べなよ。」
「はい。」
アンダルシアは、一口で食べた。
「うわ〜〜〜あ、甘〜〜〜い！」
「甘いのは嫌いかい？」
「いいえ。」
「それは良かった。何が好きなんだい、あんたは？」
「生肉です。」
「生肉？どんな？」
「何でもいいです。」
「分かった！ユミちゃんは、何がいいの？」
「キノコとか、肉以外は。」
「じゃあ、魚は食べるんだね？」
「はい、少しなら。」
「野菜は好きなんだろう？」
「はい。」
「やっぱり、マユと同じだわ〜〜。」
神主が帰って来た。老婆が事情を説明すると、神主は安易に理解した。さすがに神主だった。
「その翼じゃあ無理だから、治るまでここにいなさい。今日は泊まって行きなさい。」
ユミは、ミクのことが心配だったが、どうしようもできないので、泊まることにした。アンダルシアは、黙って珍しそうに、二人の人間を見ていた。

## 一人ぼっちのミク

その日の夕方だった。
「六時か～～、暗くなって来たな～～、もう無理だな。」
狸山神社の神主は、神社の階段に座って、富士山を見ていた。
「何かあったのかな～～～？もう帰ってもいいころなのにな～～？」
奥さんもやって来た。
「あなた、まだ帰って来ないんですか？」
「ああ、まだ帰って来ないよ。」
「どうしたんでしょうね？」
「何事もないといいんだけどな～～。」
「今日は暗くなったから、どこかで休んでいるんじゃないですか？」
「それだといいんだけど。」
「ミクちゃんの電波では連絡できないんですか？」
「妖精の電波は、せいぜい三キロだよ。遠くには飛ばないんだよ。」
「そうなんですか。」
「それに、ミクに余計な心配をかけることになるしな。」
「そうですね。」
完全に暗くなったので二人は、懐中電灯を持って神社に戻って行った。ミクの巣箱を照らした。
「ミク、大丈夫か？」
「大丈夫。」
「元気ないな～～。」
「まだ熱があるみたいなの。」
神主はミクの額に手を当ててみたいが、とても相手が小さくって無理だった。
「蜂蜜でもどうだ？」
「いらない。」
「そうか…」

奥さんは、神主の後ろにいた。
「何か欲しいものある、ミクちゃん？」
「ない。」
神主は奥さんに命じた。
「ここは俺に任せなさい。おまえは、夕食のこしらえがあるから、管理小屋に戻りなさい。」
「はい。」
奥さんは、キャンプ場に戻って行った。
「ユミちゃんは帰って来たの？」
「それが、まだなんだよ。」
「どうしたのかしら？」
「たぶん、暗くなったから、どっかで休んでいるんだよ。」
「それならいいんだけど。心配だな～～。」
「必ず、明日になれば帰って来るよ。心配するな。」
「そうだといいんだけど。」
「大丈夫だよ。きっと戻って来るよ！」
ミクの次の言葉が返ってくるまで、多少の間があった。
「神主さん。」
「何だい？」
「わたし、一人で大丈夫だから、もう行ってもいいわ。」
「ミクの大好きなコスモスの花を入れておくよ。」
「ありがとう。わたし、一人は慣れてるから。屋根裏にいたときから。」
「屋根裏って？」
「ここに生まれる前は屋根裏に一人でいたの。」
「そうなんだ？」
「だから一人で大丈夫よ。」
「じゃあな。ときどき見に来るよ。」
神主は去って行った。ミクは、小さな声で、ユミと一緒に歌っていた、妖精の仕事歌を歌いだした。数羽のカラスたちが、ミクを木の

上から見守っていた。

ほいほいほいの　ほいほいほい♪

妖精は～盗み合って助け合う～～♪　仲良く盗み合って助け合う♪

こりゃあ～とってもいいことだ♪　ほいほいほいの　ほいほいほい♪

地球をみんなで守りましょう♪　みんなで仲良く取り合えば　平和な世界を築けます♪

ほいほいほいの　ほいほいほい♪

一生懸命に働けば地球の空気が汚れます♪　他の生物殺します♪

だから盗み合って助け合う♪

こりゃあ～とってもいいことだ♪　ほいほいほいの　ほいほいほい♪

欲張って働くと地球の空気が汚れます♪　地球の自然を壊します♪　だから盗み合って助け合う♪

こりゃあ～とってもいいことだ♪　ほいほいほいの　ほいほいほい♪

## アンデスの祭

夕食は盛り上がっていた。
「いや～～～、今日は実にいい日だ！飲みたまえ飲みたまえ、アンダルシア君！」
アンダルシアは、大皿についである酒を嘴で器用に飲んでいた。
「ここは実に素晴らしいですな～～。山はあるし湖はあるし、空気はうまいし。まるでアンデスみたいだ！」
「いいこと言うね～～。その通り、その通り！で、アンデスもこいう感じだったの？」
テレパシーと口との対話だった。人間は口で話していたが、コンドルはそれをテレパシーとして聞くことができた。
「そうです。こいう感じでした。」
「アンデスって言うと、何が名物なんだい？わたしの知ってる限りでは、インカ文明くらいなんだけど。」
「インカ文明は、名物なんかではありません。」
「これはこれは、失礼しました！」
「先ずは、マテ・デ・コカ」と呼ばれているコカ茶です。」
「他には？」
「パンとインカコーラですね。」
「インカコーラは知ってる。日本でも売られているからね。パンは名物なの？」
「はい、美味しいと有名です。」
「知らなかった～～。」
「あとは、アルパカという動物と、わたくしコンドルです。」
「アンデスコンドルのアンダルシア君と、こうして酒を酌み交わすなんて、実に愉快だ！は～はははは！」
神主は、とってもとっても上機嫌だった。
「光栄でございます。」

「あ～～～あ、愉快、愉快！」
ユミは、お茶を飲みながら、冷たい豆腐を胡麻塩を振りかけて食べていた。
「この豆腐、固くて美味しいわ～～。」豆腐は、箸が立つくらいに硬かった。
「固豆腐という田舎豆腐よ。普通の豆腐よりも固くてチーズみたいに、こくがあるのよ。」
「こんな豆腐、初めて食べたわ。」
「アユも好きだったね～～、その豆腐。」
「そうなんですか。」
神主は、今度はユミに目を向けた。
「で、生まれ変わったマユこと、ミクちゃんは、今どこにいるの？」
「狸山というところにいます。産まれて五年になります。」
「やっぱり神社なの？」
「はい。ここと同じように、とってもいい神主さんがいます。」
「そうかいそうかい。それは良かった！」
「じゃあ、その神主さんに、お礼をしよう！後で住所・氏名を教えて。」
「はい。」
「今日は実にいい日だ！コンドルのアンダルシア君と、妖精のユミちゃんと友達になれて！」
「光栄でございます！」
アンダルシアは、けっこう酔っていた。ユミは終始ニコニコしていた。
「また遊びに来てもいいですか？」
「いいよいいよ、大歓迎だよ。こんな田舎の神社で良かったら。」
「おばさん、アユさんは神社の屋根裏にいたんですか？」
「ああ、この時期になるとコスモスの花の蜜を、いつも舐めてたよ。」
「ミクと同じだわ～～～。」

アンダルシアは、アンデスを思い出していた。涙が目に溢れていた。
そして、アンデスの祭りという歌を歌いだした。

太鼓を鳴らし　ケーナを吹いて　行列が行く　緑の谷へ
真っ赤な仮面　きれいなポンチョ　大きな帽子　ゆらゆらゆれる
ほらほら踊れ　今日は祭り　アンデスの春
ほらほら踊れ　今日は祭り　アンデスの春
ラララララ　ラーラ　ラーラ　ラーラ　ラーラ　ラララララ　ラ　ラ　ラー

## コンドルは飛んで行く

アンダルシアは、アンデスの山々を悠々と翼を広げて飛んでいる夢を見た。
朝、目覚めると涙で畳が濡れていた。
アンダルシアは、また夢を思い出し、しくしくと泣き出した。
ユミは、彼の鳴き声で目が覚めた。
「どうしたの、アンダルシア？」
「アンデスにいる、妻や子供のことを、美しい草原や美しい青空や緑の谷のことを思い出したんだよ。」
「奥さんは、どんな鳥だったの？」
「気が優しくってね。気が利くいい女房だったよ。今頃、どうしてるのかな～～～。」
アンダルシアは大声で泣き出した。
「わ～～～～～～ん！」
神主が驚いて二人の寝ていた部屋に入って来た。
「どうしたんだい、アンダルシア？」
「彼、ホームシックみたい。アンデスを思いだして泣いてるの。」
「そうなのかい、可哀想にな～～～。」
神主も悲しくなってきた。
「ユミちゃんは、前世はどこにいたんだい？」
「屋久島という南の大きな島にいました。」
「屋久島か～～～、知ってるよ！」
「知ってるんですか？」
「親戚が屋久島に住んでいるんだよ。」
「そうなんですか！」
「近いうちに遊びに行こうと思っているんだよ。ユミちゃんも一緒に行くかい？」
「はい、是非行きたいです！」

「じゃあ、決まったら狸山の神主に連絡するよ。」
「待ってます！」
「どうだね、アンダルシア君、翼の調子は？」
「良くなったみたいです。もう痛くも何ともありません。」
「それは良かった！」
「朝早く出掛けると昼前には着くよ。はやく、その薬草を届けてやりなさい！」
「はい。」
「彼女が元気になったら、ここに遊びに来るように言ってくれ。」
「はい。言っておきます。」
ユミとアンダルシアは表に出た。アンダルシアは、試しに大きく翼を広げて、数回はばたいた。足が宙に浮いた。
「よし、大丈夫だ！」
神主は見送りに出て来た。
「じゃあ、気を付けてな！」
「はい！」
「神主さん、お酒おいしかったよ～～！」
「大丈夫か？」
「大丈夫です。二日酔いなどはしていません。」
「彼女を乗せて、ちゃんと飛べよ！」
「まかしといてください！」
別れ際、老婆は涙を浮かべていた。
「マユちゃんに、よろしくね。」
「はい。」
「元気になったら、ここに遊びにいらっしゃいと伝えておいてね。わたしが元気なうちに会ってみたいから。」
老婆は、目に涙を浮かべ、遠いところを見ていた。
「はい、ちゃんと伝えておきます。」
「じゃあ、さようなら。」
「さようなら。」

道草神社は、人の来ない淋しい神社だった。でも、それ以上の賑やかな優しさが、人の心に漂っていた。
アンダルシアは、ユミを乗せると、力強く大地を蹴って、大空に舞い上がって行った。

## ただいま〜〜！

お昼過ぎだった。神主の奥さんが、蜂蜜を醤油のミニ容器に入れてやって来た。
「ミクちゃん、レンゲの蜂蜜よ。」
「ありがとう。ユミは、まだ帰って来ないの？」
「もうすぐ帰って来るよ。」
「どうしたのかな〜〜？」
「心配しなくっても、大丈夫だよ。もうじき帰って来るよ。」
ミクは悲しい声で「うん。」と言った。
奥さんは、ミクの悲しい声を聞いて、神社の前の階段まで行ってみた。
「早く帰って来ないかな〜〜。」
遠くから、大きなと鳥が飛んで来るのが見えた。
「コンドルだわ！ユミだわ！帰って来たわ！」
ユミだった。ユミはアンダルシアの羽につかまって、大きく手を振っていた。
「ただいま〜〜〜！」アンダルシアは、神社の前に着地した。
「ただいま〜〜、今帰りました。遅くなって、ごめんなさい！」
「どうしたの？」
「暗くなったんで、途中で休んでいたんです。」
「そうだったの。心配したわ〜〜。」
「ごめんなさい！」
「ミクが待ってるわ。」
「そうだ、薬草、薬草！」
ユミは大きくなって、アンダルシアの首に巻いていたレジ袋を取った。
「これです奥さん！これを煎じてください！」
二本のうち一本を手渡した。

「分かったわ。今すぐ煎じてくるからね！」
奥さんは、管理小屋に向かって走って行った。
「アンダルシア、どうもありがとう！」
「また何かあったら、手助けしまっせ！遠慮するなよ！」
アンダルシアは飛んで行った。
「ミク～～～～！」
ユミは、ミクの巣箱に直行した。
「ミクちゃ～～～ん、大丈夫？」
「ユミ～～～！」
「今帰って来たよ。薬草持って来たよ！」
「どうもありがとう！」
ユミは、マイズルソウの実を二つ摘み取ると、巣箱の中に入れ、自分も小さくなって巣箱の中に入って行った。
「これを食べれば、熱が下がるわ。」
「マイズルソウの実ね？」
「そうよ。」
ミクは食べ始めた。
「どこまで行ったの？」
「富士山。」
「富士山まで行ったの？」
「そうよ。」
「凄いわね～～～。どうやって行ったの？」
「コンドルという大きな鳥と友達になって、彼にに乗って行ったの。」
「コンドル？」
「アンデスにいる、とっても大きな鳥よ。今、狸山にいるの。」
「見てみたいわ～～～。」
「元気になったら、紹介するわ。」
「早く元気になりたいな～～。」
「ミクの前世の神社にも行って来たわ。」

「ほんと！？」
「道草神社っていう神社でしょう？」
「そうよ。」
「大きな湖があるところでしょ？」
「そうよ。」
「ミクの前世の名前は、マユ！そうでしょう？」
「そうよ。」
「アユっていう、おばあさんもいたわ。」
「え～～～ほんと～～！？」「ほんとよ、九十七歳だったけど元気だったわ。」
「アユちゃん、まだ生きていたんだ！」
ミクは、前世の自分と仲良しだったアユのことを思い出し、しくしくと泣き始めた。
「アユちゃ～～～ん、逢いたいよ～～～！」
「元気になったら、遊びに来てねって、言ってたわ。」
「早く元気になって、行ってみたいわ～～。」
ミクは懐かしそうに宙を見てた。
「アユちゃんのこと、思い出したの？」
「うん。」
「どんなこと？」
「石蹴りや鬼ごっこや隠れんぼをしたり、おはじきやあやとりをしたり、松ぼっくりを投げ合ったり、山ぶどうを取りに行ったり、とっても楽しかったわ～～～！」
ユミはミクの思いにふける顔を見ていた。
「アユちゃんがいなかったら、わたし死ぬまで、きっと一人っきりだったわ。」
「早く元気になって、アユちゃんに逢いに行こうよ。」
「うん！今度は、ユミの前世のこと話して。」
「屋久島のこと？」
「そう。」

ユミの長い長い屋久島の話しが始まった。

## 炭焼きキノコ

神主の奥さんが持って来た煎じたマイズルソウの葉を飲んだ後、ミクは寝入ってしまった。
「きっと、ユミちゃんが帰って来たので安心したのね。」
ユミは、ミクの隣に寝ていた。
「ユミも疲れたでしょう。」
「はい。」
「ゆっくり寝なさい。」
「はい。」
「おやすみ。」
奥さんは帰って行った。
「ミク、ゆっくり休みなさい。寝たら良くなるわ。」
五歳年上のユミは、まるで母親のように、ミクを見ていた。
ユミも、帰って来て安心したのか、寝入ってしまった。
目が覚めると、夕方になっていた。隣を見ると、ミクがいなくなっていた。
ユミは慌てて起き、巣箱の玄関から首を出して外を見た。
「ミク～～～！」
ミクは、半壊している神社の渡り廊下の中で、大きくなって美味しそうに、巨峰を食べていた。
「ユミちゃん、薬草のおかげで、熱は無くなったわ。もう大丈夫よ。」
「わ～～～、良かった～～！」
ミクは、嘘のように、すっかり元気になっていた。
「ミクちゃん、ハンペンのバター醤油焼き、食べる？」
「うん、食べる！」
ユミは、早速、イチョウの木の下で、七輪を出して、隠しておいたハンペンを三枚焼き始めた。

ミクは横で見ていた。
「椎茸を神主さんにもらったの。椎茸も焼けば美味しいわ、食べる？」
「うん、食べるわ！」ミクは食欲があった。
「どうして、三枚焼いてるの？」
「一枚は、アンダルシアの分。」
「アンダルシアって？」
「コンドルのアンダルシア。」
タイミングよく、アンダルシアが舞い降りて来た。
「やあ、こんばんわ。またハンペンを焼いているのかい？」
「そうよ。一枚は、あなたの分よ。」
「これはこれは、ありがとさん！」
「この鳥が、コンドルのアンダルシア？」
「そうで～～す。おいらが、コンドルのアンダルシアでえす！」
アンダルシアは、いたって陽気だった。
「わたしはミク、あなたが運んでくれた薬草のおかげで、こんなに元気になったわ。とってもありがとう！」
「どういた～しまして！元気になって、おいらも嬉しいよ！」
「焼けたわ！」バターと醤油の焦げた匂いが漂っていた。
「わ～～～、美味しそうな匂いだな～～！」
少し冷ましてから、ミクとアンダルシアに箸で渡した。
アンダルシアは、ぺろっと一口で食べた。ミクは、手でつかみ美味しそうに上品に食べていた。
椎茸も焼いていた。
「七輪の炭で焼いた椎茸は、とっても美味しいのよ。」
アンダルシアは、「そんなのいらない！」と言って、飛んで行った。
「じゃあ、はい、ミク！」
醤油も何もつけずに箸で渡した。
「わ～～～あ、美味しいわ～～～！」
「キノコはやっぱり、こうやって何もつけずに焼いて食べるのが一

番ね～～！」
「その通りです！」
妖精たちは、キノコを焼いて食べるのが大変好きだった。
「道草神社にいたときも、アユとこうやって、よく食べてたわ～～！」
妖精たちは、外で風と語らって楽しく食べるのが大好きだった。

## 採用決定！

森本は、夕食を食べながら、しきりにぼやいていた。
「どこかに、検索の上手い人間はいませんかね～～～。」
龍次父さんが尋ねた。
「どうしたんですか？」
「いやね、うちの会社の連中ときたら、インターネットの検索が下手なんですよ。それを思い出しまして。」
「そうなんですか。」
「これからは、検索が的確で早くないとね～～、駄目ですね。仕事になりません。」
「うちの一男、超早いですよ、検索。」
「そうなんですか？あれって、将棋のように、先を読む力が必要なんですね。」
「うちの一男、将棋は強いです。なあ、一男！」
「まあね。」
「じゃあ、会社が復活したら、うちの会社に来てくれないかな～～～。」
龍次父さんは、多少うろたえた。「えっ、そうですか！？」
「はい、本気です。困ってるんですよ。即戦力だったら、即採用です。」
「なっ、一男、おまえ検索、得意だよな？」
「うん、得意だよ。学校じゃあ、検索の鬼と言われているよ。」
森本は、手をポン！と叩いた。
「じゃあ、即採用ですね！」
「えっ？」
「足腰は強いですか？走るのなんかは？」
「運動は得意です。百メートルだったら、十二秒台で走ります。」
「そいつは凄いや！即採用ですね！」

龍次父さんが尋ねた。
「テレビ局と、百メートルと、どう関係があるんですか？」
「カメラマンをやってもらおうと思いまして。」
「カメラマンを？でも、そういうテクニカルなことは、一男はできませんよ。」
「できなくっていいんです。若い人だったら、カメラの操作なんて、すぐにできるようになります。問題なのは体力なんです。走る体力がないとテレビカメラマンは勤まらないんですよ。カメラマンの学校を出ても、体力がないと駄目なんです。」
「なるほど、そういうことですか。だったら、一男は適任だな～～～。」
森本は、一男に頼んだ。
「今、高校何年生？」
「三年です。」
「検索は上手いし、足は早いし、是非うちの会社に来てくれませんかね～～？」
「専門学校に行こうと思ってたんです。」
「何の？」
「インターネットの。」
「そんなの駄目だよ。出ても役に立たないよ。」
「そうなんですか？」
「ああ、プロが言うんだから、間違いないよ。」
龍次父さんは喜んでいた。
「一男、いい話しじゃないか。専門学校は止めにしろ！」
一男は少し考えた。
「そうだね、専門学校は止めにするよ。」
森本は、またも手をポン！と叩いた。
「決まった！じゃあ来年、会社で待ってるよ！」
「あっ、はい。」
「正式な連絡は、決まったら電話で知らせます。わたしが、採用の

責任者ですから安心して待っててください。」
「はい。よろしくおねがいします！」
「良かったな〜〜、一男！」
「うん！」
黙って聞いていた母と妹の幸子は、目を丸して手を叩いて喜んでいた。

## 買い物

次の日の正午過ぎだった。
ユミとミクが、椎茸を七輪の炭で焼いて食べていると、神主がやって来た。
「おいしそうだね～～。」
「はい、とっても美味しいです。」
「ほっぺが落ちるくらい、美味しいです。」
神主は、レジ袋に何かを持っていた。
「トウモロコシが余ったので、あげるよ。」
トウモロコシは切って三センチほどのものだった。
「わ～～～、美味しそうだわ～～。」
「どうもありがとう。神主さん！」
二人は、風と語らい、お茶を飲みながら焼いた椎茸を食べていた。
早速、トウモロコシを焼き始めた。
神主は、真面目な顔になっていた。
「ユミ、頼みがあるんだけど。」
「何ですか？」
「食料が無くなってきてね～～、近くには売ってないんだよ。コンドルに乗って買い物に行ってくれないか？」
「はい。何を買いに行けばいいんですか？」
「肉か魚を頼むよ。」
「分かりました。」
神主は、五千円手渡した。
「お釣りは、ちゃんと持って来てね。」
「はい。」
「あっ、それから、コンドル君にキャンプ場に来て、みんなに挨拶していただくと、説明するのに助かるんだけど。」
「分かりました。アンダルシアに伝えておきます。」

ユミは、アンダルシアにテレパシーを送った。彼は、すぐにやって来た。
「買い物には行くけど、キャンプ場の人たちに、挨拶？」
「あなたを、友達にしないと、説明できないんじゃない？」
「そういうことか。分かった、挨拶に行って来るよ。」
「ここに戻って来てね。」
アンダルシアは、キャンプ場に飛んで行った。

キャンプ場で、みんなが食事をしていると、コンドルが飛んで来て、みんなの前に舞い降りて来た。
みんなは驚いた。
「なんだ、なんだ！？」「なに～～～！？」
アンダルシアは挨拶した。
「はじめまして。」テレパシーでの挨拶だった。みんなは聞こえていた。
「おいら、アンダルシア。あなたたちの買い物に行って来ます。」
そう言うと、飛び去って行った。
森本は驚いていた。
「なんだい、あれは？夢でも見たかな？」
みんなは、「夢じゃない！夢じゃない！」と叫んでいた。
神主が説明に入った。
「実は、わたしの神通力で、彼に頼んだんでしすよ。」
「神通力で？」
「はい。」
みんなは、半信半疑だったが、実際に見て聞いたので、信じた。
「世の中には、不思議なことがあるな～～。」
みんなも、しきりに首を傾げていた。

アンダルシアは戻って来た。
「挨拶して来たよ。」

「ごくろうさま！じゃあ、早速行きましょうか？」
「オーケー！」
「お礼は後でも、いい？」
「いいよ。」
アンダルシアは、ユミを乗せ、大空に舞い上がって行った。
「ユミちゃ～～～ん、いってらっしゃ～～～い！」ミクが大空に向かって叫んでいた。晴れていた。

## 花の首飾り

日曜日がやって来た。朝の十時だった。大地震と大津波から、一週間が経っていた。空は、からっところっと、ビンセント・ファン・ゴッホの絵のように晴れ渡っていた。
森本は地平線沿いの空を見ていた。「救援隊のヘリ、来ないな～～。」
狸山に通じる道は寸断されたままだった。龍次父さんも、空を見ていた。
「こんな小さなところまでは、手が回らないんじゃないでしょうか？」
「きっと、そうなんでしょうね。」
森本は、何だかいらいらしているようだった。
「いったい何やってるんだ、会社の連中は！？」
「うちもそうです。まったく音沙汰がありません。」
「もう、一週間ですよ。まったく腹が立つな～～。」
大地震と大津波で、人間たちは戦意を失っていた。いっこうに復興ははかどっていなかった。
森本は思わず悪態を付いた。「このままじゃあ、日本は終わりだな。」
森本は、下界を見に神社の階段のところに向かった。
神社の奥の方に、七歳か八歳くらいの小さな少女が二人、花摘みをしてるのが見えた。
「近所の農家の子供だな。」
森本は近寄って、声をかけた。
「何をしているの？」
ユミが答えた。
「花をつんでいるんです。」
「花の首飾りでも作ってるの？」

「花の首飾り？」
「白鳥にならないようにね。」
「えっ？」
どうやら違うようだった。森本は、家に持ち帰って飾るんだろうと思った。
「こんなときに、やっぱり子供だな～～。」
二人は、一生懸命に花を選んでいた。
「蛇に気をつけるんだよ。」
「は～～～い！」
森本は階段に向かった。
「まったく可愛いな～～～。」
誰もいなかった。下界を見た。
依然として瓦礫の町だった。
「ちっとも、進んでないな～～～。」
なんだか侘しくなってきたので、キャンプ場に帰ることにした。
その時、ヘリが飛んで来るのが見えた。
「あっ、ヘリだ！」
上空を通り過ぎて行った。
「なんだ、ＮＨＫのヘリか。やっぱり、ＮＨＫは組織網が強いな～～。」
キャンプ場に向かった。
向かう途中、森本は、一世を風靡し少女たちを熱狂させていた、タイガースの超有名な曲、花の首飾りを思い出した。森本は歌いだした。

花咲く娘たちは　花咲く野辺で
　ひな菊の花の首飾り　やさしく編んでいた
おお　愛のしるし　花の首飾り
花つむ娘たちは　日暮れの森の
　湖に浮かぶ白鳥に　姿をかえていた

おお　愛のしるし　花の首飾り

## 純愛

森本は歌いながら帰って来た。
龍次父さんは、その歌を聞いていた。
「おっ、ジュリーの歌だ！」
「はい、そうです！」
「若いのに、よく知ってますね～～？」
「ポップスの原点であり教典ですから。」
「ああ、そうなんですか？」
「はい、これを知らないと、日本のポップスは語れません。」
「なるほど～～。僕は、どっちかというと、ショーケンだったな～～。」
「埼玉のストーンズ、テンプターズですね！」
「まあ、そうかな？」
龍次父さんは、テンプターズの有名な曲・純愛を歌いだした。

腕に傷をつけて　腕と腕を重ね
　若い愛の血潮　わかち合った恋は
　　誰も　誰も　こわせはしない～～♪

尻切れとんぼで終わった。
「なかなか、お上手ですね～～～！」
「この部分だけね。ほんとは音痴なの。長く歌うとボロが出るの。」
「ははは、そうなんですか？」
「歌はセンスですね。難しいです。」
「歌は、テクニックなんかじゃなくって、気持ちで歌うんですよ。」
「気持ちですか？」
「はい、感情を込めて歌えば、誰でも上手に歌えます。」
「な～～るほど。今、ヘリが飛んで行きましたけど？」

「あれは、ＮＨＫのヘリでした。」
「なんだ、がっかり！」
「でも、この場所を知らせてくれたら、救助隊を派遣してくれるかも知れません。」
「そうですね。」

その頃、ユミとミクは、相変わらず花を摘んでいた。
神主がやって来た。
「お風呂が沸いてるよ。入りなさい。」
「は～～い」「は～～～い！」
二人は、離れの風呂場に行った。服を脱いで、お風呂に入った。
「気持ちいいわね～～。」「一週間振りだわ～～。」
妖精は、人間よりも身体が綺麗なので、お風呂には、あまり入らなかった。
風呂場の上部は、プラスチックで透明だった。コンドルのアンダルシアが飛んでいた。
「さっきの人、変なこと言ってたわね～～、花の首飾りがどうとか？」
「そうだね。」
「何のことかしらね？」
「何のことでしょうね？」
「あっ、アンダルシアだわ！」
「彼って、暇鳥ね～～。」
「いつか、夜に入って、星や月を眺めたいわね～～。」
「それはいいわね～～～。」
「ミク、純愛って知ってる？」
「純愛？」
「見返りを求めない愛。」
「純愛…、でも、それって難しいわね。」
「そうね。」

ユミは、ミクが好きだった。それは、決して見返りを求めない愛だった。

「ミク、元気になって良かったね！」

「うん！」

## ポン太の悔し涙

お昼になった。キャンプ場で、みんなが食事をしていると、ダブル・ローターのヘリが飛んで来た。
森本は叫んだ。「ヘリだ！」
龍次父さんは、ヘリを確認していた。「アメリカ軍の軍用輸送ヘリだ！」
ヘリは、キャンプ場の誰もいない上空で、ホバリングすると、スライドドアを開いた。
軍人が手を振っていた。パラシュートで物が落とされた。五個落とすと、ヘリは去って行った。
「救援物資だ！」
みんなは走った。それに向かって。
物資は、バックルで止めてあった。そのバックルを外して行った。
中から、色んな物が出てきた。お米や小麦粉や粉ミルクや砂糖や塩や、クラッカーや缶詰や乾燥肉や乾燥魚や乾燥野菜乾燥果物、キャベツや食パン、お菓子やキャンデーも入っていた。携帯ラジオや懐中電灯も入っていた。
幸子は、お菓子を見て大喜びしていた。
「わ〜〜〜、お菓子も入ってる！」
みんなは、手分けして整理した。森本の隣には神主がいた。
「これで、一週間は大丈夫ですね！」
「そうですね。」
みんなの表情に笑顔が戻っていた。

ユミとミクは、昼食の後、仲良く二人で、お茶を飲んでいたら、やもめ狸のポン太がやって来た。
「やあ、こんにちわ。」
「こんにちわ。」「こんにちわ。」

ポン太は、元気なミクを見るのは初めてだった。
「元気そうだねえ、ミクちゃん。」
「ポン太さんがいなかったら、わたしきっと死んでました。ほんとうに、ありがとう！」
「元気になって、良かった！」
「ポン太さん、お茶飲みません？」
「お茶？あ～～、よく人間が飲んでるやつね。」
「そうです。飲みます？」
お椀があったので、それに注いだ。
「はい、どうぞ！」
ポン太は舐めて飲んだ。
「う～～～ん、なんちゅうか、変な味！」
ポン太は、お気に召さないようだった。
ユミは、草むらからレジ袋を取って、中から柿を取り出した。
「これなら、どう？」
「おっ、柿だ！渋柿じゃないよね？」
「甘柿です。」
「こいつはいいや！今食べてもいいかい？」
「どうぞ、お召し上がりください。」
ポン太は、おいしそうに食べ始めた。
「山の散歩なら、いつでも背中に乗せてってあげるよ。」
「ありがとう。」
「昔は、この山のふもとも林があったんだがね～～、すっかり人間どもの家だらけになっちまって。」
「そうですね～～。」
「人間なんて、みんな死んじまえばいいんだ！」
ポン太は、急に泣き出した。
「友達も、人間の自動車に敷かれて死んじまったよ～～！」
ユミとミクには、言葉が無かった。
「やつら、人間に役に立たない動物は死んでもいいと思ってる。役

に立つかどうかを人間が勝手に決めてもいいのかい？神様が決めるんじゃないのかい？」

ポン太は、悔し涙を流しながら帰って行った。

## ホイホイ星人

夕方近くだった。日が沈もうとしていた。
ユミは、大きなイチョウの木の上で、何かを一心に祈っていた。
「何を祈ってるの、ユミ？」
「神様に頼んでるの。人間を救ってください。新しい勇気と希望を与えください。って。」
「じゃあ、わたしも祈ろう！」
二人は、下界の瓦礫を見ながら、大空を見ながら祈っていた。
突然、見ていた空にユーフォーが現れて、こちらにやって来た。そして、神社の前に着陸した。
ユミとミクは驚いて、下に降りていった。
ユーフォーは円盤で、ちょっと大きな炊飯器くらいの大きさだった。
不思議なドアが開き、中から小さな人間が二人出てきた。
「宇宙人だわ！」「わ〜〜〜！」
「わたしたちと同じくらいの大きさだわ！」
ミクはびっくりして、宇宙人を凝視していた。信じられず、しきりに目をこすっていた。
宇宙人は、妖精よりも少し低く、八センチくらいの大きさだった。
先頭の宇宙人が、テレパシーで交信して来た。
「われわれは、アンドロメダ星雲のホイホイ星からきた者である。わたしの名は、ゾルビ。はじめまして。」
ユミは、ホイホイ星という言葉に親近感を覚えた。
「わたしは、地球の妖精でユミ。この子は、同じく妖精でミク。はじめまして。」
「なんだ、妖精だったのか。」
「妖精じゃあ、ご不満ですか？」
「これはこれは失礼！ちっとも不満じゃないです。」
「で、ここへは何しに？」

「君たちのテレパシーが聞こえたんだよ。人間を救ってくれというテレパシーがね。」
「ああ、それは神様に送ってたんです。」
「神様なんて、どこにもいないよ。わたしは見たことないってことだけどね。」
「神様は目には見えないんですよ。でも、ちゃんといます。」
「さすが、われわれとは産まれが違う、大地の子だな〜〜。」
「神様の悪口を言うと、撥が当たりますよ。」
「分かった分かった、もう神様のことは言わないよ。」
「じゃあ、ホイホイ星人さん。同じ人間の仲間として、地球人を助けてくれません？」
「実は、地球人はわれわれが造ったんだよ。」
「え〜〜〜〜〜！？」
「とんだ失敗作になっちまったようだな。欲ばかり強くて、プライドばかり高くて。」
「え〜〜〜、そうなんですか！？」
「助けようたって、こうなったらどうしようもないよ。地球人の裁量次第だな。」
「な〜〜〜んだ、がっかり！」
「君たちは面白い妖精だね。また遊びに来るよ。何か困ったことがあったら、テレパシーで呼んでね。」
「もう帰るんですか？」
「じゃあね！」ホイホイ星人は去って行った。
「ミク、ほっぺをつまんでくれない？」
「ユミ、わたしのもつまんでくれない？」
ユミとミクは、何度もほっぺをつまみ合っていた。

## ソーラーランタン

夕方遅くだった。神主は、ソーラーランタンを持って、ミクの巣箱にやって来た。それを、巣箱の上の枝にぶら下げた。
ユミも巣箱に一緒だった。
「わ～～～明るいわ～～！」雑巾のドアから、顔を出した。神主を見た。
「なあにこれ、神主さん？」
「ソーラーランタンっていうもの。電池のちょうちんだよ。」
「これ電池で光ってるんですか？」
「そうだよ、暗くなると自分で点くんだよ。太陽の光で電気を貯めてね。」
「凄いわ～～～。誰が作ったの？」
「知らないけど、人間が作ったんだよ。」
「人間って凄いのね～～。けっして失敗作なんかじゃないわ。」
「失敗作？」
「さっき、宇宙人がやってきて、人間は自分たちが作った失敗作って言ったんです。」
「宇宙人が来たの？」
「はい、その宇宙人、わたしたちよりも小さかったの。」
「ほんとうかい？」
「ほんとうよ、神主さん。」
「どうして宇宙人が来たんだい？」
「神様を呼んでたら、宇宙人がやって来たの。」
「じゃあ、間違えて来たのかな～～？」
「そうみたい。」
「宇宙人が来たとは驚いたな～～。」
神主は言葉ほど驚いてはいなかった。
「ここにいたら、そういうこともあるよ。」

最近は、そう感じていた。
「ミクは、すっかり元気になったみたいだね？」
ミクの声だった。
「はい、もうすっかり元気になりました。」
「良かった、良かった！」
「神主さん。」
「何だい？」
「今度、富士山の近くの道草神社に遊びに行ってもいいですか？」
「何だい、そこは？」
「わたしがここに生まれる前に生きてたところです。」
「つまり、前世の場所ってことかね？」
「そうです。」
「行ってもいいよ。でも、絶対に帰っておいでよ。わたしが寂しくなるから。」
「絶対に帰って来ます。」
「じゃあ行ってもいいよ。」
「わ～～～嬉しい～～！アユちゃんに逢えるわ～～！」
「アユちゃん、って？」
「前世の仲良しの友達。」
「それは楽しみだね。」
「はい。」
ユミが神主に言った。
「じゃあ、明日出発してもいいですか？」
「明日？気が早いな～～、ユミもいなくなるのかな？」
「はい、一緒に行きます。ミクだけじゃあ、場所が分からないんです。」
「そうか、そういうことじゃあ仕方ないな。」
「じゃあ、わたしも行ってもいいんですね？」
「仕方ないよ。行ってらっしゃい。」
「おみやげ持って来ます。」

「そんなのはいいよ。帰って来てくれれば、それでいい。で、明日の何時に行くの？」
「それは、アンダルシア次第です。」
「そうか、そういうことか。」
二人は喜んでいた。明日が楽しみで仕方なかった。神主は、寂しかったが堪えていた。
ぶら下げたばかりのソーラーランタンが、明るく巣箱を照らしていた。

## カラスが鳴いていた

次の日の朝がやってきた。朝六時だった。
「これ、持って行きなさい。」
「五千円も！？」
「いいんだよ。」
「お金あるんですか？」
「このくらいの金は、いつでもあるさ。」
「ありがとうございます。」
ユミとミクを乗せたアンダルシアは飛び立った。
神主と奥さんは見送っていた。
「気をつけてね～～～！」
「必ず帰ってこいよ～～！」
アンダルシアの首には五千円の入った財布がレジ袋に入れられ、首に巻かれていた。
ユミとミクは、アンダルシアの首の羽に掴まっていた。
「ミク、大丈夫？」
「大丈夫よ！」
「神主、五千円もくれちゃったよ。」
「五千円もあれば安心ね。」
「そうだね。どうせ、アンダルシアの餌代になるけど。」
アンダルシアは、上昇気流に乗って、どんどん上昇して行った。
「うわ～～～、高いわ～～！」
「ミク、しっかり掴まってなよ！」
「分かったわ～～！」
「アンダルシア、飛行機には気をつけてね！」
「もう、へまはしないよ！」
道草神社に着いたのは、お昼前だった。ちょうど、神主が落ち葉を竹箒で掃いていた。

近くに舞い降りた。神主は驚いた。
「お～～～～！？」
アンダルシアはテレパシーで挨拶した。
「こんにちわ～～、また来ました。」
「アンダルシア！」
ユミとミクは大きくなって現れた。
「こんにちわ、神主さん！」
「お～～、ユミちゃん！」
「はじめまして、神主さん！」
「この子は？」
「アユちゃんの生まれ変わりの、ミクです。」
「あ～～、この子がミクちゃんね。ちょっと待ってね。」
神主は神社の裏の自宅に駆けて行った。
「お婆ちゃ～～ん！」
老婆が、とぼとぼとやって来た。
ミクを見て足を早めた。
「マユ～～～～！」抱きついて来た。涙を流していた。
年取ったアユを見て、ミクは戸惑った。
「アユちゃんなの？」
「そうよ、アユよ！マユちゃ～～ん、ちゃんと生まれ変わって良かったね～～！」
ミクは、そっくりというより、そのままマユだった。妖精は、姿形は同じに生まれ変わるのだった。
「うわ～～、ほんとうにマユだわ～～！わたしのこと覚えてる？」
「ええ、ちゃんと覚えています。」
「よく石蹴りして遊んだよね～～。」
「はい。」
「よく椎茸を焼いて食べたよね～～！」
「はい。」
ミクは、年取って皺(しわ)だらけになっているアユを見て、涙ぐんでいた。

神主は促した。
「積もる話しもあろう。家に入って話そう。さあ、お入り、お入り！」
みんなは家に向かった。
神社の屋根でカラスたちが鳴いていた。アンダルシアが、「ホエッ！」っと鳴くと逃げて行った。
「カラスは、どこにでもいるんだな〜〜？」

## 鬼妖精

ミクは、玄関の前で立ち止まった。
「ちょっと待ってください。マユちゃんの、お墓参りをしてからでいいですか？」
神主は、うっかりしていた。
「ああ、いいよ、いいよ。」
みんなで、マユの墓に向かった。
老婆のアユが指し示した。
「ここよ、マユの墓は。」
それは、石が積んであるだけの粗末な墓だった。
「マユはね、お墓なんていらない。って言ってたんだけどね。」
ミクは、お礼を老婆に言った。
「どうもありがとうございます。とっても喜んでいると思います。って、わたしですけど。」
みんなは、少し笑った。
「ここに埋めたんですか？」
「そうよ。ここに埋葬したのよ。」
「でも、ここにはもう何もありません。」
「どうして？」
「妖精は、一週間くらいで、土になるんです。」
「ああ、そうだったの。」
みんなは、手を合わせた。
「なんだか、自分に手を合わせるって、変だわ。」
みんなは、少し笑った。
アンダルシアは、しみじみと景色を見ていた。
「いや～～～、ここは実にいいところですな～～。緑の山々、藍色の湖。空気は旨いし、まるでアンデスみたいだ！」
ミクは、玄関の前で、またしても立ち止まった。

「神主さん、昔遊んでいた場所を先に見てみたいんですけど、いいですか？」
「あっ、いいよいいよ。」
ミクは神社の周りを、懐かしそうに見ながら歩き始めた。ユミが質問した。
「ミクちゃん、屋根裏って、どこの屋根裏にいたの？」
「あそこよ。」
そこは、神社の本殿の屋根裏だった。
「あそこか～～。」
「何もかも、昔と同じだわ。」
ミクの目は、涙で潤んでいた。
「ここから眺める景色も、ほとんど昔と同じだわ。」
神社の屋根に、カラスたちが止まっていた。
「カラスも、昔と同じだわ。」
老婆が促した。
「マユちゃん、この続きは、また明日にでもしましょう。」
ミクは素直に応じた。
「はい。」
みんなは、家に入って行った。
老婆は、自分とマユが写った写真を持って来た。みんなに見せた。
「これが、マユちゃんよ。」
マユの両耳の近くには、鬼のように角が生えていた。ユミは落ち着いて見ていた。
「鬼妖精だわ！」
「そう、わたし昔は、鬼妖精だったの。」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1307x/

狸山の謎の少女

2011年10月20日05時15分発行